

---

# 彼女は気になる料理人

永島園子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女は気になる料理人

### 【Nコード】

N5371X

### 【作者名】

永島園子

### 【あらすじ】

※11月14日、筆名を変更しました。

※10月14日、タイトルを変えました。

十九世紀のイギリス、女性が社会的に自立する事が非常に困難な時代に、ちよつと風変わりなやり方で自分なりに変革の道を探るマーガレット。破綻した実家を立て直した貴族の息子ロバートは、マーガレットに大いに興味を持つのですが……

※実在の人物の逸話なども取り入れてはいますが、無論完全なフィクションです。不勉強、理解不足などなど有るかと思いますが、感想などで御指摘いただければ助かります。

気分は「目指せ、ヴィクトリアンなヒストリカルロマン！」です。

## 出会い・1

「やってられないな」

忠実な従僕はシルクのローブにスリッパという格好の主人が立ち上がりざま、最新版のタイムズを乱暴にフットスツールに投げつけたので少々驚いた。いつも落ち着いた挙措動作の主人には全く珍しい。よほど記事の内容が不愉快であったのだと思われた。

彼の主人は三十五歳で決して老人ではないが、若者とは言えない。一昔前の貴族の基準で言うなら、妻子がいて当然な年齢だ。主人は十年以上にわたって多くの高貴な御婦人方をやきもきさせてきた。誰もが認める由緒正しい家柄と申し分の無い財産だけでも十分に望ましい結婚相手には違いないが、主人はそれ以上の良い条件を備えた人物だと言える。何しろ一旦破産状態に陥った生家を建て直し、更には資産を着実に増やしている見事な手腕は、何かとうるさい年配の御婦人ばかりか多くの貴顕紳士からも一目置かれているのだから。

「お前も読んでみるがいい、ラドストック」

主人はコーヒーを飲み終って、寝室を出た。そして支度を整え、素材も仕立ても最高級のフロック・スーツを身にまとうと、キーネス侯爵家のロンドンにおける住まいであるレイストン・ハウスに向った。男らしく均整のとれた健康な肉体と、高い知能をうかがわせる秀でた額、形の良い眉と漆黒の長いまつ毛、軽くウェーブのかかった艶やかな黒い髪、どこか謎めき、時に悪戯っぽくも感じられる鋼色の瞳……ロンドン中のすべての女性が美男子と認める風貌ではないかもしれないが、その魅力的なバリトンと優雅な挙措動作で多くの人の目を引き付ける特別な存在であることは確かだ。

これから何か相続に関する重要な話し合いがなされるらしいが、従僕であるピーター・ラドストックには細かい事情までは分からない。主人の父・キーネス侯爵マイロン・ボーダナムには嫡男子が二人いるが、主人は次男であるため爵位は無い。ただ、兄のセルビー伯爵クライブ・ボーダナムは幼少期に患った熱病のために子供が望めないらしい事、キーネス侯爵の度を越した浪費で破産しかけた家を実際に建て直したのは、主人であるロード・ロバートである事はかなり知られている事実だ。

つい先日から、セルビー伯爵は高熱を発して寝たきりになってしまったらしい。妻もいない、子もない伯爵にもしもの事が有れば、主人は兄の爵位を継ぐ。

ロバートは大学を高位の貴族の子息としては珍しく極めて優秀な成績で卒業した後、「いわば一種の運試し」で新大陸に渡り、かの地で幾つかの有望な新しい産業に関わり、適切に投資した事で、大きな富を手にした。事業家としての手腕は、かの高名な欧州を代表する銀行家からも一目おかれていると言う評判を、ラドストックも時折耳にする。

「うっとうしいばかりだと思っていた実家の名前も、金策にはちょっとばかり役に立ったりするんでね、以前ほどは嫌じゃない」などとロバートは笑うが「実家の名前を抜きにしてもロバート・ボーダナムは優れた事業家だ」と言う新聞記事を、ラドストックは切り抜いて保存してある。自分の主人に関わりのありそうな新聞記事を切り抜き保存するのは、執事の仕事を務める上で必要だと思うからだが、ラドストック個人にとっても密かな楽しみであった。

だが、確かに主人が朝刊を投げ出す原因になった女性参政権に関する記事は、実に過激であった。

女王陛下は仰ぎ見る高貴な方だが、輔弼の臣は皆それ相応に有能な男ばかりだから良いのだとラドストックは思っている。国会議員の半数を女にするだの、女の首相も将来は有り得るなどと言うのは、ごく一部の女権論者の過激な妄想としか受け止められない。

その主張は、男女の差別を認めるべきではなく、夫が妻に対する権威を持つべきだとする従来 of 社会通念こそが全ての社会悪の根源であるとしていた。夫と妻は互いに完全に平等であるべきで、厳密な意味で男女相互に奉仕し、献身するのは性別にかかわらず義務である。幸福な結婚においては『従属』とか『優越』という問題はない、と言った具合だ。女ももっと大学への入学を認められるべきであり、相続も男女完全に平等でなければならぬと言うのだ。

このような事がまかり通れば、長子相続で受け継がれてきた英国貴族の伝統は崩壊し、紳士淑女の有りようも自ずと変質してしまうと言う点は、ラドストックにも十分理解できた。そして、そのような変化は彼には耐え難いものに思われたのだった。

「幸福な従属こそ多くの御婦人方の求める理想であり、権威を備えた夫の妻となって夫の優越を心穏やかに受け入れられるような状況は、妻にとってむしろ望ましいはずだ」と言う主人の意見は、ラドストック自身の意見でもあった。男は男らしく、女は女らしく有る事の何が宜しくないのか、さっぱり彼には分からないのだ。

尊敬できる立派な夫に大切に扱われる事こそ、レディの、いや女の幸せなのではないかと……ラドストックは思うのだ。だが「女の権利」や「婦人参政権」を強く主張するレディは少しずつでは有るが、増えてきている。彼女たちは頭でっかちで理屈っぽくて、地に足がついていない危うさが有る。確かに男にこびて春をひさぐ女などよりは学問も有って立派なのかもしれないが、レディらしい優雅な美しさを損なうような行動や言葉に対しては、どうしたってラドストックは否定的になってしまう。

サミュエル・ジョンソンの「男というものは、普通、食卓で御馳走にありつける方が、自分の妻がギリシア語を話すことよりも嬉しいものだ」という言葉は全く正しいとラドストックは思う。正直な話、そのように思う男が大半だろう。そして「結婚は多くの苦悩を生むが、独身は何の喜びも生まない」という言葉も……。

もうすぐ三十五歳と言う主人の年齢は、どうしたって周囲は結婚を意識せざるを得ない。これが更に子のいない兄の後継者と決まったりすれば、結婚は重大な義務だと言える。

「何とかして素晴らしいレディを奥方様にお迎え頂くように、力を尽くさねば」

結婚適齢期の令嬢方に関する情報を収拾するのも自分の役目だとラドストックは考えている。

主人は迷惑がるだろうが、確実に目的を果たすべく、積極的な活動を始める事にしたのだ。従僕とはいえこの独身の主人が住む快適だが小ぶりの邸では、ラドストック以外の使用人は三十代の御者と料理から家の清掃・洗濯一切を行う年配の姉妹だけであり、実質彼が執事の役を果たしているのだった。

主人の実家はロンドンでも有数の大邸宅であって、かつては奉公人が三百人ほどもいたが、今は百人程度だ。それでも執事の上に家令がおり、調理人はフランス人という最上流の貴族の格式は今も守られている。それが出来るのも、主人のおかげなのだが、最大の功労者である主人は爵位を一種の枷のようなものと見なしているようだし、伝統ある大邸宅も「給湯設備が無いし、使い勝手が悪い」と好まないようだ。侯爵家の従僕であることに誇りを持っているラドストックには、その事が少々残念でもある。

「まずはアフトン公爵様のお邸に伺わねば」

公爵家の家令はラドストック自身の親戚筋にあたり、普段から様々な事を相談している仲だ。更にはアフトン公爵の長女であるレディ・バーバラは交際が広く、本人が見識の高い優れた夫人で二人の子息たちも将来有望な人物だ。そして公爵家で家政を見てきたスワン夫人も控えめだが温かい人柄で、信頼できる。つまりアフトン公爵邸は一か所で三人の優れた人物の意見が聞ける希有な場所でもあるのだ。

「御不幸があつてからでは、身動きが取れないからな」

主人の力量と資産なら爵位が無くても十分立派な花婿候補だが、好むと好まざるとに関わらず、主人が爵位を継ぐ日は迫っているとラドストックは感じていた。



## 出会い・1（後書き）

料理ねたが多くなるのは、間違いなさそうです。

公爵・侯爵家の嫡出で後継者では無い男子に慣習として使用されるロードって称号は、名前に付けるだけが正しい。でOKでしょうか？

## 出会い・2

兄のセルビー伯爵クライブ・ボーダナムが皆の憂慮した様に高熱が引かないまま、亡くなってしまった。ロバートは穏やかで優しい性格の兄を決して嫌いではなかったが、幼いころからどちらが兄なのか弟なのか分からない様な関係であり続けたのも確かだった。放埒な父親の所為で惨憺たる状況だったキーネス侯爵家を建て直すことは、兄には到底無理だと最初から分かっていた。

「いつその事、爵位なんて無くなってしまっても良い様な気がするけどね。その方がロバートだって気楽だし、好き勝手にやれるじゃないか」

そんな事を言ってフワリと笑った兄の顔は、透明で、晴れ晴れとした雰囲気だった。

「アメリカ人になりきってしまうと言うことも考えたけれど、父さまと母さまに承知してもらうのは無理だと思うんだ。方法が何も無いと言う訳じゃない。僕にはどうにか切り抜けるだけの才覚は有ると思うよ」

そのロバートの言葉を聞いた兄は「ロバートのやりたい様にやってみて上手く行けば幸い、行かなくても予想通りと言う訳なのだから」何も気にする必要は無いとまで言い切ったものだった。

賢い人だったし、物事の本質はちゃんと見えていたと思う。だが、あまりにも体が弱かったのだろう。幼いころから何か有るとすぐ熱をだし、寝込んでばかりだった。

「僕は体が弱くて結婚なんて無理だから、ロバートが心身ともに健康で賢くて美人の奥さんと結婚して、子供をたくさん作らなくちゃいけない。そうして父さまと母さまを安心させなくちゃいけないよ」

七歳かそこらで兄のクライブは既にそんな事を言っていたが、最後がこうなることをずっと前から見越していたのだと思う。

結局の所、兄が亡くなった後の葬儀やら、法的な手続きに伴う煩雑なあれやこれやをこなしたのは、ロバート自身だった。父も母も当てにできない。長年父のもとで家令を務めてきたトンプソンはすっかり老いぼれてしまって、役に立たないのだ。家令は本来なら執事や家政婦と言った上級の使用人を纏め上げ、侯爵家の全ての邸や各領地の状況を正確に把握し、適切に運営されるように計らうべき立場なのだ。そもそも浪費家の父を戒める事が全く出来なかったのだから、たいして役にも立っていなかったのだとロバートは見ている。それでも帳簿類を見る限りでは個人的な使い込みは勤務年数の割に少ないようだ。博打もやらず酒もあまり飲まず、妻も子もいないひとり身のまま老いたのだから、ある程度の老後の面倒は見えてやるべきなのだろう。あまりに冷たい事をする、他の使用人たちの士気なり忠誠心なりに悪い影響があるだろうから。

従来なら年老いて寄る辺の無くなった使用人たちは、侯爵家領内の農場で穏やかに老後を過ごせるようにしてきた。そろそろトンプソンの爺やも引っ込んでもらう時期だろう。耳もずいぶん遠くなり、いささかボケてきているようでもある。こんな状態で使用人の監督も何もあつたものではない。それでも家政をしつかり取り仕切るハーグリーブス夫人がいてくれたのは、せめてもの幸이었다。

「ノーマ、早くマギーのスープをちょうだい」

母は兄を猫かわいがりしていた。成人男子に対する母親の態度としてどうかと思うような場面も多々あつたが、可愛い息子に先立たれたのがショックだったのだろう。母も兄の死後、急にぼけた。

次男のロバートが見舞いに来ても、今は頭の中はスープの事で一杯であるらしい。挨拶一つしないのだ。表情はどこか幼い子供のような雰囲気がある。

「ロバートは何でもしっかり出来てしまうから、心配する必要なんて無いんですもの」

その母の口癖を「不公平だ」と恨んだ事も有ったが、呆けてしまった母を恨むのは難しかった。

「母さまはマギーのスープが大好きなんだね」

ロバートの言葉に対して、童女のような顔つきで母はコクリと頷いた。

「奥様はマギーが作るスープを、大層楽しみにしておいでのようなのです」

母と同じ年の小間使いのノーマ・シンクレアは、母が嫁入りのときに連れて来た昔気質の忠義ものだ。対外的には姓で「シンクレア」と呼びかける方が体裁が良いのだろうか、母も家族も名前でノーマと呼んでいる。出来の良い一人息子が大学を出て弁護士になったから、もはや他人の家で使用人をやっている必要も無いのだが、母の最期まで仕えてくれるつもりらしい。こうした人材は金を払ったからと言って、なかなか見つかる物ではない。こうした人材に恵まれているのが、古い貴族の家の恵まれた点かも知れないと、近頃ロバートは思う。

「僕はそのマギーって、知らないな。新しいキッチンメイドかな？」  
ノーマは母に甲斐甲斐しくスープを一匙一匙、飲ませている。

「もともとはクライブ様に何か少しでも召し上がっていただこうと言うハーグリーブス夫人の計らいで、腕の良い真面目な料理人を探して、来てもらったのです」

その心遣いもむなしく兄・クライブは亡くなったが、今度は母の老侯爵夫人がマギーと言う女料理人の作るスープにこれほど執着するのは、よほど味が良いと言う事だろう。目的に合った使用人を確実に雇い入れると言うのは、なかなか難しいが、さすがはやり手のハーグリーブス夫人だとロバートは感心した。

「僕も食べてみたいな、そのマギーのスープ」

ロバートが希望すると、父親と一緒にその日の夕食にマギーが作ったスープが出てきた。母の言うマギーはマーガレット・ホワイトという名前らしい。ハーグリーブス夫人の古くからの知人の娘で有るようだ。

「近頃は料理人のモアブルが殆どの事をホワイトに任せております」

モアブルというのは父の考えで雇い入れたフランス人の料理人だが、むら気な気難しい男らしい。近頃は真面目に仕事をせず昼間から飲んだくれているというメイドや従僕達のひそひそ話も、聞こえてくる。マーガレット・ホワイトがその抜けた分の仕事を全部やっているのかも知れない。

ハーグリーブス夫人が「ホワイト」と苗字で呼ぶからには、キッチンメイドの扱いではなく、上級職の料理人の扱いなのだろうとロバートは思った。聞けば母親がフランス人とかでフランス語はお手の物だそうな。

「僕からもそのマギーに言っておきたい事が有るから、呼んでもら

おうか」

夕食後にハーグリーブス夫人と老いぼれた家令のトンプソンの立会いのもと、初めてロバートはマーガレット・ホワイトと面談した。艶やかな金褐色の髪をキッチンと結び上げ、姿形はすっきりしている。まずは美人の部類なのだろうと思うが、金縁の眼鏡が何とも艶消しだと思った。せっかくの青い瞳が直接は見れない。キスをするにも邪魔だ。そう思った後で、料理人なのだから艶消しなぐらいでちょうど良いのだと思い返した。

「飲んだくれてばかりのモアブルには帰国して貰おうと思う。来月からは君がこの邸の食事の責任者だ。当分フォーマルなパーティーなどは開く予定はない。そうだな……それでも年末のクリスマスと新年のごちそうはちゃんと用意してやってほしい。ごく親しい人を数名呼ぶかもしれないし、この邸で務める皆にもクリスマスの御馳走は必要だからね」

「はい。皆様のご満足のいくように、精いっぱい務めさせていただきます」

生真面目に応える様子は、まじめな性格をうかがわせて好感が持てた。特定の訛りも無い。さりとて上流社会のものにありがちな氣取った感じの発音もしない。強いて言うならアメリカでもイギリスでも一番通用しやすいとロバートが思い、なるべく使うように心がけている英語、強いて言うなら、實在しない「言語学的に標準の英語」と言う感じの言葉だ。

新しくロバートが侯爵の相続人となったからには、こうした使用人の整理なども必要だろうが、あまり大ナタを振るうつもりは無い。兄の想い出までがすっかり無くなってしまいう様な事はしたくは無いのだ。兄に仕えていた者はよほどの不都合が無い限り、そのまま母

の介護の方に回る事になりそうだが、若い者や結婚を控えた者の中には退職を希望する者もいるだろう。

「君は結婚の予定は、有るのかな？」

「いえ、全く御座いません」

即座にそう返事が返ってきた。やっぱりそうかと、ロバートは思い、それ以降、一月ほどは新顔の料理人の顔など思い浮かべもしなかった。役立たずの料理人はフランスに返した。しばらくは、ただ単に食事がよそよりも美味いと思う事が増えた。それだけだった。料理人はめったに主人家族の前に顔を出さない職種であるから、当然と言えば当然なのだ。

秋も終わりが近づいた頃の日曜の午後、ロバートは予定より早く帰宅して、ふと自室の窓から外を見た。静かに二頭立ての馬車が塀の所に止まったのだ。並みの辻馬車なら一頭立てだから、目を引いたのだった。車体は黒一色で紋章なども特に無いが、馬が非常に良い。そこらの小金持ちの厩にいるレベルの馬ではないのは確実だ。もしかすると車体自体も高級品なのかも知れなかった。御者はツイードのジャケットを着ていて、小商いの商人のような恰好をしている。仕着せを着ていないから超高級な貸馬車というわけでは無い。個人用だろう。ロバートが双眼鏡を取り出してじっと観察していると、中から一人の女性が降りてきた。そして馬車中の人物、どうやら男だと思ふのだが、その男に何事か言い、手を振っている。男も手を振って別れを惜しんだようだ。その男女がいかなる関係か、下世話な興味が湧くのも無理はない。そうロバートは自分に言い訳しながら、双眼鏡をのぞき続けた。

「おや、あれは、うちの新しい料理人か？」

まさにその女料理人だ。それらしく大きな果物を入れた籠も持っているし。その料理人が使用人用の通用門から入る時に眼鏡を取り出してかけたのだ。そう思っただけで見るせいだろうか。女料理人の着ている淡いブルーの襟の高いドレスは、一介の使用人が着るものにしては仕立ても素材も良すぎる様な気がするのだが、ここからでは細かな事までは分からない。

「正体を隠して潜入している？」

ロボットの商売敵が送り込んできたスパイ、と言うのも違うような気がする。だが、あの女が何かを隠しているのは確かだ。ロボットにはそう思われてならなかった。



### 出会い・3

使用人の休みは日曜の午後四時までとなっており、それまでに邸に戻っている規則なのだが、中には遅刻の常習犯もいる。メイドが恋人やら夫やらとイチャイチャべたべたしている場面も、時折見受けられるが、よほど悪質でない限りは大目に見てやるべきだとロバートは思っている。メイドの恋人の職種は同じ使用人の仲間か他家の使用人、将校ではない兵士や巡査、小商いの商人と言った所が多い。

以前はこの邸にも主人に露骨に色目を使うメイドが若干いたのだが、最近はハーグリーブス夫人の監督が厳しいせいか、そうした場面にロバートも遭遇しない。好ましい反面、少々残念でもあり、勝手ではあるが正直言って痛しかゆしという所だ。出かけた先で、貴族の未亡人やら令嬢にねっとりした視線を向けられて迷惑に感じた事は多々有るが。少なくとも父の侯爵のように「可愛いメイドと楽しい秘密を持つ」などと言う経験は出来そうに無い。ハーグリーブス夫人が意識的に美人過ぎるメイドは雇い入れないようにしている節も有る。事業家としての自分の手腕や見識に対してハーグリーブス夫人が敬意を示してくれているのがわかるだけに、若かったころの父のように「メイドは美人の方がいい」などとは、口が裂けても言えないのが、今のロバートの状況だ。

「御当家を財政的に立て直されたのは若旦那様ですが、この御邸に限って申しますとハーグリーブス夫人のおかげで、どうにか持っているのだと思います」

「確かに、僕もそう思うよ」

「ハーグリーブス夫人は、時折、先祖代々お仕えしてきた家系の方と勘違いしそうになるほど、この御邸にすっかりなじんでおいでですね」

「そうだな。そういえばハーグリーブス夫人は、ここに来てまだ十年も経ってないのか。前職は何だったのかな？」

「はい。アフトン公爵家で長らく務めていたと聞いています。リズモア侯爵家御出身の……もう離婚なさいましたが、当時奥様だった方に解雇されたようですね」

「んーっと、リズモア侯爵家の……レディ・ハリエツトか。ふーん、なるほどね。確かに合いそうもないな」

ロバートは親子ほど年の離れたアフトン公爵と結婚していた金髪の婦人を思い返していた。気が強い軽はずみな令嬢が、そのまま歳を重ねたような人で、いまだに色々な男との不倫を重ねているらしい。ロバート自身も、かつてレディ・ハリエツトと際どい雰囲気になった事もあった。あれは明らかに「嵌められた」だけで、さっさと逃げ出したのが、やはり正解だったと思う。

「ああいうレディは観賞用には悪くないが、あまり深くお付き合いしたくない人種だな」

「実の御子息にも、見限られておいでのようですからね」

離婚の際、アフトン公爵家に残してきた息子トマスは、公爵の実子では無いというのは、知る人ぞ知る事実であるようだ。

「トマス君は、確かに全然アフトン公爵とも二人の兄とも顔が似てないな」

「ですが彼の方は慎ましやかで、良く出来た方だと、皆がお人柄を褒めますな。レディ・バーバラの御薫陶の賜物でしょう」

ラドストックによれば、トマスは名家の一人娘である母親の相続人の立場だが「不倫で生まれた自分に爵位は相応しくない」と言って、時折悩むらしい。

先のリズモア侯爵には子供が娘のハリエツトしかおらず、爵位は一旦絶えた。だが先代の王は名家が完全に途絶えるのを惜しみ、「ハリエツトの直系男系男子」に新たなリズモア侯爵位を授ける形で名跡を継がせる事にしたのだ。ハリエツト自身は爵位継承から弾かれていたという一事を見ても、王もトマスの子の出生の事情は御存知だったという事だろうし、父親が誰であれ、数少ないリズモア侯爵の血筋では有るのだから悩む必要も無さそうだが、確かにこの国の爵位は、正式の婚姻で生じた嫡出の男子に受け継がれるのが一応原則なのだ。トマスはその「嫡出の男子」では無い事が気になるようだ。

「自分が悪いんじゃないんだし、リズモア侯爵の一人きりの孫なんだから、気にしなくて良いのにな」

「レディ・バーバラはそうおっしゃっておいでですよですけどね」

「レディ・バーバラは……アフトン公爵の、一番最初の御子だよな」  
「はい。実の母上がああいう方ですから、トマス卿を幼いころから天塩にかけて育てられたのは姉上にあたるレディ・バーバラです。ハーグリーブス夫人はレディ・バーバラのお書きになった推薦状を持って、こちらの御邸に採用されたと聞いています」

しっかり者の先妻の娘が不倫三昧の後妻の子を育てた、そういう事なのだ。そして、そのしっかり者のアフトン公爵の令嬢が、ハーグリーブス夫人の推薦状を書いたのなら……

「僕の知らない内に、この邸の人間はレディ・バーバラに支配されていたのだな」

「まさか。そのような事は……」

「だって、推薦状を書いてもらったハーグリーブス夫人が褒めるのはわかるが、お前までがレディ・バーバラの『御見識』やら『お人柄』を褒めるじゃないか」

「はあ。ですが、本当に御立派な方なのです。私はアフトン公爵家の家令とは縁続きですし、色々と相談事なども致します仲ですが、そんな使用人の親戚にすぎない私にも、細やかにお心配りなさる方です」

「細やか過ぎて、公爵家のお姫様らしくないな」

「何しろ父君のアフトン公爵が異色の経歴の方ですから。それに、あの文豪の夫人でいらしたのです。そりゃあ、ただお美しいだけの姫君のはずが無いでしょう」

バーバラはパン屋の息子で当時名が売れ始めたばかりの作家・リード氏と意気投合して、結婚した。それをあっさり父親の公爵が許したのも異例だが、そのパン屋の息子が『文豪』としてサーの称号を賜う様な人物となったのも、皆を驚かせた。病気がちの夫に尽くし、国家に貢献する立派な息子を二人育てただけでもすごいのに、何と亡き夫の実家のパン屋の商売を大きくするために力を貸したらしい。海外の製法や技術の導入を助け、街のパン屋の品質向上に貢献したのだ。そんなわけでバーバラは、パンの業界でも一目置かれる特別な貴婦人らしいのだ。

「定めし、あのマギーもレディ・バーバラの勢力圏内の人間なんだろうな」

「ああ、確かに……ハーグリーブス夫人が元の雇い主である公爵家に、相談されたかも知れませんか」

「アフトン公爵は真の美食家だと、もっぱらの噂だもんな。その筋をたどれば、良い料理人も見つかりやすいか……」

あれから気になって、あの女料理人の身辺調査をさせてみたのだが、仕入れや帳簿関係も、近隣の商店との関係も特にまずい事は何も無かった。何も無いから逆に怪しいともいえる。料理人がワインや肉類その他を勝手に横流しして不正な利益にあずかるのは、ある

程度、常識と見なされているものだが。ハーグリーブス夫人に聞いた方が話は早いのかも知れないが、それならば警戒されてしまい、マギーがこの邸を退職してしまう可能性もある。

「あの料理は確かに美味いからなあ」

何しろ本当に料理が美味くて、勤務態度が真面目な料理人など、めったにいないのだ。

気が付くと、ロバートにとってマギーは、かなり気になる存在になっていた。自然と気を付けて観察するようになったわけだが、観察している内に気が付いた事が有る。どうやら、あの眼鏡は一種の変装用の仮面のようなものらしい。双眼鏡越しに一度、眼鏡を取った状態を確認した所、どうしてどうして、襟ぐりの大きな華やかなドレスを着せたらさぞかし映えるだろうと思われる器量だ。料理人らしく肌の露出をうんと抑えた尼僧を思わせる様な禁欲的な身なりは、恐らく意識的な物だろうが、何とも惜しい。無粋な眼鏡と飾りのほとんど無いドレスの覆い隠している物に気が付いて以来、ロバートはマギーの料理をますます美味く感じている。料理人が美人だろうが不美人だろうが、食事の味が変わるはずもないが、あの白くて小さくて器用そうな手の事を思うと、肉のひとかけら、スープの一滴に至るまで、特別なものに思われてくる。

ましてやボケている母が、あのマギーの作ったスープを欲しがるのだ。彼女にはこの邸で機嫌良く働き、大いに腕を振るってもらわねば困る。それに、もうすぐクリスマスなのだ。美味しい料理の作り手には大いに活躍してほしい、と言うのがロバートの正直な感想だ。三度に一度程度の割合でマギーを呼んでもらって、父の侯爵とロバートが大いに満足している事を伝えているが、微妙に迷惑がられている節も有る。少なくとも「高い身分の方に目をかけて頂いた」と言った喜び方はされていないのではないかと思うのだ。社交界の令嬢方はロバートが笑いかけるともっと色々反応するのに、いつもマ

ギーは直立不動の姿勢を取り、目を伏せている。

毎週日曜、恐らくもうすぐ帰宅時間だと思う頃に、双眼鏡でマギーを観察するのがロバートの密かな楽しみになりつつある。今もある謎めいた二頭立ての四輪馬車が止まるのを、コーヒーを飲みながら待っている所だ。今日もきつとまた、何か面白いネタが見つかるだろう。ロバートはそんな気がしている。

### 出会い・3（後書き）

トマスの爵位継承に関して、  
イギリス貴族っぽい設定になおせたでしょうか？

## 出会い・4

「先々週、マギーは分厚い本を持っていた。先週はドレスの大きな箱を抱えて降りて来たな。そう言えば休みごとに毎回ちゃんと、別のドレスに着替えている。飾りの極めて少ない襟のつまったデザインばかりだが、素材と仕立ては良さそうだ。彼女は相当な衣装持ちだろう。給金の範囲で足りるはずもないが、使い込みは無い。彼女は一体何者なんだろうな、ラドストックはどう思う？」

一人住まいの家で執事役を務めていたラドストックは、この邸に戻った今もロバートの身近に仕えている。主人が飲むコーヒーや茶を淹れるのは彼の仕事だ。直接の主人ロバートが留守の時は、老侯爵の御用を手伝う事も有る。

「あの御婦人はフランス語以外にラテン語とギリシャ語を理解なさるようです」

「ほう、なぜそう思った」

「昨日侯爵様の所にお越しになった御友人が御昼食の折にたっぷりワインを召し上がり、下ネタがかった言葉を叫びましたが、ラテン語でした。他の使用人たちは無反応でしたが、あの御婦人は明らかに慥然となさってましたね」

その友人は父の侯爵と学友の老人で、大学の教授も務めた御仁だ。「そう言うお前は？」

「私は食後のコーヒーの御用意をさせて頂きました。聞いた事でも聞かなかったふりぐらいは出来ますので」

「ハーグリーブス夫人は？」

「あの人は通常の読み書きには不自由はしないようですが、自分でも言うように外国語は苦手なのではないかと思われます。そうそう、先週の事でございますよ。客間に飾っておりますギリシャ風のブロ



ンズ製の五個の彫刻ですが、一番若いハンナと言うハウスメイドが掃除をしたのは良いが、どう並べれば良いのか忘れてしまい、途方に暮れていたようなのです。そこへあの御夫人が通りかかって、物語の内容に沿った正しい順番に直す手伝いをしてやっていました。

後からハンナに聞きましたら、あの人は古代ギリシアのアキレウスの故事をすっかり承知しているようで『お掃除の手助けをしてくれて、面白い大昔のギリシャのお話を聞かせてくれました』って、ハンナが尊敬しきった顔で申しておりましたからね。なぜあの方がキツチンにいるのか不思議だとも言っていました」

「ほう。ラドストックは、そのハンナが気に入っているのかい？」

「はあ。骨惜しみせず働く可愛い良い娘だなと、思っています。一度散歩にでも誘おうかと思いますが……いえその、その件はさておきまして……あの人は眼鏡が確かに多少野暮ったくは有るが奥向きの御用も務まりそうだし、家庭教師なら眼鏡もあるいは似つかわしいのではないかと……ハンナも色々不思議に思っているようです」

「ふうむ。マーガレット・ホワイトは高い教養の持ち主のようだが、それを隠し、料理人をやっている、そういうところか……なあ、あのアマゾネスと似てないか？」

「ホワイト夫人がですか？」

「なんか嫌だな。そのしきたりどおりの呼び方」

上位の女使用人は独身であっても何々夫人と呼ぶものなのだ。確かにそれがこの国の上流階級の邸のルールだが、「あのマギー」を夫人呼ばわりしたくないと言うのがロバートの気持ちだ。

「あの姿勢が良くて堂々とした感じと、キリッとしたと言いますか凛としたといえますか、雰囲気は似てますかね。眼鏡を外した顔を私は見ておりませんので、あの巨匠の傑作とどの程度似通っているのか、しかとはわかりかねますが」

誇り高く美しいアマゾネスの女王ペンテシレイアは英雄アキレウスと一対一で戦い、敗れたとされる。その戦う女王の姿を映した彫刻とマーガレット・ホワイトの姿がなぜ似ていると感じてしまうのか、ロバート自身にも分からないのだが、確かに似ているのだ。

「マギーは何かと戦っているんだな。きっと」

「何と戦っているのでしょうか？」

「彼女の人生……かもな」

ラテン語やギリシャ語はレディには必須な教養だが、メイドには必要ない。この邸には子供がいないので、住みこみの家庭教師の必要性は全く無い。没落した上流階級の婦人や、ある程度学問をおさめた中流階級の女性が上流家庭で住みこみの家庭教師を務める事は珍しく無いが、料理人をやるなどと言うのは聞いた事がない。腕の良い料理人は家庭教師より高い年俸を取るものであるとしても、料理人の仕事はレディにふさわしくないと見なされている。それがこの社会の常識だ。

ラドストックは、主人が一瞬、夢見る様な眼差しになったのを見逃さなかった。マーガレット・ホワイトが人生と戦っているとして、その彼女に対して並々ならぬ関心を寄せているらしい主人は、これからどうするつもりなのか、ラドストックには分からない。賢明な主人が外聞の悪い行動に走るなどとは思わないが……

上流社会に属する紳士がメイドを秘密の愛人にする事は、かなり多い。そしていつしかメイドの方は捨てられて、生まれた子供は孤児院行きという話も珍しくない。ごくまれに身分違いの恋を貫き、メイドと結婚する紳士もいるが、上流社会ではまず受け入れられないだろう。そうした場合は田舎の領地なり邸なりに引きこもって、ロンドンでの社交界とは縁を切って暮らすしか無い。事実、そうした事例をラドストックも幾つか知っている。あのアフトン公爵のよ

うに、王の庶子でありながらメイドと駆け落ちして結婚し、新大陸で運命を切り開いた、などと言う話は、他に聞いたことがない。大抵の裕福な男性はアフトン公爵ほど大胆でも有能でもないからだ。

ラドストックの見たところ、この主人もあのアフトン公爵に負けず劣らず有能だと思うが、「駆け落ち」などと言う衝動的な非理性的な行動を主人が取るとは思えない。そもそもマーガレット・ホワイトに向けて主人が感じている感情が恋愛感情なのか、否か、それすらもまだ明確ではないのだから。

「ハンナから聞きました所では」

「お前の可愛いハンナが、何を言った？」

「誤解なさないでいただきたいのですが、私はあくまで大切な御用に支障の無い範囲で……」

「ああ、わかったわかった。お前もハンナもまじめに骨惜しみせず働いているよな」

「お分かり頂ければ、幸いです。そのハンナが申しましたのは……賄いもあの人が来てから非常に美味しいものになったそうです。『カレー風味のマトンシチュー』とか『イタリア風のひき肉団子煮込み』とか食べた事も無い様な結構な味だと」

「何だ、それ、僕も食べてみたいもんだな」

「後はカップケーキに感動しておりました」

「カップケーキは、僕も話にしか聞いたことが無い。誰か社交界の御婦人でその話をしていた人がいたが、最新流行の菓子なんじゃないのかい？」

「なんでもお客様にお出しするお茶菓子の試作品らしいのですが、階下の使用人一同、大喜びで午後の休憩時間に食べたようです」

「上級職のお前は食べたことがないって、そういう訳か。今、菓子専門の職人は置いていないよな」

「おりません」

ロバートは父親の雇い入れた菓子職人の作る物を子供の時分食べた記憶はあるが、乳母がこっそり焼いてくれたパンケーキの方が美味しかった。ロンドンのどこの邸でも使用人の間で上級職と下級職の区別はかなり厳しいものが有る。標準的な相場で執事は年俸が百ポンドほど、最下級のメイドは十から十二ポンドあたりだろうか。料理人がフランス人の場合、執事や最上級の使用人である家令よりも高額な報酬を払うのも常識だ。それぞれの邸の主人の面目が立つような、立派な宴会料理なりもてなし料理を作ってもらう事を期待しているのだ。フランス人を雇ったからと言って、その邸で暮らす者たちの日常の食事が美味くなったと言う話は、聞いた事がない。それぐらい厄介で微妙な話なのだ。

「フランス語のメニューが自在に読みこなせるような料理人は気位が高く、下級の使用人の食事など知った事かと言わんばかりの芸術家気取りの輩も多いようですが、あの人は違うようですね」

ますますロバートはあのマーガレット・ホワイトに興味がわいた。その時、あの黒い馬車が通用門側のいつもの場所に止まったようだ。

「さて、今日はどうなったかな？」

ロバートは双眼鏡を取り出した。

## 出会い・4（後書き）

夢見る場合は、眼差しですよ、ね、たぶん

## 出会い・5

「今日の茶色いドレスはさして目新しくも無い。だがグレーの帽子はシックだ。あれはいいな」

ロバートは双眼鏡を手渡して、ラドストックにも見るように促した。外出時に帽子を被るのは「堅気の女性」なら当然であって、如何なる帽子を被るかで、その女性の品性なりセンスなりがはつきりするのだ。

「ボンネットでもキャプリーンでもありませんね。初めて見る形の帽子ですが」

「オーストリアあたりの男物で、あれに近い形の帽子を見たことが有るが、あれほど優美では無かったな」

「頭にぴったりしている感じがですから、しかるべき帽子屋にオーダーした品物でしょうな。上質のフェルト製でしょうか。帽子の横についている……同じフェルトで作ったらしい花飾りが派手すぎず、良い感じですね……ですが、帽子よりも私はあの、革製らしいケースが気になります」

ロバートは双眼鏡をひったくった。確かに赤い革製らしい四角い箱を、両手で胸元に抱え込むような感じで持っている。

「何だろうな。あまり大きくは無いから、宝石か化粧品でも入れているのかな？」

「両手で大切そうに持っていましたから、貴重品なんでしょうなあ」  
「何なのか知りたいもんだ」

「本人にお尋ねになれば、すぐにわかるでしょう」

「それじゃあ、つまらない。密かに探り当てたことだけで推理するのが楽しいんだ」

ラドストックはまだ主人があゝの謎めいたマギーと、どの様に付き合うのか決めかねている、あるいは自分の感情も掴みかねているのだと感じた。

ロバートはそれから新聞を読んだり、自分あての手紙に返事を書いたりして夕食までの時間を過ごした。以前なら日曜の午後は誰かの邸を訪問しているか、この季節なら狩猟に出掛けて週末はずっと留守、というのが普通だったはずだ。

「何だろうな。妙に美味そうな、でも、風変りな香りがしないか？」

主人の言う微妙な香りの正体は、ラドストックにも見当がつかなかったが、夕食時の最初の一皿を見て、なるほどと納得した。あの箱は、この料理のためのスパイス類だったのではないかと思われた。

「おお、これは美しいし、しゃれている」

老侯爵も思わず歓声を上げたその料理は、繊細なフィタージュとどうかフランス風の折込パイで作った六角形のケースにインド風のミックススパイスを使ったソースで仕上げた海老とキノコが詰められていた。添えられている蓋にはパイ生地之星がついているのも、しゃれている。小ぶりで美しい。

「実にうまい。ちょっと風変わりなこの香りが、何ともまた癖になるな。このパイで作った入れ物が魔法の箱めいていて、良いねえ」

前菜としては適切な量なのだろうが、もっと食べたいとロバートは思った。

「これは客人が来た時に、お出しすべき料理だな」

確かに老侯爵の言うように、斬新で気が利いて美味い。ロバートはさっそくマギーを呼んで、料理の説明を求めた。あの瓶の中心はラドストックの推理通り、上等なスパイス類だったようだ。

「このお邸には良いオーブンが有りますので、このようなパイも綺麗に焼けます。フランス風のガレット・デ・ロワなども簡単に出来ましょう」

「是非、そのうちその綺麗なパイを食べさせてほしいな。ああ……菓子にはハーグリーブス夫人の許可がいるか。えっと……」

伝統的に菓子類は家政婦が取り仕切る物で、料理人の守備範囲を超えている。ともかく家政婦の顔をつぶす格好になるのはまずい。それに家政婦に取って旨味の多いはずの菓子に関する業務を、有能とは言え料理人に任せて本当にいいのかロバートは気になり、従僕の一人にハーグリーブス夫人を急いで呼ばせた。

「幾つかの斬新な御菓子類のレシピも持っているようですから、いっその事、このお邸の御菓子の件は、ホワイトに御一任なさいましたらいかがでしょうか？　奥様御主催のお茶会のために私が使って参りました御菓子に関わるメイド達も、キッチンの方に付ける方が良さそうです」

お茶会を取り仕切る女主人であるはずの母は、あの状態なのだから、お茶会も当分は関係無いわけだ。



「君たち二人で相談してやりやすいようにしてくれば良い。僕は美味しい菓子が食えるなら文句は無いよ」

「調理人は家政婦の私に従う必要は無いのですが、互いが細かな点まで承知しておりました方がお邸の皆もやりやすいでしょう」

「はい。では、細かな点はハーグリーブス夫人の御指示に従います」

マギーはどこまでも低姿勢だ。ハーグリーブス夫人は程なく部屋を出たが「では、後程」とマギーに耳打ちしたようであった。親密な雰囲気有って、通常の上流家庭にありがちな料理人と家政婦の利権を巡る争いなどは心配する必要は無い、とロバートは感じた。

「ガレット・デ・ロワとは、どんなものかな？ 直訳すれば王の焼き菓子とでもいうようなものらしいが」

老侯爵は家政上のいざこざの回避などまるで興味はなく、ただただ美味しい物が食べたいだけなのだろう。呑気なものだとロバートは思うが、こうしたおおようないうか、いい加減な方が本来の貴族の気質なのだと思う。そもそもあまり勉強が出来たり、事業で金を儲けたりするのは最上流の貴族には相応しくないのだとロバートは感じている。少なくともロバートは父のように、優雅に堂々と無駄遣いは出来ない。母方を通じて、商人の血が混じったせいばかりではない。自分で稼ぐ大変さを知ってしまえば、おいそれと無駄遣いは出来なくなるのだ。だが、それでも妥当な価格、妥当な対価を支払うのはためらわないが。だから、マギーには、相場の倍ぐらいまでなら年俸を払う心づもりは、すでにしている。

「フランス人が新年に食べますアーモンドクリーム入りのパイでございます」

「あー、思い出した。中にソラマメを一個だけ入れてあるんじゃないかなかったかい？ ちょうど我が国の十二夜のケーキと同様に」

「おっしゃる通りです」

ロバートは父に、クリスマスから数えて十二日目の東方の三博士がキリスト誕生の祝いに訪れたとされる一月六日に、イングランドの国教会の信者なら砂糖衣をかけた「十二夜ケーキ」と呼ばれるフルーツケーキを食べるところであるが、フランスの旧教徒達はその「ガレット・デ・ロア」を家族で切り分けて食べる事、ソラマメの入った部分が割り当てられた者は幸運が一年間継続するといわれる点は「十二夜ケーキ」とほぼ同じだということを説明した。

「所変われば品変わると言う訳じゃな」

「ねえ、僕の説明、合格かい？」

ロバートはじつとマギーを見詰めた。例によって金縁眼鏡で武装している。本当に近眼なのかどうか、調べてみたい気もするが……実行は出来ない。マギーは視線を合わさないのだ。恭しいともいえるが、やはり気を許していない、そういう事だろう。

「恐れ多い事でございます。全くおっしゃる通りかと存じます」

恭しいことこの上ない言葉にも、雇い主に対する使用人としての距離感が現れていて、ロバートは何だか少々寂しいと感じる。だが、このインドのスパイスを使ったソースで、何か皆のためのクリスマスの御馳走を考えてくれてはいるようだ。その話になると、ちょっと嬉しそうな顔つきになってくれたので、ロバートもホッとした。だが「次の料理がございますので」と言われて、マギーに食堂を出て行かれてしまうと、やはりちょっと残念な気分になった。

父親はその顔を見て、オヤと言う顔つきになり、それから一瞬ニヤッと笑った。

「おやおや。何か気に入らないか？ 熱いものは熱く、冷たいものは冷たいというロシア式サービスが、やはり良い。そうは思わんか、ロバート？」

順を追って一皿ずつ出す料理の供し方を「ロシア式サービス」と呼ぶのは、1800年代に入って初めの頃にパリに赴任したロシア大使のクラークンと言う人物がロシア式に一皿ずつ料理を出して、熱い料理は熱く食べようと提唱したのがそもそもの始まりだからだ。

スープは翡翠を思わせる様な美しい色合いの滑らかなポタージュだった。

「何というか、もっと大きな器でがぶがぶ行きたい味だ。美味しい。美味すぎるな」

ロバートも父の意見に賛成だ。魚料理はムニエルのものであったが……

「これは、何だ。マスか？ ううむ。松の実入りの、このソースが堪えられん」

「よそでバリバリに焼けてしまったマスを食べさせられましたが、これは絶妙な火加減だ。添え物のカブもうまいですねえ」

続いて出てきた肉料理は仔ウシ肉を柔らかく煮込んで、赤ワイン風味のソースで仕上げたもののようなのだ。

「ううむ。とろける様な舌触り。たまらん」

老侯爵の目はうっとりしている。肉の次はサラダの位置づけだろう。カボチャを玉ねぎと合わせて調理したものにカリッと香ばしい角切りベーコン、みずみずしいスプラウトをマスタードの効いたヴィネグレットソースであえ、上にポーチドエッグが乗った彩り豊かな一皿が出た。

「スプラウトなんぞ、船員か兵士の食う物かと思っていたが、これは美味い」

「スプラウトは体には良いと聞きますが、どうすると美味しく食べられるのか、知恵が不足していたんですな、これまでは」

スプラウトと呼ばれるモヤシの類は、寒冷地でも簡単に室内で栽培できるが、一般に美味しいものだとも上品な食材だとも思われていない。

「色々食ったのに、胃がもたれていない」

父が腹のあたりを押さえてそう言った言葉通り、ロバートも胃もたれを感じなかった。

「昔、あの『料理人の帝王』と呼ばれたアントナン・カレームの料理を食べた事も有るが、豪華絢爛と言うか、こけおどかしと言うか、見ている胸がいっぱいになる様な具合で、確かに食べてみれば美味いが、毎日食べたいというものでも無かったな。見栄を張って見せつけるような料理では、胸焼けしても当然か」

食べる人間の事を一番に考えたこんな料理が、これからも毎日食べたいものだが……どうすればマギーがずっとこの邸に居続けてくれるだろうか？ 相場の倍の年俸でも、留まってくれる保証は無いのだ。料理人は普通、より良い条件の職場を求めて、移動して行くものなのだから。マギーがいなくなって、焼きすぎてばさばさのローストや、グダグダ煮過ぎた野菜、ピンぼけたドレッシングで和えたサラダなんかを食べる毎日……ごめんだ。絶対嫌だとロバートは思った。

## 出会い・5（後書き）

十月二十九日、十二夜ケーキの説明追加しました。

## ヤドリギの下で

女王陛下の御夫君は元来がドイツの方なので、英語はまだ苦手であらう。そのため年齢が近くて、ドイツ語にも不自由しないロバートのような貴族階級の間人は、王室のクリスマスのディナーにお招きいただいた場合も、身近にお話を伺えるような場所に席を割り当てられる事が多い。外交官や駐在武官の経験者、ドイツ語に堪能な学者なども、貴族と同等の扱いで招待されていた。

ドイツ語圏の文物が注目される機会が増え、ドイツ語を母国語とする音楽家がロンドンへの演奏旅行をする事も以前より一層盛んになったが、ユダヤ人のマエストロ、フェリックス・メンデルスゾーンが四月に渡英した際の、ロンドンフィルの一部の楽団員の差別的な態度は酷かった……と言うお話が出た。おかげでイギリス在住のマエストロのファンは、出来たばかりの新曲を聞きそびれたのだ。

「あれはどう考えても楽団員の方が悪い」

王配殿下はドイツ語で声を潜められてではあるが、はつきりそうおっしゃった。

「マエストロを怒らせた内の一人は、奴隷解放運動に積極的だった御仁の身内ですが、黒人差別は罪悪でも、ユダヤ人差別は構わないということなんですかね」

「マエストロが裕福な銀行家の一族だから、妬ましかったのかもしれない」

王配殿下は頷かれて「これからは何事も差別ということには敏感になるべき時代になったのだと思う」とおっしゃったのだ。御自身が大国の君主と言う、格上の女性を妻とされて、それなりに色

々鬱屈するものがお有りだろうに、どこまでも穏やかで落ち着いておられる。お若いがなかなか大した方だと、ロバートは素直に感動した。

「殿下のような方が、我らが女王陛下の御夫君でいて下さるおかげで、大英帝国はますます栄えましょう」

酒を飲んだ勢いも有って、大声でそう叫ぶ老貴族がいたが、ロバートも彼に賛成だった。

山ほどの山海の珍味に数々の名酒、何れも逸品ぞろいだが、さすがに日付が変わる頃になると腹はふさがり目蓋は重くなる。自然、退出する者も増えてくる。ロバートも迷ったが、極上のトカイ・ワインも頂いたし、素晴らしい葉巻も吸い終わった。待たせている御者だって、今夜は特別に良い酒を一杯寝酒に飲むぐらいの事は、したいだろう。家路を急ぐ事にした。

ガス灯に照らし出されたキーネス侯爵家の邸宅レイストン・ハウスは、高級住宅街とされる一帯でも、突出した規模と美しさだ。改めて馬車の窓から邸を眺め、王配殿下の背負い込まれた物に比べれば吹けば飛ぶようなものでは有るが、自分としてはこれだけでも相当な重荷だとしみじみ感じていた。

馬車を降りると、改めて自分が受け継ぐことになったこの邸を、ぐるっと一回り散歩しようと言う気になった。正面のホールから前庭を通り過ぎ、しばらく行くと使用人が使う通用口に出た。ここもクリスマスにふさわしくドアにはヒイラギのリース、天井にはヤドリギがちゃんと飾られている。来年からは王宮を見習って、こちらにもクリスマスツリーを飾るべきかもしれない。ツリーを飾る習慣も、女王陛下の御結婚以降、王配殿下の故郷のしきたりを取り入れて一般化したのだ。

「ヤドリギ、ね」

どうやらヤドリギの方はキリスト教以前の、古い古い時代の呪いなどにかかわるものらしい。異教的であるからキリスト教の祭日にはそぐわないと主張する聖職者も有ったと聞く。宮中で席が隣同士になった老学者は、クリスマスのヤドリギに関しても色々面白い話をしてくれた。そして、声をひそめてこういったのだ。

「万が一にでもヤドリギの下で女性と遭遇したら、古くからの言い伝え通り、キスはしなくてはなりません。私のような老いぼれは、ヤドリギからは距離を取らねばいけません。伯爵、貴方は是が非でもヤドリギのそばで待ち伏せなさるべきですぞ。意中の女性を通りかからぬとも限りませんし、誰か別の男に横取りされたらたまらぬでしょう」

そしてクリスマスのヤドリギの魔力は、実に強烈なのだとも言った。

「私が老妻にヤドリギの下でキスしてから、かれこれ五十年ですぞ」

その老学者と夫人は、上流社会では珍しい仲睦まじい夫婦なのだ。夫人と連れだって「いそいそ」と言う感じで退出する老学者は、実に愛すべき好ましい人物だとロバートには感じられた。

その言葉を思い返していたロバートは、足音に気が付いた。女だ。それも豪奢に着飾った。庭の外灯のおかげで、かなりはつきり女の姿が確認できる。ロバートは思わず側の樹の影に隠れた。衣擦れの音と共に現れたのは、クリノリンで大きく裾を膨らませた夜会用のドレスに毛皮のショールを纏った女……マギーだ。ロバートはヤドリギの真下に飛び出すと、マギーを抱え込んで、いきなりキスをし



た。自分でも驚くほど、迷いが無かった。シヨールは下に落ち、ドレスの深い襟ぐりが露わになった。見事な大粒真珠のネックレスが白い胸元を飾っている。

マギーは最初は抵抗したが、途中から力を抜いてぐったりと言う感じでロバートの腕に身を任せた。

「メリークリスマス、マギー」

「メリークリスマス、いきなりなんて……酷いです」

ワインレッドの最新流行のドレスは、マギーを貴婦人に見せている。いや、こちらが本来の姿だろう。

「でも、今夜はクリスマスで、ここはヤドリギを飾った真下だ。キスするのはあたりまえ、御約束と言うもんだ。嫌ならヤドリギのそばなんて、通っちゃいけないのさ」

「だって、こんなところにあなたがいるなんて、思いませんでしたもの」

若旦那様呼ばわりをされなかった事を、ほんの少しだがロバートは喜んだ。

「虎視眈々と君を狙っていたといったら、本気にする？」

「まあ、そうでしたの？」

「今夜はあの忌々しい眼鏡も無いし、いつもおいしそうな匂いのする君の体から、魅惑的な別の香りがしている。フランス製の香水でも使ったかな？」

「自分で作った匂い袋、フランス人ならサシェと呼ぶようなものを持っている所為でしょう。香りもドレスも純国産ですよ」

自分好みの香りを調合したと言う事らしい。国内産業の振興を図るために、御自身の婚礼衣装のレースも国産になさった女王陛下を見習ったのかも知れない。

「まるで舞踏会の後のシンデレラみたいなレディ、君の正体をちょっとぐらい教えてくれたって良いじゃないか。その、マーガレット・ホワイトって言うのは、そもそもが本名なのかい？」

「マーガレットは本名です。ホワイトは祖母の苗字ですから、まんざら偽名と言う訳でもありません。どうか、もう、お気が済んだら、お放し下さい」

「君が洗礼証明書なりパスポートなりに書かれている名前を教えてください、離さないぞ」

「そんな、めちゃくちゃです」

「うん。そうだな。自分でもそう思うが、教えてくれ。お願いだ。ねえ、この時間にこの格好という事は……ひょっとして行先は僕と同じ所だったのかな？」

今夜は主な王族・貴族、政界・学会・実業界で活躍する紳士と、その夫人・令嬢は王宮に集合していた。

「御想像にお任せしますわ」

「もう、いじわるなシンデレラだ」

今度は少々腹も立って、荒っぽく強引に深いキスをした。すると嬉しい事にマギーの体は、ごく自然な官能的な反応を示したように思われた。明らかに呼吸が荒くなり、ほおは赤みが差し、目は煌めいている。そしてそのこと自体に本人が戸惑っているような印象も受けた。

「酷い方、すぐにでもここを出て行きます」

「邸の皆で食べるはずの御馳走も、無しなのかい？　まだ子供のメイドたちなんか、ものすごく楽しみにしていたようなのに」

「だって、こんな……」

「ゴメン……もう聞かない事にするよ。だから、出て行くなんて言わないで欲しいな」

ロバートは力を込めてギュッと抱きしめた。そうだ。随分前から、本当はこうしたかったのだと、今さらながらに気付かされる。

「いくらヤドリギの下でも、もうそろそろ御勘弁下さい」

心臓の鼓動ははっきり感じ取れるのに、声は落ち着き払っていて、それが憎らしいとロバートは感じた。

「君って、ひょっとして独身主義の人？」

「独身主義と言うわけでは無いですが、結婚しなくても生きては行けますわ」

「遺産の相続なり、年金なり、しっかり有るみたいだね」

「まあ、そこそこは」

大粒の真珠の首飾りに見事なシルクタフタのドレス、下に落としてしまったショールも最高級のロシアンセーブルのようだ。「そこそこ」などと言うレベルの資産では縁がなさそうな極上品ばかりだ。

「僕は金褐色の髪に青い瞳のレディ・マーガレットに社交シーズンにお会いした記憶が無いのは、なぜかな」

「新大陸におりましたから」

「はあ、なるほど、新大陸の大富豪のお嬢様か。じゃあ、爵位持ちの僕なんか、どう？」

「どうって、それは、どう考えればよろしいのかしら？」

ああ、使用人臭い敬語が取れた、とロバートは思った。

「僕は君の花婿候補にたった今立候補した……って言っても、君みたいなレディには迷惑かい？　でも、生まれた場所ぐらい、教えてくれないのかな」

「……生まれたのはロンドンです」

「じゃあ、実家はこの近所？」

マギーは困ったと言う表情になった。どうやら凶星らしい。

「何で料理人なんか、ああ、そんな言い方は無いか。えっと、なぜ身分を隠して働いているの？　働くにしたって、なぜレディにふさわしい職種を選ばなかった訳？」

「家庭教師ガヴァネスに付き添い（シャペロン）なんて、なかなか良い口は有りません」

「それは一面真実だが、君の場合、全然説明になってないよ。僕はこれでも女性の服飾品の相場は、十分に承知しているんでね。家庭教師の年俸じゃ、下に落としちゃったシヨール一つ買えやしない。料理人の年俸だって無理だ。だが、君はこうしたものに慣れていてみたいだし……王族か大貴族の愛人ならこの邸のキッチンに潜り込んだりしないだろうしね」

だけど君はキスには慣れて無さそうだ……とロバートは言いかけたが、止めた。マギー、いやレディ・マーガレットはどう答えるべきか、困惑している所らしい。さっきまで柔らかにロバートの腕の中に納まっていた体が、強張っている。

「僕の口は臭い？　ちゃんと歯の手入れはしているつもりだし、酒の後に極上の葉巻を吸っただけだけど」

「大丈夫です」

「もう一回、キスしていい？」

「いや」

甘い声では無かったが、嫌悪感を持たれているともロボットには思えなかった。

「いけないの？」

「ダメです。もう離して」

「離す前に、条件が有る」

「何ですか？」

「デートの約束、出来ないかな」

「無茶です」

「じゃあ離さない」

「酷い方」

「そんなにひどい男でもない、自分じゃ思うけどね。酷いかな……単に、売り込みが強引なだけだ」

「寒いんですもの」

「じゃあ、僕が温めてあげる」

余計に体が硬くなった。失敗したとロボットは思った。

「デートは、難しいです。若旦那様。皆さんに内緒なのですから、なおさら無理です」

「そんな恰好をして『若旦那様』も無いもんだ。ねえ、僕の名前を呼んでよ」

「そんな……」

「知っているだろう？ 僕の名前ぐらいは」

「ロボット」

「うん。その方がしっくりくる」

「離して下さい、ロボット。さもないと……」

「さもないと？」

「ちょっと痛い目にあって頂くかも知れませんわ」

「どんな痛い目に？」

「そうですのよ」

ウォツ！　と思わずロバートは声を上げ、手が緩んだすきに、レディ・マーガレットはロバートの腕からすり抜けた。靴のつま先を思い切り女物の靴の細いヒールで踏みつけられたのだった。後にはロシアンセーブルのショールが残された。

## 落し物、贈り物・1

クリスマスの当日、実家が遠い、あるいは身寄りが無い使用人は、当然邸でクリスマスの祭日を過ごす事になる。

例年ならキーンズ侯爵家でもクリスマスパーティーを開いていたため、使用人たちは普段よりは豪華な食事を食べるものの、恐ろしく忙しい日を過ごしていたのだ。だが、今年は何の催しも無いため、クリスマスイブの夜には教会に行っていた者も多かった。ロバートはイブの二日前に全ての使用人に小遣いをやった。恐らくあの小遣いなど無用のマギーにも、ハーグリーブス夫人を通じて渡ったはずだ。「プレゼントはまた別にある」というと、若い従僕やメイドは大いに喜んだのだった。

ロバート自身は今日は親しい友人の邸を訪問し、幾つかの社交的な訪問もこなすので、忙しい。しかし老いた父もいるのだし、母も寝込んでいるのだから、あまり遅くまでは出歩くつもりはない。両親には自分以外の子供もいないのだから。去年までなら朝まで乱痴気騒ぎか、御婦人と意気投合するかであったのだから、変われば変わるものだ。

「お前はどうするんだ、ラドストック」

いつも真面目な彼に、休みらしい休みは無いのだ。夏の休暇はしっかり取らせようとは思うが。

「例年通り、こちらのお邸にいる皆と過ごすことになりました。午前中に一度、以前のお住いの状況を確かめて参りましょう。あちらの三人は、あそこで静かにのんびり過ごさようです」

兄の亡くなるまでロバートが住んでいた小さな邸は、老姉妹のメイドと彼女らの甥の三人が守っている。甥はもともとはロバート専用の御者だったが、今はロンドンに有る全部の厩と馬車の監督責任者を務めている。

ラドストックの両親は既に他界しているので、ロンドンで過ごすならあの小さな邸か、こちらの邸で過ごすしか無いだろう。妹の嫁ぎ先はリーズだ。夫はそこそこの羽振りの良い工場経営者で、二人の子供にも恵まれている。幼い甥や姪にはクリスマスプレゼントとカードは贈るが、会いに行くのは夏の休暇だけのようだ。兄は軍人でパキスタンのクウェッタ方面に配属されているらしいが、折り合いも良くないらしく、手紙のやり取りも無いようだ。それでもロバートが「インドでの利権獲得を目指すロシアは、南下を諦めそうになり。再びアフガニスタンは大変な事になりそうだ」などとタイムズの記事を見て話すと、ラドストックは血相を変える。クウェッタ駐在の部隊はアフガニスタンでの軍事作戦に直接かわるのは、確実だからだ。

「妹は早く危険な軍隊をやめてほしいと考えているようです」

「一昨年のカブールからの撤退の際の犠牲は、大きかったからな」

あの折、イギリス軍のカブール駐在部隊は、撤退する際にほぼ全滅した。その妹の心配も当然だろう。

「ですが、兄にもそれなりの事情が有ったの事でしょうしね」

「確かに、あの方面で目覚ましい軍功を上げれば、貴族の仲間入りぐらいはしそうだが……」

「どうやら最初は、意中の女性に求婚できる資格を得たいがために軍人になったようですが、その女性が亡くなりましてからは、紛争が起こりそうな外地ばかり志願して働いて来たので……」



「本国にはなじめないかな」

「そのような気が致します」

それからロバートとラドストックは、しばらくインド方面の憂慮すべき状態について、話した。話しながらもロバートの身支度はきちんと整えられていく。髪を整えるのは、ラドストックの得意技だ。彼に言わせると、ほんのちょっとした事でロバートの男ぶりが上がるらしいのだ。

「休みらしい休みも無くて、お前には済まないと思うよ」

「当然の事でございますから。どうぞお気になさらずに。今年はあの方が、使用人のために何か特別な食事を調理場の方で用意してくれているようです。エールを片手に、いつもよりのんびり頂けそうです。後はちよつとぐらいはダンスでもしましょうかね」

「誰かピアノを弾いてくれそうか？」

この邸では毎年一番大きな広間を、二十六日のボクシング・デーに使用人のために解放して来た。広間のピアノもその日は演奏自由なので、使用人達がダンスをするのは、いわば年中行事のようなものだ。

今年はその期間がクリスマス当日と二十六日の二日間になるわけだが、派手な催しは何も無い。

これまでは多少ピアノの心得が有る者が幾人かいたが、今年はどうなのだろうか？ 母付きのノーマ・シンクレアは少しならピアノを弾けるが、今年は介護についていて、それどころではない。家令のトンプソンも多少心得が有るはずだが、呆けてしまったので、今年はどう無理だろう。ラドストック自身は短い曲を二曲ほどなら弾けるようだが、譜面を読みこなせるわけでは無い。

「あの人はどうなのかなと、皆噂していますが、どうでしょうねえ」

「マギーかい？」

「ええ」

「恐らく、間違いなく弾けるだろうな。これはマギーの落としものだ。昨夜ドレスを着ていたマギーは、どこからどう見ても完璧な貴婦人だったよ」

「これはまた随分と立派な品物でございますね」

ラドストックは極上のロシアンセーブルのショールを手にして、驚いていた。

「ドレスもネクレスも見事なものだった」

「実際のドレス姿をご覧になったのですね」

さすがにキス云々は恥ずかしいので、内緒にした。相変わらず踏みつけられた部分は痛む。

「この落し物をどうやって返そうか」

「この程度の埃は私でも落とせましょう……箱におさめて、クリスマスカードの一枚も添えられますか？」

「そうだな。そうしよう」

「それにしても……昨夜王宮においでになったレディのおひとりなら、なぜ他家で料理人などなさるのでしょうな。全くもって、不可解です」

ラドストックの家は先祖代々キーネス侯爵家の森番を務めてきた。今はラドストックの伯父がその役目を果たしている。自分の身分の上昇のために、必死になる人間は多い。ラドストックの兄が命がけの軍役についたそもその理由も、使用人の階級からの脱出を目指しての事だったのだろう。

「自分の身分や階級を引き上げる必要を、全く感じていないって事かな」

「でしたら、よほど御身分のある御令嬢の……風変りな御趣味とか、何がしかの研究とか、でしょうか？」

ラドストックの「研究」という言葉は、良い所をついているのかも知れないと言う気が、ロバートはする。

「昨夜、ああしてドレスアップしていたからには、家族は奇妙な行動を容認しているという事だろう」

「どちらの御令嬢か存じませんが、風変りなおうちの方ですね。ですが……あの方の素性に関しては当分の間は内密に、という事でございませうね？」

「目的が分からないしな。なあ、ハーグリーブス夫人は何か事情を知っていると思わんか？」

「怪しいです。確かに」

「だが、マギーの作る料理は美味いからなあ。へそを曲げて、いきなり出て行かれても、困ってしまう」

「ハーグリーブス夫人には実の娘が一人おりまして、その娘の夫はそこそこ上手くやった海軍士官らしいのですが、先ごろ購入した邸宅の譲渡やら土地の境界やらで、元の持ち主の郷土と深刻に揉めているようです。その郷土と言うのが、大旦那様が良く御存知の人物だと思われます」

ロバートはその頑固そうな老いた郷土には以前会った記憶が有る。身分意識ばかりが滑稽な程強く、古い家柄の貴族の言う事は盲目的に有り難がるのだ。相手が自身の身分より下と判断した場合は、理屈も何も無視して、横暴で高圧的な態度に出るとも聞いた記憶が有る。

「お前、そのネタをどこで拾ったんだ？」

「奥様の介護にあたっているシンクレア夫人の弁護士になられた御子息が、大旦那様におっしゃっていたのです。双方がこちらのお邸の関係者だが、何かするべきだろうかと言うお話でした。大旦那様は自分は関与する気は無いと仰せでしたので、法の裁き通り、双方痛み分けのような形に落ち着きそうです……」

「じゃあ、僕がああ居丈高になる郷士の爺さんをなだめて、なおかつ経済的な損失って奴を、何かで補ってやって、ハーグリーブス夫人の娘婿が気持ちよく暮らせるようにしてやれば……」

「ハーグリーブス夫人に恩を売った事になりましょう」  
「だよな」

ちょうど話の切れ目で、ロバートの身支度が整った。ラドストックが差し出した五種類のクリスマスカードから、少し悩んでロバートはヤドリギを描いたものを選び、短いメッセージを書いて封筒に入れ、手渡した。

ラドストックは赤く美しい帽子用と思われる箱と、白い地模様入りの薄い紙に緑のリボンを持ってきた。彼に任せれば、趣あるプレゼントのように包装してくれるだろう。

後の事は任せて、ロバートは出かけた。調理場のあたりは美味しそうな匂いと賑やかな声で充ちているのが、馬車の窓越しにも伺えた。

「きゃっ！ マギーさん、凄いわっ、楽しみっ！」

若いメイドの嬉しげな声が、響いた。ハーグリーブス夫人はしきたりどおり「ホワイト夫人」と呼べど、メイド達に命じているようだが、若いメイド達はどうも「マギーさん」と呼んでしまうようだ。だが、それはマギーがメイド達の信頼を得ているからであっ

て、ロバートは構わない様な気がする。

それにしても、あんなに嬉しそうにはしゃぐからには、若いメイドや従僕達の期待を裏切らない、ちょっとしゃれた美味しいものが色々出されるのだらうと、ロバートは思った。そして、彼らが羨ましかった。訪問予定の家々で、マギーの料理のような美味しいものは全く期待できないのは確実だったからだ。

「はあ。これから不味いローストビーフやプディングを、美味そうに食わなくちゃいかんのだな」

友人の新婚の妻が懸命に作ったディナーをけなす事など、出来るはずもない。これも浮世の義理、友達甲斐というものだろう。それだけではない。その友人は判事で、先ほど聞いたハーグリーブス夫人の婿の邸の件で、確実に力になってくれそうな人物なのだ。彼も彼の妻も平民の出であって、贅沢とは無縁な家で育ってきた。彼らの気持ちの良い温かい人柄は大好きなのだが、食べ物へのセンスは絶望的なのだ。

「彼女なら、どう言うんだらうな」

友情を俗事で穢す……と非難するだろうか？　そう言うタイプでも無さそうだが、どこか俗世間の通常の価値観からはズレているのも確かだろう。

帰宅したら、何か美味しい夜食でも食べさせてもらいたい……無理だろうか？

ロバートは、これから食べる事になりそうな不味いものを思い浮かべて、ため息をついた。

## 落し物、贈り物・2

ロバートがやっこの思いで難行を終え、無事に戻った時には既に夜九時を過ぎていた。母は当然ながら眠ってしまっていたが、昼間、マギーが特別なチョコレート入りのとても柔らかかなデザートを出したとかで、それが非常に気に入ったらしい。母付きのノーマ・シンクレアも同じものを食べたと言う。

「何といいますか、柔らかでふわふわで、口に入れたとたんに溶けてしまう不思議なお菓子です。卵を泡立てた物を使っているのだと聞きました。チョコレート風味で幾つでも食べたくなるような美味しさでした。表面に粉砂糖で『メリークリスマス』と書かれておりまして、奥様はそれを大層お喜びでした」

母は幾度も「クリスマスね、良いわね」と繰り返して、ニコニコしていたと言う。

父は午後はずっと大広間にいると言うので、行ってみると、ピアノが聞こえ、威勢の良い拍手が聞こえる。口笛を吹きながら、皆で歌っているのだ。「藁の中の七面鳥」と言う曲らしい。若いメイドと御者見習いが一緒になって、陽気にちよつと滑稽な身振りで踊っている。終わるとヤンヤの拍手だ。ロバートに気が付いたものは礼をするが、酒に夢中な者、ピアノに気を取られている者もいる。こうした日は無礼講で、主人一家の誰かが来ても、かしこまらなくても構わないと言う事になっている。

「盛り上がってますね」

「うむ。皆、良い気分で食って飲んでおるよ」

ロバートが父の隣に座ると、年かさのキッチンメイド……確かマギーのすぐ後に来たメイドだが、彼女がお茶かエールかと聞いたので、エールをもらう。

「ちよつとなんか食える？」

そう言うとすぐに、コテージパイと呼ぶ挽き肉とマッシュポテトの料理で、田舎の宿屋や飲み屋にも有りそうなものが出てきた。正直言つてちよつとがっかりしたが、食べて仰天した。

「何だ、これ、なんでこんなに美味いんだろう」

普段はワインの父も、今は皆と合わせてエールを機嫌よく飲んでいる。

「皆で驚いておった所だ。見た目は普通のコテージパイだが、素晴らしくうまいからな。また実にエールに良く合う。普通に見えたアイリッシュシチューも普通じゃない美味さでな。作り方次第でこうも味が違う物かと驚いていたよ。ゲテモノだと思つておったハギスも、マギーが作ると乙な味でな。美味しいのだ。不思議だ」

「ハギスってヒツジの内臓に色々詰めて作つたプディングみたいなもんですよね」

「昔、スコットランド貴族の邸で食わされた時は、その異臭と不味さに閉口したものだだったが、こいつは美味いぞ。これがスコッチ・ウイスキーに実に良く合う。田舎臭い酒だと思つておったが、御愛飲なさつたジョージ四世陛下は先見の明がお有りになったのだな。

これならばフランスのブランデーに負けておらん」

「そう言えば、蒸留機や熟成のさせ方が急激に進歩したようですよ。エジンバラやグラスゴーあたりには羽振りの良くなった醸造業者がかなりいるようです。僕も友達の家で飲まされました。でもあれは、

そんなにうまくなかったな」

「マギーが言うには、この業者の品が一番うまいと言う事じゃった。ほれ、見てみる、もうすぐ空になるぞ」

ロバートは慌てて、テーブルの上の残り少ない瓶を取ってきて、手酌で注いでみた。するとさっきの年かきのキッチンメイドが急いで来たので、そのハギスを一切れとローストポテトを取って来させた。ハギスはロバートも悪評ばかり聞いていたが、良く出来たレバーペーストとソーセージが一緒になった様な味で、悪くない。いや、美味い。見た目が黒っぽくてブツブツしていて無愛想では有るけれど。

「いかなですよ、これはいかなですよー」

ウイスキーの瓶を抱え込んでべそをかいで独り言を言っているのは、泣き上戸の庭師だ。

「ボイド、何を泣いておるんじゃ」

「はい、旦那様、ハギスが美味すぎます。おかしいですよ、こんな。おっかさんのハギスが一番うまいって、言えなくなっちゃうじゃないですか……困っちゃうな……」

そこへマギーがやってきた。手にはスープを入れたカップを持っている。ピアノは若いメイド二人が弄っていて、どこかで聞いたような歌の一部や、讃美歌の一部を片手だけでわかるがわる弾いている。騒音と言う程ではないが、無い方が良い。だが、何か言うとしらけるだろうから、ロバートは黙っていた。

「ああ、ボイドさん、ごめんなさい。お宅のおっかさんから教えて頂いたのだけど、勝手に色々変えてしまったから、これはちよつと



インチキよね。このスープ、どうぞ。明日は何か、おっかさんに届けるんでしょう？」

「そう、そうなんです。おっかさんにプレゼントをね」

そういえば庭師のボイドは、スコットランドの出身だ。老母は下町の親戚がやっている宿屋で働いているらしい。音を立ててスープを飲み始めると、気分が良くなったらしい。トロンとしていた眼がまともな状態に戻ったようだ。スープを飲み終ると、老侯爵とロバートに深々と礼をして、部屋を出て行った。

「やはり、色々変えたのか。本当にこれはハギスにしては美味すぎる」

「恐れ入ります」

「さつき母の所に寄って様子を見てきた。チョコレートを使った柔らかい菓子を大層喜んでいたみたいだよ。ありがとう」

「私の仕事ですから」

金縁眼鏡姿で地味なドレスのマギーは、ちよつと見たところは田舎の牧師かなんかの娘のように見える。だが昨日までと違うのは、眼鏡をかけてはいるが、はっきりロバートの顔を見ている点だ。怒ってはいないようだが、嬉しそうでも無い。

「仕事じゃないのに、ピアノまで、ありがとう」

「久しぶりですから、楽しかったです」

「明日は？」

「明日はずっと弾いて下さる方が、見つかりました」

ロバートは、がっかりした。マギーのピアノが明日はもう聞けないようだ。

「トンプソンの姪だ。海軍士官の未亡人だったか？」

老侯爵の言葉で、ロバートも思い出した。思わず顔を顰めていたらしい。家令の姪は無駄に色っぽい女で、ちよつとうるさかった記憶が有る。

「何か、まずいか？」

「いえ、大丈夫でしょう。もうそろそろ、お開きかと思うけれど、最後に一曲、頼めないかな」

一瞬、マギーの視線が泳いだような気がする。どうすべきか悩んだのかも知れない。

「あまり長いものは、どうか御勘弁願います。皆も眠いでしょうし」

最後だし、やはり聞きたいものをロバートはねだる事にした。言わずにいて残念がるより、まだと思ったのだ。自分が好かれていたのか嫌われているのか、どうもわからない。眼鏡にランプの灯りが映り込む感じで、余計に表情が読めないのだ。

「じゃあ、最後にマエストロ・メンデルスゾーンの曲を何か、頼めるだろうか？」

「承知いたしました。では無言歌集から『デュエット』をお聞きます」

ロバートはその曲名を知らない。知っているマギーはどこでその曲を覚えたのだろうか？ 実家にはマエストロ自身が立ち寄るのだろうか？ 昨夜のドレス姿を思い浮かべると、そのぐらいの事が有ってもおかしくない様な気がしてくる。

ロバートとマギーのやり取りを聞いて、それは何だ、と言う顔つ

きをするのは男の使用人が多く、メイド達は上流社会で評判の音楽家の曲だと名前ぐらいは知っているようで「聞いてみたかったんですよね」などと言っている。

演奏が始まったのは静かで流れる様な優しい曲だった。友人たちの所で飲んだワインやらブランデーやら、今飲んだエールやウイスキーの酔いがゆっくり回る感じた。実際、老人たちは何人か、火の前で居眠りを始めている。だが残念な事に、ほんの三分かそこらで終わってしまった。

「きゃあー、すてきー」と呟いているのは、若いメイド幾人かだ。皆、ピアノを華麗に弾きこなすマギーに、尊敬の念を持ったようだ。「マギーさんて、何でもお出来になって、すごい方ですね」

「そうそう。フランス語だって、フランス人とフランス語で喧嘩できるぐらいすごいもんね」

「ああ、あの『ドレス事件』ね」

「何だい、それ」

「あのですねえ……」

メイドはその話をしかけたが、マギーの視線が向けられたのを敏感に感じたようだ。そして、こそこそと部屋を出てしまった。

「あ、ああ。ありがとう。素敵な演奏だったよ。どの料理も素晴らしいかったようだね。食べ損ねて何とも残念だが」

「料理は私の仕事ですから、当然です。御用命が有れば、いつでも出来る物ならお作り致しますが……」

「今日はよその家で、あまりうまいものが無くてね。マギーの料理が恋しくてたまらなかった。ありがとう」

そのあと、奇妙な沈黙が有った。自分だけではなく、マギーも緊

張しているのかも知れなかった。

「それでは、片付けもごさいますので、失礼いたします」  
「おやすみ」

ロバートは手を振ったが、マギーは恭しく礼を返しただけで調理場に行ってしまったようだ。老侯爵とロバートも隣の小部屋に移り、ブランデーを少し飲む事にした

「はあ……」

「どうした。ん？ 恋の病と言う奴か？」

「はあ。おそらく。ですが……彼女にそんな気は全く無さそうです」  
「お前が本気を出せば、何とかなろうよ。身分が整わない場合は秘密結婚という方法もあるのだからな」

「父さまは、あの子がお気に召しましたか？」

「地味に作ってはいいるが、大層な器量良しじゃないか。それに、何といっても賢い。体も丈夫そうだしな。何はともあれ、良い女は迷わずさっさとモノにすれば良いのだ」

「それではあんまりです」

「御先祖のなさった事を踏襲するだけだ。爵位を貰った最初の御先祖は文盲で、騎士と名乗っていても馬に乗った追剥と言っても仕方がない様な人物で、欲しくなれば人の妻だろうが召使だろうが、お構いなしに引きずり込んで子を産ませてきた。えげつないやり方だが、結果的には賢く美しい女を選んで子を産ませた事になったのだ。おかげで我が一族は整った容貌と均整のとれた肉体に恵まれている。今更、道徳がどうのなんて言っても手遅れだ。気に入った女は必ずものにする、それが我が家の伝統だぞ、ロバート」

そこでロバートは、思い切って昨夜の顛末を打ち明けた。さすがにキスをどんな風にしたかなどと言う具体的な描写は省いたのだが

……

「ほう、ヤドリギの下な。良い手じゃないか」

「ですが、どうなんでしょう。嫌われちゃったかな」

「普段は田舎の地主の娘のようななりをしているが、中身までそんなカチカチの野暮天でもあるまい。だが、どこの令嬢なのか」

「新大陸にいたと言うのが本当なら、僕が知らないのも不自然ではないですが……ハーグリーブス夫人が何かを隠しているのは確実でしょう」

「マギーは何歳だ？」

「女王陛下と同じ年だと、ハーグリーブス夫人が以前言っていました。嘘でも無さそうですが」

「只今の女王陛下がお生まれになった折、父君であるケント公のお邸にお祝いに伺ったが、その折、どなたかのお孫さんがもうすぐ生まれると言う話が出たがなあ。どなたであったか。うーん」

その誰かの孫と、マギーが同一人物という可能性は、大いに有り得るとロバートは思った。

### 落し物、贈り物・3

十二月二十六日のボクシングデーは使用人たちの休日で、主人は彼らに贈り物をする必要がある。共に過ごす妻子が在る者は邸を留守にするが、いないものは邸に居残りだ。マギーは「実家に家族はおりますが、年が明けてから一日替わりのお休みを頂ければ十分です」とのことと、もう一日料理を作ってくれる。

「やっぱり自分でプレゼントを渡して来よう」

あれこれ悩んだ末に選んだ赤いモロッコ革製の眼鏡ケースではあったが、喜んでもらえる自信はロバートには無かった。

「たまには眼鏡を外した顔を、見せてください」

そんな言葉を書いた小さなカードを添えたが、かえって不味かっただろうか？ マギーに限って言えば、どう思われるのか、あるいはどう思われているのか、さっぱりわからないのだ。

マギーにプレゼントを渡してから、今年最後の挨拶と言うつもりで社交クラブに顔を出した。ここも今日は普段より営業時間が短い。常連の五人が珍しく文学談義らしい。皆、世襲貴族の子息だ。

そのうち三人が既婚者で、三人とも妻は親戚筋の女性だ。ロバートに従姉妹とか親戚を紹介しようとして試みた者もいたが、どうもそんな気にはなれなかった。友人たちに言わせると「ロバートは器量好みが過ぎる」「母上が社交界の花形で美女だった方だから要求水準が高すぎる」という事らしい。自分では意識していなかったが、彼らの言うように自分の母親の顔が女性の美醜の基準になっているのかも知れなかった。

お世辞にも美しいとは思えない令嬢と結婚した彼らが、案外幸せそうなので、美醜が全てではないのは分かっているのだが……やは

り、自分の基準で「美しい」と思う相手と結婚したいと思ってしまう。

「キーツ、バイロン亡きあと、やっぱり時代はテニスンだ」

「ロード・バイロンと言えば女性との華々しいスキヤンドルの数々しか、頭に浮かばんな。詩の良し悪しなんて、僕には分からんさ。かろうじて小説なら、つまらん面白いぐらいの区別はつくが。妻には『趣味が良くない』と思われているようだが、知るものか」

「御婦人はロード・バイロンのような美男子が好きだからな。まあ、男も美女の方が好きだから、おあいこだ」

「サツカレーは悪くない。好きかと言うと、そうでもないが」

「ケンブリッジ出身のサツカレーより、いつその事庶民派のディケンズの方がいいな。僕の母などは彼の小説を読んで泣くんだ。お涙頂戴的な俗な部分はあるが、迫力は有る。実体験に基づいているらしいからな」

「君の母上は銀行家の令嬢だからな」

つまり生粋の貴族ではないと、軽く揶揄しているのだろう。「古い家柄だけが誇りというのは流行らない」と自分で言っていたくせに、矛盾した発言をする男だとロバートは感じたが、静かにコーヒーを飲んでいる。しばらくは皆の論議を黙って聞いて、良い所であろうと言うわけだ。

「実に全く、難しい世の中だ。昔の貴族は下々の者の感情やら尊厳やら考えずに行動できたのだから」

「フランス革命やら、奴隷解放やら、色々あったしな。昔のようには行かんさ」

「労働争議も近頃は華やかだ。まあ、僕は工場なんぞ持っていないから、人ごとだがね」

「だが、カリブ海方面のサトウキビ農園は君も関係あるだろう」

「まあ、あちらでは奴隷解放なんて有名無実さ。知性的な黒人なんて僕は知らんし、さほど気も咎めない」

「アメリカには戦闘的な黒人の活動家がいるぞ。知らんのか？」

「ああ、僕も聞いた記憶が有る。『皮膚の色・性別を問わず、人は皆平等の権利を与えられるべきだ』と言って回っているらしいな。ダグラスという男だ。まだ二十代だったと思う。十二分に知性的かどうかは知らんが、投稿やら演説やらは、かなり派手にやっているらしいぞ」

「御婦人が参政権を求めて演説するのだ。黒人の男が演説したって、さほどおかしくないさ」

「女が政治家になるって言うのか？」

「女王陛下は、確かに女性であられるぞ」

「そりゃあそうだが、我々貴族院議員の輔弼を受けておられる」

「ハハハ、陛下はメルボルン子爵しか、いや最近は王配殿下しか、ちょっとはピール首相も当てになさるが、我々はその他大勢という位置づけさ」

「王配殿下は王室内の不合理な冗費を節約されたようだが……」

「少々、しまり屋さんでいらっしゃる……な。ここのクラブの調理長のフランス式の料理はお気に召さなかった様だしな」

「食い物にうるさいロバートは、どう見る？」

カリブ方面の貿易で富を蓄えた家柄の男が、話を振ってきたので、仲間内ではあり、おかしな飛び火もしないと見てマギーの件をそれとなく聞いてみる事にした。

「見栄えの良い華やかな料理と、毎日食いたいものは違うって事だろう……なあ。れっきとした貴族の令嬢がよその家で料理人として仕事をしていると言うのは、何が目的だろうな」

「料理人が、それで務まるのか？」

「腕前は確かだな。他の使用人ともトラブルは無いようだ」



「新しく家庭料理の本を出版するにあたっての、実践と検証。このジャンルは御婦人方に変人気が有る」

「家庭内使用人の実態調査」

「女性の自立に向けての技術の追求」

「貴族の令嬢って言ったって、色々ランクが有るだろう。頭の中で男の年収ばかり考えているようなのも、珍しくないぞ」

「僕の奥様に言わせれば、それは女子に公平な教育の機会が与えられていないためなんだとさ。彼女が妙な政治活動でもおっぴぼめないか、ちよつと心配だ」

「君の奥さんは筋金入りのお姫さまじゃないか。労働者階級の不潔さ加減を見たら、恐れをなすだろうさ。大丈夫だ」

「工場主の嫁やら、娘やらに、過激なのがいるようだな。中には婦人参政権のためなら、破壊活動も辞さない物騒な女もいると聞くぞ」

「選挙権を女に寄越せ、女も大学に入れろ……そんな事を言う女は残念ながら増えているな」

「アメリカには女の大学が出来たそうだが、我が母校はそんな流れに追随しないで欲しいものだ」

「アメリカの女の大学なんて、大学なのか？ 私塾がデカくなっただけじゃないのか？」

「ちゃんと、学士号が授与されるそうだぞ」

「へっ。まあ、植民地レベルじゃあ、まともな大学のはずもないよな」

そう言った男はつい先日「アメリカ東部の幾つかの大学の学問的なレベルは低くない」と自分で言っていたのに、忘れたのだろうか、とロバートは思った。確かに元植民地を一段低く見たい感情はわかる。生意気な事に「1812年戦争」だの「第二次独立戦争」だのと呼ばれる争いまで、起こしたのだ。1814年にベルギーで講和条約が結ばれたとはいえ、その時イギリス側が感じた強烈な不快感を身近な大人たちから聞かされてロバートも育った。あのナポレオ

ンを相手にしないで済めば、絶対にイギリスの方が勝った争いだっ  
たらしい。

ともかく五人が五人とも「アメリカの女の大学」に対して否定的  
な反応を示した。だが、本当に大学らしい大学だとしたら、どうな  
のだろうか？ 勉強しすぎた女は頭でっかちで、鬱陶しい存在だと  
これまでは信じて来たが、それだけでは無い、何か新しい時代の変  
化を反映しているのだろうか、ともロバートは思った。

クラブで、王配殿下から女王陛下直属の料理長兼給仕長をクビに  
なったシェフの料理を食べた。ホタテガイの貝殻にホワイトソース  
で和えた魚介類を盛り、表面に焦げ目をつけた料理は目新しく美し  
かったが……

「美味しいな。やっぱり。堪えられん」

「さすがはアントナン・カレームの弟子だ」

友人達は絶賛したが、ロバートにはそれほどとは思えなかった。  
どうにもマギーの料理より不味い。

「ロバートの所は父上が美食家だから、定めし良い料理人がいるん  
だろうな」

「あ？ まあ、な」

まだ、マギーの話を皆にするのは早いと言う気がする。少なくとも  
もどこのだれかぐらいは突き止めてからにするべきだろう。それに  
デートの約束一つ、出来ていないのだ。父が何も思い出せていなか  
ったら、多少強引にでもハーグリーブス夫人に捻じ込むしかない。  
そう思い定めて帰宅すると、父と二人で夕食になった。

ロバートと父の夕食の給仕はラドストックがした。使用人と同じ  
メニューで構わないと伝え、ラドストックに適当に取り分けて持っ

て来させた。

ロシア風の赤いシチュー、フランス風の鶏のローストに栗を詰めたのやら、スウェーデン風と言う肉団子やら、ポルトガル風だと言いうタラとジャガイモの揚げたのやら、中国風のローストポークと言うのも風変わりだが美味かった。デザートのマドレーヌまで、何もかもうまかった。

「マギーの方が、カレームの直弟子より美味いですね」

「おお、昼はあのクラブに行ったのだったな」

貴族の令嬢が料理人をしている場合の動機と目的について、友人たちの言う料理技術の検証やら、研究やら調査やらと言う可能性は有るかもしれないと言う話を、ロバートはした。

「食う人間の健康を向上させねばいかんと考えているようだぞ。だから、オフィーリアの介護の食事も丁寧に作ってくれるんだろう。マギーの素性についてはオフィーリアが良く承知していたようだが、今のあの状態では、何も聞きだせんであろうな」

キーネス侯爵夫人オフィーリア・カルバートン・ボーダナムと言えば長年社交界の花形であった。だがその母も兄に死なれた後、すっかり幼児のようになってしまって、社交界のあれやこれやなど完全に忘れただろう。マギーの雇い入れに関しては、母とハーグリーブス夫人が相談して決めたようだが、あの家政婦はどこまで秘密を知っているのだろうか？

「オフィーリアは、身分の軽い者はほとんど無視するという所があったが、あれほど呆けた頭でマギー、マギーと言うのだ。同格の身分と見ていたのだろうかよ」

「ますます、ハーグリーブス夫人の話を聞かなくてはいけないって  
気がしてきました」

「食事も済んだし、一緒に聞か、マギーの事を」

ひっそり自分の部屋で読書でもしていたらしい家政婦が呼ばれたのは、そのすぐ後だった。広間では昨日よりも賑やかにピアノが鳴り、使用人たちのはしゃぐ声がしている。

## マギーの事情・1

「ひもじくない暮らしをする方法が海の向こうに有るかも知れないと、ここから海を見下ろして毎日考えていたそうだ。あまり自分の子供時分の話なんてしない人だったが、ここからの眺めは……特別なものだったんだろうな。貧しく生まれ、惨めに扱われ、孤独に死んだ。ここはそう言う女の人の墓だ」

絶海の孤島の断崖にポツンと立った墓標は祖父が建てさせたもので、それまでは幾つかの大きめの石と粗末な木の杭しか無かったらしい。

あの時の祖父の表情は、哀しいのか辛いのか、あるいは苦しい一生から自分の母が解放された事を喜んでいいのか、あるいはそのすべてであるのか判然としない、そんな顔つきだった。

当時幼かったマギーは祖父の母である人の事を誰も褒めない、それどころか話題にするのも皆が嫌がっているのを知っていた。だが祖父にとっては自分の母がそんな風に死後も扱われ続ける事は、どれだけ辛いだろうかと思って胸が痛んだ。だから祖父の隣で懸命に、曾祖母にあたる人の魂が安らかであるように祈った。

「マギーは優しいし、良い子だ。マギーの顔はこの人にとっても似ているのだよ。この人はね、王様が夢中になってしまいうぐらいの美人だったんだ……でもマギーとは髪の色が違うな。それにマギーの方がうんとお利口だがね」

「だからお祖父様は、私がお好きなのですか？」

「良くわからないが、生まれたばかりのマギーを見たとき、なんて可愛い子だろうと思ったよ。そして、絶対に幸せになってほしいとも思った」

祖父はマギーをだっこして、ぎゅっと抱きしめてくれた。頭を撫でてくれたり、抱きしめたり、額にキスをしてくれたりするとき、祖父はいつも極上の葉巻の匂いをさせていた。祖父は幼いマギーの知る限り、一番ハンサムで、一番賢い男性だった。それは大人になった今も恐らく変わらないのだと思う。

何しろ社交界で美男子と噂される男性の顔を見ても、気持ちが動いたためしが無いのだから。

祖父は「王様の気まぐれ」の所為で貴族になってしまっただけで、子供のころは貧窮院でいつもお腹を空かせていたのだと言う。そのころから仲良しだった女の子を本当に好きになったので、大人になってから、こっそり結婚した。そうしてマギーの母バーバラと二人の叔父が生まれたのだ。だが、マギーの母方の祖母にあたるその人、祖父の最愛の妻であった人は、三度目のお産の後、体を壊して亡くなってしまったのだと言う。

その後、大人になってから事情を色々知ると、祖父が爵位を賜ったいきさつは、それなりに理由は有ったとも思うが、祖父は今でも「あれは王様の気まぐれだ」と言い続けている。

「マギーのお父さんは立派な男だった。ただちよつと食べ物が好き嫌が多くて、体が弱かったな。マギーは何でも好き嫌いしないでちゃんと食べて、運動をして夜はぐっすり気持ちよく眠らないといけない。仕事をするにも学問をするにも、体が丈夫じゃないと、長くは続けられないよ」

母のバーバラは、パン屋の息子で当時はまだ駆け出しの作家だった父と結婚した。

かつて祖父の邸の使用人たちの中には「平民の息子が婿君なんて」とか、「バーバラ様がパン屋の息子と結婚なさりたいなんて、冗談

かと思った物だが……旦那様がすぐにそれをお認めになったのも、驚き入った」などとヒソヒソ噂する者もいた。そういう連中は、そのうちいなくなってしまうたが……

祖父は愛していた祖母の死後、ずいぶん経ってから「色々と義理も有ったし、うまく断りきれなくて」「互いに好きでもないのに」自分の娘と同じ年頃の女性と再婚した。再婚相手は名門貴族の一人娘で、その女性の亡父は祖父に取って恩人だった。その恩人は死の間際に、自分の家と一人で残される娘のために再婚してほしいと願ったそうだ。それを祖父は「とてもじゃないが、断れなかった」という事のようにだ。

祖父は管理を任された恩人の家を建て直したが、その一人娘レディ・ハリエットは軽はずみな人で色々な男たちとの親密すぎる付き合いを隠そうともしなかった。それだけなら、祖父も知らぬふりを決め込む事も出来ただろう。レディ・ハリエットは「卑しい女の産んだ」継子たちを嫌った。最初のころは使用人を使って嫌がらせをする程度だったが、次第にエスカレートし、ついには虐待行為に走ったのを知ると、祖父はハリエットを自分や子供たちと別居させた。その中には生まれたばかりのトマス叔父も含まれていたのだ。

その後、マギーの父は病気で亡くなり、母バーバラはマギーと双子の弟達を連れて祖父のもとに戻った。そして、まだ若かったヘンリー叔父やアルフレッド叔父の世話をし、マギーと三歳しか違わないトマス叔父に至っては、殆ど自分の子供と一緒に育てたと言っただけだ。

母バーバラは自分に委ねられたすべての子供たちに愛情を注いだ。そのおかげでトマス叔父は何か有るとすぐに、何でも姉であり育ての親でもあるバーバラに相談するのだ。ただ一つの事を除いては……だが。

母バーバラも深く悩んでいた。それも長い間ずっと。トマス叔父を愛していたからだ。

「私があの子と初めて会ったばかりのころ、あの子は好き嫌いが多くて、やせっぽちで、夜中は何かに怯えて泣いたりしたわ。貴族には相応しくないと言われたけれど、しばらくの間私は、あの子と赤ん坊のお前と一緒に自分のベッドに寝かせていたの。そのうちあの子は『僕は赤ちゃんじゃないから、頑張る』と言って、ちゃんと自分の部屋で寝るようになったし、おねしょも治まったのよ」

母は完全に中産階級のやり方で、幼い弟も子供たちも育てたのだ。

「愛情を子供に確信させる事こそが重要だと思うの。マナーだの格式だのは後付けの勉強でどうにかすれば良いのよ。多少マナーから外れても、人への優しい気持ちが有れば、感じの良い振る舞いは十分できるでしょうし。そもそも私までが貴族のやり方にこだわる必要なんて無いわ」

祖父はその母の養育方針に、全く文句は無いらしかった。

「子供は伸び伸び明るく元気でいるのが一番だ。バーバラの言うようにマナーは気持ちを補う物であるのが本筋だからな」

祖父の方針でどの子どもも読みたい本を読み、やりたい学問をする事を積極的に勧められた。馬に乗りたいたい言えば、すぐにそのように手配してくれたし、絵が習いたい楽器を演奏できるようになりたいたい言えば、すぐに専門的な教師を招いてレッスンさせてくれた。

「本職と言う程ではないが、そこそこ人を楽しませる程度の心得は有った方が人生は楽しいものになる」というのも祖父の考えで、叔



父達もマギーも兄たちもピアノやヴァイオリンの演奏がそこそこ出来る程度には学んだ。楽しい雰囲気でも自然に音楽になじむように配慮されたレッスンを受け、皆自然にそうなったのだ。

トマス叔父とマギーはピアノを連弾したりする事も多かった。嗜み程度に出来ないともずいという事で習ったダンスも、マギーは良く一緒に踊って練習した。優しくてハンサムな叔父とのダンスは楽しかった。だが、ある日母にこんな風に言われてから、無心に楽しめなくなった。

「マギー、トマスはあなたに何か困った事は言わない？」

「別に何もないけど、なぜ？」

「トマスがあなたを見る眼がね。ちょっと気になるの」

「冗談半分に『マギーにプロポーズできないのが、残念だなあ』って言われた事はあるわ」

「冗談で紛らわすって事は、半ば本気という事よ。良いかしらマギー、トマスの気持が暴走したりしたら、あなたにもそしてトマスにも不幸な結果になる可能性が高いわ。だから、万事慎重にしてね。あなたが外国に行って勉強している間に諦めてくれるかと期待していたのだけどね……」

母の心配をよそに、アメリカやヨーロッパでの遊学を済ませて帰国して以来、幾度かトマス叔父には会ったが、常に紳士的で節度ある態度だった。「マギー、何か困った事が有ったら、何でも相談に乗るよ。僕にできる事なら何でもするし」と言う言葉も、家族としての愛情の表れと思っていた。母は心配する必要がある事を心配している、そうマギーは思っていたのだ。この夏までは。

トマス叔父は二十歳を過ぎた時点で、母方の先祖の土地を受け継ぎ、リズモア侯爵となった。その時点で祖父と一緒に過ごした邸を

出ている。だが、今も三日に一度は母バーバラを訪ねてくる。夏のあの日もそうだった。母と話をしてから、庭先でハーブを摘んでいたマギーに声をかけたのだ。叔父の顔が暗いのがマギーにも気になった。

「僕は本来、ここに住む権利だって無かったんだ。でも父さまもバーバラも僕を分け隔てなく扱ってくれたし、愛情を傾けてくれた。でも、今や僕は大人で、真実を知ってしまった。辛い真実ってやつをね」

辛い真実とは一体何なのか、マギーには見当がつかなかった。だから次の叔父の言葉を待った

「だが、結婚できないと思っていたマギーと、ひょっとすると出来るのかも知れないぞ」

トマス叔父は冗談めかしてそう言って笑ったが、悲しそうだった。自分はレディ・ハリエットと不倫相手との間にできた子であって、本当は爵位を受け継ぐべき立場に無い。そう叔父はマギーに告げたのだった。マギーはそんな話を全く知らなかったので、驚き、何と慰めれば良いのか、分からなかった。

「マギーと結婚できれば良いんだが、無理だよな。世間的には姪と叔父だってことになっているし……僕の実母のハリエットは生きているし……第一、バーバラや父さまが反対なさるだろうからな」

「爵位は嫡出子しか、原則的には継げませんでしょう？」

「僕は、本当は領地も爵位もいらない」

「でも、亡くなられたリズモア侯爵との御約束があると……」

「そうだね。マギーの言うとおりだ。父さまは、その為に僕の母と再婚なさったようなものだから、無下にはできないんだなあ」

時折冗談半分に「マギーと結婚したい」とは聞かされてきたが、一種の挨拶か親愛の情の表現だと思って深く考えては来なかった。母の言う事は大げさだと思っていた。だが、事情を知った今、叔父とは会わない方が良いだろうとマギーは思っている。少なくとも叔父が結婚するまでは……。マギー自身は結婚なんて考えた事も無かったのだ。

その日トマス叔父が居なくなってから、祖父はマギーに言ったのだ。

「しばらくトマスに会わない方が良い。マギーがどうしてもトマスと結婚したいなら別だが。だが、その為に払う犠牲は大変に大きなものになる。だから、良く考えてほしいのだ」

祖父が願わない事をしたくない。それがマギーの正直な気持ちだった。トマス叔父を愛していると思うが、家族としての愛であって、異性に対する愛では無いように思う。

「トマス叔父様は兄のような方で、結婚を考えた事は有りません。それに、私、以前お祖父さまのおっしゃっていたように、結婚はしない方が良いのかも知れないと思っています。ずっと自分なりに打ち込めるものを探して来ましたが、やはり食べる事に関わりのある仕事を続けようと思います。看護や医学と言った方面で、懸命に活動している人達の仲間に入る事も考えたのですが、私は彼女たちみたいに深い信仰も無いですし、ひたむきになれません。だから、そういう方たちを外から支える様な活動を、美味しい食べ物と絡めて、何らかの形でやってみたい……。そんな風に思います。例えば『食事と健康』なんて課題は、一生研究するに値するように思うのです」

すると祖父はホッとした顔になって笑った。

「そういう事なら、大いに応援するよ。年金の増額もしょうか」  
「いえ、年に五千ポンドでも頂きすぎです」

そんな時だった。キーネス侯爵家からの話が舞い込んできたのは。

## マギーの事情・1（後書き）

設定上の矛盾になりそうな点を訂正しました。  
遺言云々を10月25日に更に訂正しました。

## マギーの事情・2

「学問でも研究でも、好きなように好きなだけ思い切りやればいい」

そういう理解のある、使用人たちに言わせれば有りすぎる祖父のおかげで、マギーはアメリカに有る女性のための大学に行き、歴史や芸術の勉強を好きにさせてもらった。大学では一応最優等生ではあったが、就ける仕事は教師以外めばしいものは無かった。それに飽きたらず、その後プロイセンの都ベルリンやベルギー・イタリアなどで医学や生物学、看護学に関する事柄を学んだ。子供のころからそうした方面には興味が有ったからではあったが……。何か自分にしっくりくる仕事を求めて巡ったヨーロッパでも、求める物は見いだせなかった。献身的に患者を介護する尼僧院であっても結局の目的は布教なのだと思ひ知らされたり、凄まじく男尊女卑的な学会はよほどの覚悟が無いとやって行けない世界だということが身に染みただけであった。

それでも最先端の微生物学、特に食品の衛生や醸造に関わる分野での見聞を広められた事と、医学を志す尊敬できる女性の知人を幾人か得た事はマギーに取って大きな収穫ではあった。そして彼女たちに触発されて、飢餓状態の 아일랜드 の現状や、労働者たちの生活改善のための様々な努力に目が向くようになった。そして結局の所、自分のやりたい仕事は自分で作り出すほか無さそうだと言う結論に達した。

「私はね、若いヤル気のある 아일랜드 人には新大陸やオーストラリアで思い切り頑張ってもらう方が良いと思っっているんだ。一刻も早く 아일랜드 の食料の輸出を止めさせなければいけないが、国会での話し合いは上手くいかない。このままでは法律の改正を待

つ内に犠牲者は増え続けるだろう」

マギーが帰国してすぐにアイルランドのジャガイモの不作による飢饉について話題にすると、祖父はもう、とうの昔に具体的な行動を取っていた。さすがだと思った。カソリック教徒であるアイルランドの貧しい小作民に対する差別的な意識は根強いものが有ったし、「神はアイルランド人に教訓を授けるためにこの災害を起こされた」などと公言する政府高官もいるし、確かに祖父の言うように「政府に抗議したり国会で演説している間に餓死者が増える」のは間違いないさそうだった。

クリスマスの事で母と相談すべきことが色々あり、マギーが祖父の部屋にも挨拶に寄った時にも、一向に収まらないアイルランドの飢饉の話題が出た。

「この件に関しては最近、マギーの雇い主のキーネス侯爵の子息・セルビー伯爵にも協力してもらっている。彼もかなりの船を押さえているからね。だが、正直言って、まだまだ船が足りない」

「まあ、そうなのですか？　ならば、私に年金として下さっている分のお金もお役立て下さい」

「資金的には困らないんだ。船そのものの絶対数が足りないって言う話だから。それはそうと、マギーは近頃、彼とは個人的に会話をするのかな？」

「いえ、それほどではないですが……作った料理はちゃんと食べてくれます」

「ほう。好き嫌いせず元気に食べる健康な好男子と言う訳だ。そうは思わないか？　マギー」

「そうなんですか」

「その……トマス辺りより、骨太で多少厳つい系統だが、彼の御先祖は勇猛果敢な騎士だったのだ。顔の造作は人によっては男らしい

整った顔と言うだろうと思うがな。好みは人それぞれだ。まあ、いい」

その後は、ジャガイモの病気の原因は、何がしかの微生物の可能性が有ると言う話になった。祖父はそうした生物学などの専門教育を受けていなくても、新しい概念を正しく理解できる希有な人なのだ。

「キーネス侯爵夫人の症状は？」

「良くもなりません、悪くも無いと言う感じでしょうか」

「なあ、マギー。良い所で、切り上げて自分の家なり、この邸なり、戻っておいで。トマスには結婚したい女性が最近になって、ちゃんと出来たようだよ」

トマス叔父に意中の女性がいると言うのは、好ましい変化だとマギーは素直に思った。やはりトマス叔父を異性として愛していた訳では無いのだと、今ならはつきり言える。

「別にマギーは、ショックでも何でもないよね？」

「ええ。そう言えば、クリスマスの折のドレス姿を……彼に見つかってしまいました」

「経歴詐称なんかで、怒られたか？」

「いえ。知っていて知らないふりをしてくれますが……」

「どこの誰なのか、問いただされていないのか？」

「ええ」

「ふーん……マギーの料理が美味かったからかな？」

「かもしれません」

「ちょっと、面白い状況だね。でも、やっぱり切りの良い所で帰っておいで。マギーに似合いのスケールのもっと大きな仕事をさせてあげられそうだし」



祖父は工業地帯の人々の生活の改善、特に食料を改善する活動にマギーが積極的に関わられるのではないかと考えているようだった。

「ランカシャーで非常に面白い試みが始まったようだ。思想的にはミスター・オウエンの影響が大きなグループみたいだが、注目に値すると思うよ。これからはこうした自発的な協同組合が様々な産業で大きな意味を持つ様になるかもしれないね」

「ミスター・オウエンの活動は理念は立派ですが、アメリカのインディアナ州での活動は結局構成メンバーのいさかいで、立ち行かなくなっただけですよね。アメリカでも話題になってました」

「だが、恐らく、彼は大きな失敗から色々学んだ、と私は思う。彼が根絶べき三大悪として『私有財産』と『既成宗教』を上げたのに、は必ずしも賛成しかねるが、『愛無き結婚』を上げたのは大賛成だ。従って私は部分的には有るが、彼の思想も受け入れることが出来るんだよ」

そう言って祖父は笑った。ひとしきり話し終ると、マギーは自身自身の家に一時的にだが、戻った。

学業を終えて帰国すると、祖父はロンドン市内に小さいが使い勝手の良い家をくれた。その家は完全にマギーの財産で「祖父と母が亡くなった後なら」という条件付きだが、マギーの考えでどう処分しても構わないのだった。その家には管理人兼番人のような感じでマギーに調理の基本を仕込んだ元キッチンメイドのミリーと馬丁で御者役も兼ねるボブの夫婦が住みこんでいる。メイドは祖父の邸から通う形で、いつも三人ほどが来ているらしい。らしいと言うのは、マギー本人が夏以降、キーネス侯爵家のロンドンの邸に寝泊まりしているからだ。

「よそのお宅で料理人なんぞなさらず、お戻り下さい」とミリーが言うのは分かっている。しかし、あのハーグリーブス夫人と言うか、かつてサラ・ブラウンと名乗っていた頃は母バーバラの腹心であった彼女が、困っていると聞いて、手伝ってみようと思ったのだった。それが事の発端だったのだが……

久しぶりに戻った自宅で、マギーは入浴した。最新型の浴槽とシャワーを備え付けた浴室を気兼ねなく使えるのは気分が良い。今いる、キーネス侯爵家では、ハーグリーブス夫人の特別な配慮で毎日ヒップバスを使い、髪や体の手入れのために湯を頼める状態ではあるが、辺りにしずくがはね飛ぶのを気にしながら、湯の追加も誰かに依頼しないといけない状態なのだ。

それこそ入浴なんて馬鹿馬鹿しい贅沢と、世間一般にはまだ受け止められている。こうした入浴をしたいとつい思いってしまう自分は、やはり「上流階級の墮落した生活」になじんでいると、労働者階級の活動家あたりに言われてしまいそうだ。そう思って、マギーは苦笑した。

「自分の手で何も稼ぎだせない」と非難されるのが嫌で、アメリカにいた時も食堂でアルバイトをしたことが有る。だが「大学に通うような上流のお嬢さんにふさわしくない職場」と、当の食堂のおかみさんに言われてしまったのだった。マギーの料理は受けが良く、客の入りも良かったのだが……。そんなわけでアルバイトは夏休みの半分の期間で終わらせざるを得なかった。

マギーの父方の従兄弟たちは、ひたすら美味しいパンを追及している。ああいう迷いのないキツパリした姿勢で、一つの仕事に打ち込める彼らがうらやましい。それでも少しでも条件の良い結婚相手を探す事ばかりに時間を費やす令嬢たちの群れに加わらずに済んでいるのは、間違いなく祖父のくれる年金と邸のおかげなのだ。

「ともかくも複数の使用人がいて、自家用馬車が維持できる程度の年金は必要だろう。必要なら、今の倍額までなら、すぐに出すよ」

そんな風に祖父は言うが、五千ポンドの年金でも十分すぎるとマギーは思う。

確かに爵位も領地も持ったそれらしい貴族は一万ポンドほど必要だろうが、それは体裁やら格式のための費用が大半だと思うのだ。そこそこの地主階級の年収が三千ポンド、やり手の医師や弁護士なら千ポンドといったあたりが通り相場だろう。これが庶民となると熟練工でも百ポンド、普通のメイドは十ポンド、それを思えば結構な金額だと言える。

「まともな使い方を考え付くなら、金は多い方が良いに決まっている」というのが祖父の金銭哲学らしい。

祖父は自分より若くて才能が有る人物の話聞くのが好きで、好奇心が強い。そして将来有望な産業や人材に投資し応援するのが生きがいらしい。めがねに適った投資先の鉄道会社や船会社・商社・銀行も農場も醸造所も工場も、皆、良い業績を上げている。どうやら「一昔前の貴族の骨董趣味より、良い趣味だと思っている」らしいが、確かにその通りだとマギーは思う。

あのロバートは、そうした祖父のめがねに適った人物の一人のようだ。あのキスは……嫌では無かった。いや、それは正直な感想ではないかもしれない。宗教的には恥ずべき事かもしれないが、生物学なら「生理的反応」とでもいうのだろうか？ 自分の体がこれまでにない様な反応をしたのは、紛れもない事実だった。

マギーはベルリンで解剖学の講座を聴講した折、人間の脳の標本を見た。

「人の脳の下の方は、もっと下等な動物と極めて似通っているのです」

そう言われてみると、確かに一番下の方の部分は犬や猫やワニやトカゲとさして変わらない形をしていた。基本的な欲求は、それらの動物と人間は大した違いが無いと言う事でもあるらしい。犬の場合、嗅覚によって大きく感情が左右されるらしいが、人はどうなのだろうか？ ある研究者は「仮説ですが」と前置きして、人の場合も相手の異性の体臭が好みか否かで、好きか嫌いかが決まる部分が大きいかも知れない、と言ったのだ。

自分は、あの、ロボットに抱きしめられた時、彼の香りを好ましいと感じたのではなかったか？

「私の脳の原始的な部分は、彼を好ましいと感じているらしいわ」

マギーは真っ白いバスタブにのんびり浸かりながら、そんな事を考えたのだった。

## 困惑・1

「マギーは明らかに上流家庭、それも恐らくは最上流に近い家の令嬢だと思われるけれど、一体どこの誰なのか、知っているのだろうか？ 雇い主にはちゃんと教えてくれるべきじゃないか？」

そうロバートが切り出すと、ハーグリーブス夫人は表情を硬くして、こう言った。

「申し訳ございません。私の口からは細かい事は何も申せません。ただ奥様が大層信頼なさっている方のお嬢様だとしか、申し上げられません。夕方から少し外出しておりますが、夜の九時までには戻る約束です。戻り次第、直接お話なさって頂ければと存じます」

「こんな時間に外出って、どうしたんだ？」

「ちよっと近場での用足し、だとは思いますが」

「聞いていないのか？」

「はい。家政婦の私は……取り締まる立場ではございませんので」

それは確かに正論なのだ。だがマギーを雇う決定を下した母は、その後、急に呆けてしまったので、それはちよつと違うのではないかとロバートが言おうとしたところ、マギーが帰宅したらしい。従僕にすぐにこちらに呼ぶように命じる。

「それでは、私は下がらせていただきますので、後は直接お確かめください」

そう言うと、ハーグリーブス夫人はその場から居なくなってしまった。すると老侯爵までが「後はお前に任せる。ま、仲良くやってくれ。な」などと奇妙な事を言って、出て行ってしまった。そのす

ぐ後に、マギーが部屋にやってきた。やっぱり眼鏡を掛けていて、地味なグレーのドレスを着ている。

「遅くなりました。失礼いたします」

「まあ、いいよ、そんな固い挨拶は。ともかくそこにかけて……」

ロバートは普段なら客を座らせる椅子に座るように促した。どう話を切り出したものか、正直、困惑していた。だが、本当の事を言うのがこうした場合、結局は一番早いのだと思い直し、率直にハーグリーブス夫人を呼び出して、マギーの身の上について聞こうとしたら、拒否されたと伝えた。

「それにしたって、よくもまあ、僕の母が住みこみを認めたね」

「侯爵夫人から私の母にお話を頂いた時には、亡くなられたお兄様の御健康に少しでも良いものを食べて頂きたい、そんな御事情のようでした」

「君のお母様はどなたかな？ 恐らく僕も名前ぐらいは存じ上げている方だろうが」

「バーバラ・リードです」

「……って、あれ？ アフトン公爵の一番上のお嬢様の？ ええ？ そうなんだ。と言うと、君はあの亡くなられた、作家のサー・アイザックのお嬢さん？」

「そうです。マーガレット・リードが本名です」

「レディ・マーガレット・ウィルモア・リードって言うべきじゃないのかな？」

「母はサーの称号を得た父アイザック・リードの未亡人ですからレディ・リードですし、アフトン公爵である祖父オーガスタス・ウィルモアの娘ですからレディ・バーバラでもあるわけで、二重の意味でレディと呼ばれるべきでしょうが、私自身には何の爵位も称号も有りません」

「ああ……確かに、決まり通りだとそうなるんだな。でも、君よりレディらしくないレディなんて、掃いてすてるほど居るよ。そんな連中でもレディって名乗ったり、呼ばせたりしている。アフトン公爵には幾度もお目にかかっているが、お孫さんは全員男だとばかり思い込んでいたよ」

「そう言えば侯爵様は？」

「マギーの事は全部僕に任せるとさ。眠かったのかも知れない」

「それは、遅くなりまして……申し訳ございませんでした」

今まで何をしていたのか知りたいのはやまやまだが、れっきとした公爵の孫娘である事がはっきりした相手に、主人面して問いたただすのも不躰だろうとロバートは思った。

「ねえ。新大陸に居たって言っていたね」

「ええ。アメリカに四年おりました、それからヨーロッパの数か所で寄り道を」

「ひょっとしてアメリカの女性のための大学へ？」

「ええ」

「なぜまた料理人を？」

「侯爵夫人から私の母に対して、亡くなられたお兄様の御健康を回復するにはどうすればよいだろうか、という御相談を頂いたのがきっかけでした」

最初は通いで病人の体に良さそうな物を持ってきたという事だったらしい。財政的な問題もあり、兄の病の事も有り、フランス人の料理人モアブルは「自分に相応しい華やかな宴」が催されなくなっただのが不満でならなかった様だ。それでも父の食べる物はどうにか作っていたらしいが……

「お兄様の御病氣に一番詳しい医師は外国よりむしろロンドンに多

くて、転地療養なさつても適切な治療を受けられる見込みも無かったですから、自然このお邸で寝ておられる訳で……侯爵夫人としてはロンドンで出来そうな事は何でもして差し上げたい。そういう一心でいらしたのでしょ」

侯爵夫人がモアブルに病人食を作るように依頼すると「自分はそんなものを作り到此まで来たんじゃない」とかなんとか言って不機嫌になり、飲んだくれて暴れたらしい。その件に関してはロバートも、母付きのノーマ・シンクレアから聞いてはいた。

「侯爵夫人が私の作った物の味を気に入られて、どうせならこのお邸で作って欲しいとおっしゃったのです」

「それで、君はその……僕の母の非常識な依頼を、受けたの？」

「非常識とはおっしゃいますけど、御病人の事を考えましたら合理的です。私、ドイツやイタリアで介護や医療と食事と言うテーマについて、自分なりに学んだり考えた事も有ったものですから」

「へええ、そんな勉強もしてたの」

「中途半端でお恥ずかしい限りですが、それでも食事と健康について学問的な見方が多少は出来るようになったと思います」

「ふーん」

「採用試験と言うようなつもりで、祖父の邸で私の作りましたコース料理を侯爵夫人に召し上がって頂いて以降、調理場をお任せいただくと言う話が出まして、私としては経験を積みたいという気持ちがありましたから、即座に御受けしました。実際の交代に関してはいささかムツシュー・モアブルと揉めました」

「前、メイドが言っていたフランス語のけんかとか……ドレス事件とか？ その辺の事情なのかな」

「どうやら完全にヤル気を失くしていたモアブルは、領地から届いた野鳥類をいい加減に扱っていたらしい。」



「猟銃の弾や骨折したりした部分の切除もしてませんし、内臓の抜き取りも不徹底で、実にいい加減でした。小娘に何がわかるって言われましたので、自前の包丁を持ち出してドレス……つまり解体したのです」

するとオートキュイジーヌ（正式な作法に則った高級フランス料理）の何たるかもわからんだ素人は、田舎臭いゲームパイ（野生の鳥獣の肉を使ったパイ）でも焼くのがせいぜいだ。アントナン・カレームの料理を見た事も無い奴に、何が分かるかとモアブルが言ったらしい

「私はムツシュー・カレームに直接の御指導を頂いた経験が有る、と言いついてやりました。本当は祖父がムツシュー・カレームと古くからの知り合いでしたので、子供時分にムツシューの働く調理場に幾度か入り込んで、お手伝いした程度の事なのですが」

「良く、つまみ出されなかったね」

「物心ついてからずっと、キッチンメイドの仕事を手伝っていましたから。子供でしたが、まともに鍋を洗い、野菜の皮を剥くこと程度は出来たのです。普通の貴族の家庭では、そうした事はさせてもらえないのでしょけれど、祖父は興味が有る事は犯罪行為ではない限りは何でも、納得のいくまでやってみれば良いと言るのが教育方針でして……そんなわけで調理の様子をムツシュー・カレームは幾度か見学させてくれました」

「へええ、で、モアブルとのやり取りは、ずっとフランス語だったんだね」

「ええ。その後、その野鳥類をどう処理して、どう料理するか私の考えを聞かせろと言うので、思ったままを申しましたら、ムツシュー・モアブルが……調理場を明け渡しました」

「思ったまま」の内容がモアブルの予想より高度だったという事だろう……とロバートは思った。もっとも、退職金が払われる内に貰える物だけでも受け取って帰国した方が賢いと踏んだ、それだけかもしれないが。いずれにしろ、フランス人の気位の高い料理人に場所を譲らせるのは、面倒であつたのは間違いない。

「そちらのお祖父様のアフトン公爵は何とおっしゃっているの？

マギーがこうやって務めているのは不体裁だとはおっしゃらないの？ ああ、無論、うちとしては美味しいマギーの料理が食べられる期間が長い方がうれしいけれど」

「家庭の事情で……しばらく私が祖父の邸を空けた方が良いと言う判断が有ったのですが……どうやら問題が片付いたようで……こちらのお邸に御迷惑がからない様なキリの良い時期を選んで、戻つたらどうか、とは言われましたが」

「それは、どんな事情？」

「私自身の事でしたら何でも正直に申し上げますが……そうではないので、お教えできません」

「……じゃあ、君自身の事なら、正直に教えてくれるんだね」

「はい」

ロバートは深呼吸して、一気に一番知りたい事を尋ねた。

「僕の事、好き？ それとも嫌い？」

マギーは大きく目を見開き、唇を半開きにしてロバートの顔を見た。少し頬に赤みが差したように見えたが、すぐに顔を伏せてしまった。膝の上で拳を握り、少しうわずった声を出した。

「仕事とは無関係だと思われませんが」

「でも、僕にとっては、目下の所、一番気になる事だから……教え  
て貰えないだろうか」

「正直申し上げて、わかりません」

「男の兄弟がいるよね？」

「一歳年下の双子の弟がおります」

「あー、そうだね。弁護士になった方の人は顔ぐらいは知っている  
けど、もう一人は役人だった？」

「香港総督のもとで仕事をしています。ずっと東洋に興味があった  
様なのです」

「へえ、だから、中国の料理の事なんて知ってるんだね」

「中国人は食べる事にこだわりがある人たちのようです」

「……中国人の事は、良いんだ。問題は君の気持ちだけど……わか  
らないって……婉曲なノー？」

「未経験な事なので、どう考えるべきなのか、自分でも判断がつか  
ない。そういう事です。それ以上の意味は有りません」

「今夜は、こんな時間まで、何していたのかな？」

「自宅でゆっくりお風呂に入って来ただけです。こちらでも皆さん  
良くして下さいますけど、自分の好き勝手とは行きませんから」

「うーんと、君さえその気なら、この邸でも好き勝手出来るんだが」  
「……困りました」

マギーは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。自分は随分と不  
躰で破廉恥な事を言ったと受け止められたのだろうか、ロバート  
は狼狽した。だが、聞きたい事は、聞いておかねばいけないと思  
い、気を取り直した。

「親御さんが決めた婚約者とか、結婚を前提に付き合う男性は？」

この前の様子だと言わないと言う風に受け取れたが……」

「いません。男性とのお付き合いも未経験です」

「じゃあ、経験をして見たら？」

「え？」

「僕とために付き合ってみてくれない？ 君を困らせるような事はしないって約束する。僕には現在付き合っている女性は居ないから、その点は安心してくれ。その、仕事に差し支えない時間に……一緒に公園で散歩でもしない？」

「まあ、それでしたら、すぐに噂になってしまうではありませんの」

確かにそれはその通りだと、ロバートも思った。もっともロバートは噂になっても一向に構わなかったが。

「じゃあ……明日にでも一緒に、君のお祖父様の所に行こう」

「ええ？」

「僕としては、ために付き合っただけだと思っただけで、そう申し上げて来た方が、その、何かと安心なさるんじゃないかな。何か不測の事態に至っても責任は取るし……って、あああ……何言ってるんだ！」

ロバートは頭をかきむしった。マギーはその様子をあっけにとられて眺めていた。

## 困惑・2

ロバートは瞬間、自分の脳裏に浮かんだ映像の破廉恥さ加減に狼狽したのだった。自分の先祖であった騎士は王に寵愛された美貌の持ち主ではあったが、粗暴で傲慢でほとんど文盲のならず者で、気に入った女を見るとこの誰だろうと略奪して犯して子を産ませた……そんな父に聞いた昔話の所為だろうか。

「ハハハ、ごめん……ともかく、明日、どうだろう？　僕にチャンスをくれない？」

ロバートの顔を目をまん丸くして凝視しているマギーに、本当の事を知られるわけにはいかない。だが、ああした妄想が湧くということは、とりもなおさず自分が普段思っている以上に強い感情が育ちつつあるのかも知れないと改めて自覚したのも事実だ。

「何時になさいます？」

「君に合わせるよ。君の休みって、昼食の後、夕食の準備までの二、三時間ってところなんだろうか？」

その翌朝の朝食は遅めだった。寝疲れずに寝酒を少々飲んだ所為だ。煩雑な領地経営の様々な事柄を本当は放りだしたいが、そうもいかない訳で、悩みの種になっている。

マッシュルーム入りのオムレツに玉ねぎと人参・ひよこ豆とケイパー、オリーブなどの入ったサラダが出てきた。トーストはカリッと焼き、コーヒーは香りのよいものをブラックで飲みたいのだ。最近はいンド産の茶葉が入って人気があるが、朝はコーヒーでないとどうも調子が出ない気がする。習慣と言うのも有るが、大陸に旅を

したときはコーヒーになれていた方が都合が良いと言うのも有る。

「いつか食べたトーストにハムとポーチドエッグを乗せてオランダーズソースを掛けたのも美味かったが、このオムレツとサラダも素晴らしくうまいな。このドレッシングが何だろう」

ラドストックが興味深い事を言った。

「東洋産の豆から作った非常に塩辛い調味料を、隠し味に使う……と言う話はなさっていましたよ。Soyaです。そうそう。醸造の加減でワイン同様様々な等級と品種のものがあるそうです。良いものが手に入ったから野菜や肉の風味づけに使うと伺いましたが……」  
「なるほどな。ライムのしぼり汁とオリブオイルをヴィネグレットソースのようにしてあわせたんだったけど、うーん、もしかしてナガサキで出荷されたオランダ経由のものかな。中国のものより美味いって話は聞いた記憶が有る」

マギーの弟は香港で仕事をしているらしいから、東洋の調味料についても彼女が普通より詳しいのは自然な事なのかもしれない。

「本日のご予定は、あの方と御一緒にアフトン公爵のお邸に伺うということ、宜しいのでしょうか？」

ドレス姿のマギーに遭遇した話をして以降、ラドストックはマギーの事を話す場合は丁寧な言葉を使うように心がけているようだ。はつきり名を言わず「あの方」ということが多い。この邸における身分の序列も不鮮明だからと言う配慮なのだろう。

「それにしても、今朝は遅いお目ざめでしたな。お加減はよろしいので？」

「色々考えたら、寝付きが悪くてね」

「あの方の事で？」

「それも有るが、領地経営の事で、色々頭が痛い。爵位なんて抜きにして、純粹に自前の資産だけで生活した方が気楽だけだな」

「歴史有る公爵家でも破産なさいますからなあ……ですが御当家は成り上がり貴族とは事情も違いますから、爵位の返上だの辞退だの、出来るとも思えません」

「僕が爵位の継承を拒否して、新大陸に逃げ出してアメリカ合衆国の国民にでもなってしまうえば、それでoshiまいかもしれんよ」

「ほ、本気でお考えで？」

「不可能じゃないだろう。でもまあ、言わば夜逃げだしな。商売にまで色々差し障りが出そうだ。まあ、僕の代ではしないよ。だからラドストックも心配するな」

貴族の所領は土地を所有するだけではない。土地の資産と同時に住民も管理する立場なのだ。従って地域の道路や河川の管理・補修も教会や学校の運営も領主の責任の範囲だ。

概ね大貴族の場合、当主の下に総差配人を置く。この総差配人は法律や会計業務の専門家でなければ務まらない。最近はその称号ぐらいは賜っているロンドンの弁護士が総差配人である場合が多い。やり手で評判の弁護士の場合、幾人かの貴族の総差配人を兼ねている場合も珍しくない。その総差配人の管理下に各領地の在地の差配人がいて、現地の農民から小作料を取りたてたり、土地の物産を集荷し売買したりする業務を行っている。在地の差配人はロンドンの総差配人とは手紙をやり取りして、その指示を仰ぐ。だがロンドンしか知らない総差配人の命令は地域の実情を無視したものであったり、不適切であったりする場合も多い。

小麦の不作、ジャガイモの不作、河川の氾濫と言った事でどの程度地域の住民が困窮しているか否か、差配人達が見落とした事柄について、純粹に宗教的な……とばかりも言えないが、概ね公正な立場で「領主の良識」「キリスト教徒としての良心」に基づき、何らか

の救援策の必要性を申し出てくるのは教区の牧師だ。

特定の弁護士事務所に総差配を依頼している場合、その業務も後継者が受け継ぐ場合が多い。だが、幾人かの教区牧師と在地差配人からの手紙を見る限り、代替わりしたまだ若い弁護士である今度の総差配人は、どうもよろしくない様なのだ。地域の困窮を理解せず、例年通りの徴税を押しつけるらしい。中には地方の小作人がどれほど苦勞しているか、ロバート自身の目で確かめてくれないだろうかと言った内容の手紙も有った。皆、もう既にロバートを実質的な当主と見なしているのだった。

領地は金銭を生み出す魔法のポケットでは無い。人間が住む古くからの共同体でも有るのだ。それを管理運営する責任の重さを理解できない令嬢と結婚する気は、ロバートには毛頭無い。

教区の牧師と在地の差配人が言ってきた金額は一千ポンド程度であつたので、とりあえずはロバート自身が経営する会社の利益で生じた資金から、困窮者が多い地域に援助資金として早急に送ることにした。牧師も差配人も共に正直の上に馬鹿がつくような老人だから、それなりに計らってくれるだろう。

午後になって、マギーと共にアフトン公爵家に向った。一番乗り心地の良い二頭立ての箱馬車にしたのは、いつもそうだからだが、四頭立て馬車も所有していない訳でもないので、少し迷ったことは迷った。今日は旧知の仲の公爵に会いに行くのであり、孫娘と一緒になのだ。あまり仰々しいとかえって野暮ったくあか抜けない気がする。だから繋ぐ二頭の馬はロンドンでもめったにいない程の良い馬にしている。見る者が見れば、そのぐらいはわかるだろうし、それが分からない様な人間とはさほど深く付き合うつもりもないのだ。

「さあ、どうぞ、お乗りください」



ロバートはマギーをレディとして扱った。絹の手袋をはめた手の甲に恭しくキスすると、それに堂々と応じるマギーはやはり自分の身分にふさわしい令嬢だと感じる。だが、彼女はどうかやら世間では到底認められない様な奇妙な情熱を社会的な活動に対して持っているようだ。昨夜少しだけだが、ロバート・オウエンの活動についての彼女の意見を聞き、貧困層に対する医療奉仕活動が続ける彼女の友人について語りあった。

そうした活動に関して、熱意を込めて語る彼女の顔は眼鏡をかけてたままでも、十二分に美しかったが、今日は飾りは控えめではあるが身分にふさわしいブルーのドレスを着て愛らしいボンネットを被っている。まさに堂々とした貴婦人だ。ピンとした姿勢のよい背中も、程よい肉付きの肩も病的に細すぎない腰も、ロバートにはすべて好ましく見える。だが、マギーは頑固そうだ。そこが魅力でもあるが。

マギーの目指すものは間違っていないのかも知れないが自分の妻となる人がスラムに入り込んで活動するのは……控えてほしい。ついそう思ってしまうのだが、それを口にするにはロバートは教養が有りすぎた。先進的な思想に理解が有りすぎた。だが、やはり本音では嫌なのだ。

アフトン公爵邸の車寄せで馬車を降りて、ロバートはマギーと連れだって公爵が待つ客間に入った。普段なら書斎で気軽な世間話をするのだが、今日は様子が違う。マギーと一緒に伺うとは、事前に申し入れてあるわけだが、その意味合いについては何も無論言っていない。公爵は明るい温室に面した部屋にいた。冬の寒さが嘘のよくな暖かさで、沢山の花々が咲いている。

「やあ、ようこそ。堅苦しい挨拶は抜きにして、一緒に中国から届いた極上のお茶を楽しんではどうかと思っただね。二人ばかり君に紹

介したい人がいるんだ」

「えっと、公爵、僕は……」

「君もマギーも大人だし、二人とも良識は十分有るだろうから、節度を持って交流をしてくれる分には、一向に構わないと私は考える。君たちそれぞれの人生は、それぞれの物で、私がどう言うべき物じゃないと考えている。この今現在のこの国では……少数派の考え方だろうが」

「でしたらお祖父さまは」

「マギーは法律に適う範囲でだが、誰と結婚しても、あるいは全くしなくても、完全にマギーの自由にしたら良いと思うよ。マギーはやりたい事も有ってすぐに結婚というわけにも行かないだろうが、ロバート君はすぐにも花嫁が必要だ。な、そうだろうか？」

「はあ……ですが……」

「幾人か君にふさわしい令嬢の心当たりも有るが、今日は私の末娘が、久しぶりに邸に戻ったのでね。社交界に出たい希望が有るようだから、君にも紹介しておこう。入っておいで」

公爵の声に応じて、一人の女、いや、ほっそりした十五歳程度かに見える少女が入って来た。まだ未成熟で未完成だが……華やかなブロンドの髪と董を思わせる様な紫色の瞳は、妖精のような雰囲気醸し出している。将来は大した美人になりそうだ。

「レディ・エセル・ウィルモアだ。孫より年下だが、確かに私の娘だ。母親は君も知っているシルビアだよ」

紹介されたエセルは完璧な恭しい態度で礼をしたので、ロバートも礼を返した。

「シルビア・スワン夫人とは……」

「その、ハリエットが居た頃には互いにこうなるなんて思っていな

かったが……子供らも大きくなって寂しかったのと、ハリエットとの離婚が法律的にちゃんと成立したのでね。バーバラに言われて秘密ではあるが結婚したのだ。子供らに譲るべき財産はちゃんと譲るように法律的な厄介ごとは片付けてあるし、皆もう大人だから、そんなに認めてくれたよ。まあ、息子らは皆バーバラには逆らえんだがな。シルビアはああ言うつつましい性格だし、社交界での付き合いもしてこなかったからね。でも、この子は違うようなんだ。な？」

「何だか、そんな事をおっしゃると……私が軽薄な馬鹿みたいだわ。でも、学校の同級生の子たちが皆、デビューするって言うから、私もって……思っただけですの」

聞けばエセルは母親の考えで、国内のとある女子寄宿学校に入っていたらしい。ロバートはその学校の名前を聞いて、エセルの受けた教育の内容の察しがついた。貴族や裕福な地主、医師、弁護士、将校などの令嬢たちの教養を高め、ダンスやマナー、楽器の演奏などの一通りと、多少の外国語やギリシャ語やラテン語を教えて、上流社会にふさわしい女性に仕上げようと言う所だろう。腐ってもロバート・オウエンの話などしように無いし、婦人参政権運動も危険な思想活動だと考える人種しかない学校のはずだ。

「この子が嫁入りするときは、しかるべき持参金と多少の領地ぐらいつけるつもりだ。誰か良い婿さんはおらんかな？ 何なら君でも、私は一向に構わんが」

公爵は悪戯っぽい視線でロバートを見て、笑っている。エセルは公爵に促されてピアノを弾きはじめた。モーツアルトの曲だろうか、軽やかで華やかな曲だが……。済ました表情で紅茶を飲むマギーと笑みを浮かべた公爵の間で、ロバートの背中には冷や汗が滲んでいる。

その時、従僕が客の来訪を告げたのだった。

## 困惑・2（後書き）

脱字部分、補いました！

### 困惑・3

「サー・ベンジャミン・グレイストーンと御子息ミスター・ジェフエリー・グレイストーンがおいでになりました」

そう従僕が言うと、現れたのは白髪の小柄な見るからに好々爺と言う感じの人物と、三十手前という感じの青年だ。王室顧問弁護士であり有能な事務弁護士でもあり、幾つもの貴族の領地の管理経営の仕事を請け負っているサー・ベンジャミンはロバートもこれまで一応面識が有ったが、ロバートの父方の伯父である先代のキーネス侯爵と深刻に揉めたことが有り、少々ばつが悪い部分も有って、親しく話した事は無い。昔のトラブルは明らかに先代キーネス侯爵に非が有るとロバートは思っているが……問題は息子の方だ。救貧法改正委員会か何かの活動を熱心にやっている弁護士で、ロバートよりは頭半分ほど背が低そうだが、役者かなんかでも食っていけそうな甘い美貌のくせに、人に向ける視線は厳しく、髪は燃える様に赤い。

「おやおや、親父さんまで来たのか。なんだい、例の飢饉に対する施策で話が有るのかな？」

公爵が呼んだのは、赤毛の息子だけのつもりだったらしい。

「艶消しの干からびた爺はお呼びでは無いと存じましたが、私としてはお察しの件では是非新たにセルビー伯爵となられた方をお願いしたい事がございまして、御無礼を顧みず参上いたしました次第です」  
「私はその件で先ほど自分の領地の差配人あてに、救援資金を送る手配をしました」

ロバートはホツとした。サー・ベンジャミンの醸し出す穏やかな雰囲気のせいかもしれない。

「それはそれは……ちようど良い折だったのかもしれませんが……実は」

サー・ベンジャミンは現在管理を請け負っているアフトン公爵家と、離縁したレディ・ハリエットの産んだトマスが継承したリズモア侯爵家の所領、それにロバートが将来継承するキーネス侯爵領が接する一帯で深刻な小麦の不作が続いているのは、土壤に大きな問題が有るのが判明したと言う話だった。サー・ベンジャミンの指揮のもとで土壤改良事業を行う予定なのだという。

「サー・ベンジャミンは土地測量や土木・建築の専門家だけでなく、農業や植物学、微生物学と言った方面の専門家を雇用している。この人に任せておけば、そうひどい事にはならんと思っているよ」

「若いころは確かに色々行き届きませんでしたなあ。伯爵の亡き伯父上との事も、言葉を使う弁護士と言う仕事について居ながら、本当には言葉の重みが分かっていなかった所為です。何ともお恥ずかしい次第で。ですが、こうして次代のキーネス侯爵となられる方とお話で来て、実に有り難い事です。つきましてはその……土地改良事業のために……」

様々な資材や人員をアフトン公爵領とリズモア侯爵領の間で行き来させるには、どうしてもキーネス侯爵領を通過する必要があるらしい。無論ロバートはその件については即座に許可を出した。

「差し出がましいようですが……この事業に御一緒に参加なさいませんか？」

サー・ベンジャミンの言葉は物柔らかなのに、独特な迫力が有り、こんなに身近にいて誘いをかけられたら、とてもじゃないが逆らえないと思わせる所が有るのだった。

「確かに僕が個別にどこかに土地改良を依頼するより、万事割安でしょうね」

「そうそう、そうです。さすが伯爵は実業家でいらっしやるだけに、御理解が早くて、助かります」

「改良事業の資金負担は、いかほどになりますか？」

「御料地分の測量図を作成するのにかかった実費と労働者たちの御領内での作業の日当分だけ御負担下されば、十分です。御参加頂いても、頂けなくても、測量技師やら農業の専門家やら基本的な資材やらは、どの道用意しなくてはならなかったのですから」

提示された金額の凡そはロバートの予想よりはるかに割安だと思われた。正式な契約書の取り交わしの手配も、サー・ベンジャミンに任せる事にした。

「伯爵、やはりお目にかかって良かったです。これから何かとお世話になるかもしれませんが、何卒よろしくお願い致します」

サー・ベンジャミンはニコニコ穏やかな笑みを浮かべてそうロバートに言くと、公爵にも挨拶をして部屋を退出した。

「この年になって仕事に追われるというのも、痛しかゆしですな」

どうやら弁護士事務所は大繁盛と言う所なのだろう。ロバートは今の総差配人を辞めさせて、サー・ベンジャミンに依頼したいと思った。



「お茶が冷めますわ」

少々尖った感じの声に気が付くと、ピアノは止んでいて、金髪の美少女は御機嫌ななめだった。父親である公爵は「もう一度淹れ直して貰うか」と言うだけだ。マギーは赤毛の青年と熱心に衛生問題と微生物に関して語り合っており、ちよつとロバートは割りこめない雰囲気だった。どうやら共通の友人だか知人だが、大陸の方に居るらしい。何やらおかしい具合になってきたとロバートは、ため息をつきたい気分になってきた。だが、目の前の美少女が不機嫌なものも無視はできない。

「モーツァルト、素敵でしたよ」

「あら、でも、お話に身を入れてらしたから、お耳を素通りでしたでしょう？」

「サー・ベンジャミンとのお話が和やかに出来たのは、軽やかなピアノのおかげかもしれません。立派な方だということは十分存じ上げていたんですが、先代キーネス侯爵との間にちよつとした行き違いが有ったようで、僕としては御挨拶だけでお話ししたくてもしにくいて所が有ったのですよ。助かりました」

「まあ、お上手ね」

「いえ、本当ですよ」

公爵はフフツツと声を出して笑った。見え透いていただろうか。それでも美少女の機嫌が上向いたのは確かだった。

「伯爵様は優しい方ですね」

「誰だってあなたのような可愛い方には、優しくしますよ」

「まあ、ありがとうございます」

するとそこへ、赤毛の青年の「それは本当ですか！」という半ば

叫ぶような声が響いた。

「ええ。确实ですわ。テムズ河の水質汚濁は酷くなっていますから、あの状態のまま給水するなんて、危険極まりないと思います。あの不衛生な水から伝染する病気が発生する可能性は高いのではないかしら」

「それにしたって、顕微鏡で御覧になったら、そんなに色々な生き物がいたのですか？」

「ええ。明らかに体に有害と思われるものが多いです。でも、ああした顕微鏡でも見えない金属や薬物の混じった工場なんかの排水の方が、もっと危険だと言う方もおいでのようです」

二人の話は、ますます盛り上がり、声が自然と大きくなってきた。ロンドンでたびたびコレラが流行るのは不衛生な水道水も大きな原因ではないかとか、テムズ河に流れ込む污水处理は如何にあるべきかとか、人に有害な様々な微生物とか、コレラはどの様に感染するかとか……

「おいおい、二人とも、話題に夢中なのは構わないが、美味しいお茶を飲むにはいささか不適切な話題だと思わんかね？」

そう苦笑する公爵に言われて、やっとお茶の時間にふさわしいとは言えない話題であったことに二人とも気付いたようだった。二人とも取ってつけたように、中国産の茶葉の話が始めた。確かに非常に素晴らしい茶であるのは間違いなかった。ロバートの見たところでは、マギーはお茶の美味しさを真面目に味わっているようだったが、赤毛の弁護士君の方は、お茶の事はほとんど何も考えていそうも無かった。

「なるほど……ミス・マーガレットは御自宅でイエナの工房製の顕

微鏡を使っておいでなんです」

ドイツのイエナ大学の教授たちが鼯鼠にしていると云う優れた工房の噂は、ロバートも承知している。赤毛の青年は将来有望な法律家のようなだが、顕微鏡やら微生物やらも気になるらしい。

「ええ。色々気になる物を覗きますの」

「その、宜しければ、そのうちその顕微鏡で御覧になっている物を僕にも見せて下さいませんか？」

「夕方四時までしか時間が取れませんが、今からおいでになりますか？」

「よろしいんですか？」

「ええ、短い時間で申し訳ありませんが、どうぞ」

「ありがとうございます！ いやあ、女性で僕と興味の対象がしっかり一致する方がおいでになるなんて、思っても見なかったもんですから」

「テムズ河流域での活動についてのお話も、もっと伺いたいです」

「はい、喜んで」

「おいおい、マギー、帰りはどうするの？」

公爵はあきれた声を出したが、顔つきを見れば明らかに面白がっている。

「あー、私の足でも十五分ほどですから、歩きましょうか？」

貴婦人として相応しいとか体裁が良いとかは、マギーにとってはどうでも良いらしいと以前から感じていたが、ここまでこだわらないと、いっそ清々しいとロバートは思った。

「マギー、ロバート君が困っているだろうが」

「僕も歩きますよ」

ロバートの言葉に、目の前の美少女が明らかに不機嫌な顔つきになった。確かに貴族的ではないだろう。

「あ、あのう……セルビー伯爵はミス・マーガレットとどういった御関係で？」

「私を雇って下さっている雇用主でいらっしゃいます。御主人様ですわ」

赤毛の弁護士君はマギーの言った言葉が理解できなかったようだった。

「僕の母が寝込んでいるんだが、滋養に富む美味しい食事を作ってもらうんで、特に彼女にお願いしているんだよ」

「なるほど。自然科学的と言いますか、医学・看護学と言った観点から見た病人食という事でしょうか？」

「まあ、そんなところだ」

「では、時間も無い事ですから、参りましょうか」

マギーは席を立った。すると、公爵がこう言ったのだ。

「これ、待ちなさい。うちの四頭立ての馬車を出すよ。ロバート君の馬車は空で返せば良い。マギーの家からは二頭立ての馬車で時間に間に合うようにロバート君と一緒にお邸に戻りなさい。ジェフリー君はその後、お宅まで送れば良からう。御者にも言っておくよ」

「私も行きます。ね、ダメかしら、マギー？ 私も顕微鏡って見た事が無いの」

「良いわよ。じゃあ、四人一緒に馬車で、って事ですよね、お祖父様」

「ああ。それで良い。エセルはマギーの言う事を聞いて、お利口にするんだよ」

「いやだわ、お父様、私もう、十六ですのに……」

公爵家の四頭立ての馬車は、見事な物で、内部の椅子のクッションも申し分ない。馬車をひく四頭の馬も見事な美しい黒馬で、四頭は姉妹なのだそうだ。

「マギーの家に今、住みこんでいる馬丁はボブという老人だが、大した名人だね。四頭を仔馬の段階から育て上げここまで仕込んだのだよ。四頭ともボブが大好きなんだ」

公爵は孫と娘、ロバートと赤毛の弁護士を機嫌よく見送った。だが、ロバートは釈然としない。公爵が自分を身内に加えて良いと考えてくれているのはわかったが、孫と娘と、どちらの夫になるべきだと考えているのか、どうもやはりわからない。

馬車の中では赤毛の青年とエセルが隣同士にすわった。ロバートがマギーの隣に張り付いて座ったせいかもしれないが……

「まあ、そうなんですの？」

「ええ、僕の父の事務所のすぐそばなんですよ」

どうやらモーツァルト一家がロンドン滞在中に過ごした市内の繁華街の建物の話をしているらしい。

上流の紳士らしい態度になった赤毛の弁護士の眼差しからは、最初に感じた刺すような鋭い光はもはや見られなかった。だがこの青年は敵に回すと厄介そうだとロバートは思う。自分とこれからどう関わる事になるのか、つい色々の可能性を考えてしまい、胸の内は複雑だった。

## 困惑・4

「うわああ、何、このモジャツとしたものは？　こんなものが水の中にいるの？」

美少女は顕微鏡をのぞき込んで、ほとんど悲鳴に近い声を上げている。

ロバートも声こそ上げなかったが、水道の水にこんな生き物たちがいて、驚いた。確かに何の処理もしないでテムズ河の水を上水道で配水するのは、問題が多いだろう。この辺り一帯の邸宅は敷地内に井戸が有る場合も多く、ロバートの住むレイストン・ハウスもアフトン公爵のロンドンの住いであるセイフライド・ハウスも良質の井戸水を飲食や洗濯・入浴に使っている。

マギーの邸は小ぶりだが、大きな窓が幾つも有り、部屋は明るい。この国では窓税を負担できない貧困層は暗く風通しの悪い家に住んでいる事を考えれば、なかなか贅沢だと言える。壁も床も白が基調で清潔で簡素な感じだ。顕微鏡が置かれている部屋は書籍類が壁に作りつけた棚を埋め尽くし、博物学者の研究室と言った感じが、絵もロココ風の置物なども全く無い。それでも風変わりな貝殻やら標本やらに交じって、色鮮やかな中国や日本の陶磁器が置かれていたり、机の上に薔薇が一輪だけ生けられていたりするのを見ると、やはり部屋の主は女性なのだと感じる。

それにしても、マギーの気持ちはロバートには読み取れない。エセルにも赤毛の弁護士にも終始平静な穏やかな態度でいる。教師に質問する女学生そのもののエセルの言葉には明快にテキパキ答え、貴重なドイツ語の文献を赤毛の弁護士にはあっさり貸してやっている。そのくせロバートが庭に出ても、放っている。これが通常の令

嬢ならどうだろう？ 相手の家の格やら資産やら収入やらで、態度も言葉も変える。従ってこの場合、一番身分が高く、一番資産があり、一番年かさの自分ほもっと鄭重に特別に扱って貰ってしかるべきでは無いだろうか？ 一応自分は彼女の「主人」なのだし……と、そこまで考えて自分がこんなにもせせこましいケチ臭い卑しい考えをする男だったかと気が付き、情けなくなり、愕然とした。

冬の庭には花らしい花は無いが、小さな温室が有って、中には多少の花を育てているようだ。いま時分のロンドンでは午後四時になれば日は落ちていて、温室の中身もうはつきり分らない。次第に冷え込みも厳しくなってきた。

「その温室に、ちょっと使えそうなハーブが幾つかありますの。御覧になりますか？」

美少女と弁護士は日没前にこの小さな邸を出たようだ。

メガネこそ掛けていないが、マギーはいつもの料理人の格好に逆戻りしている。ガス灯越しに見ると舞踏会の後のシンデレラといった風情で、何を着てもマギーは綺麗だと改めて思ったが、やはり美しいしゃれたドレス姿でいてくれた方が嬉しいと感じてしまう。だが、それを口にするるとマギーは不機嫌になるだろう。それはロバートにははつきり分かっていた。口にしない方が良い事は黙っている程度には、彼は十分に大人なのだ。

「君の大事なハーブなの？」

「ええ。料理を特別な味わいに仕上げる隠し味ですわ。これだけ摘んだら、すぐお邸に戻りましょう」

手にランプを下げたマギーと一緒に、ちょうど箱馬車ほどの大きな温室に入った。中は春のような温かさだ。どういった仕組みな

のかわからないが、これなら年中新鮮なハーブが手に入るだろう。暗く暖かく狭い空間に二人きりでいると、ロバートは奇妙な親密感に包まれたと感じた。本当は甘い髪の香りを存分に吸い込んで思い切り抱きしめたかったが、作業を中断させるとマギーは怒るだろう。それにそうした行為を彼女はロバートに許すと言う意思表示はしていないのだ。手を延ばせばすぐに抱きしめられるのに……

マギーは手に提げた籠に幾つかのハーブを折り取っていたが「これで最後です」と言った直後に、痛っ！と声を上げた。

「棘でも刺さった？」

「この葉の縁でちよっと切っただけです」

「大丈夫かい？」

気が付くとロバートはマギーの手を取り、傷ついた指を口に含んでいた。なぜそんな事をしたのか、ロバートにはどうもうまい理性的な説明など出来ないが「そうしなかった」のだ。

「ロ、ロバート」

うわずった声に甘いものが含まれている。ロバートは名を呼ばれた事を喜んだ。これ幸いと自分のしたい事をする事にした。マギーの髪や額や目蓋にキスを落とすと、形の整った唇が少し開き、甘い吐息が漏れた。ロバートは頭を下げて自分の唇をマギーの唇に合わせ、感覚は鋭敏であるようなのにどこか不慣れな彼女を燃え上らせるように、臆病な舌と自分の舌を絡ませた。自分の雄としての力にマギーの本能が応じ始めたと思われたところで、ロバートは唇を放した。背中に回していた手を解くと、マギーが足元に置いていた手つきの籠をロバートは腕から下げランプを持つと、空いた方の手でマギーの手を握った。



「さあ、行こうか。すっかり暗くなってしまった」

門前に待たせていたマギーの邸の二頭だて馬車に、急いで二人は乗った。馬車に乗ってもロバートは握った手を放そうとはしなかった。

「あの、ロバート……」

「邸に着いたら、いつも通りにする……僕が嫌いなら、止めるけど」  
「まあ、そんな」

「なら、構わないね。ほんの短い時間だから」

強引さと積極性・熱意は紙一重だ。男が同じ行動を取っても相手の女がどう受け止めるかで、事の成り行きは違ってくる。考えてもわからない場合は、自分の勘に頼るしか無いと思い定めているロバートには、迷いは無い。当然ながら「嫌いではない」と「愛している」の間には大きな違いが有る。だが男女の仲は、きっかけ一つで大きく先にも進むし、一挙に破綻もする。幾つかの苦い体験を踏まえて、ロバートは自分なりの経験則を持っていた。だが、それが果たして結婚を大して望んでいないマギーのような女にどの程度当てはまるのかについては、あまり自信は無かった。

アフトン公爵がマギーに与えた箱馬車は、以前から幾度かロバートが塀越しに見ていたもので、ロバートが普段使う物に負けず劣らず静かに走り、座席のクッションも申し分なかった。

「ねえ。この馬車に以前誰かと一緒に乗って、レイストン・ハウスに戻って来た事があっただろう。僕はこっそり自分の部屋から様子を見ていたんだよ。あれは明らかに男だったし、君のお祖父様じゃないのは確かだ」

「気になりますの?」

「うん。とても。僕は焼き餅焼きらしいんだ。今まで自覚は無かったが」

マギーは軽く声を立てて笑った。

「弟ですわ」

「弁護士になった方？」

「香港総督のもとで務めている弟が、今年は二年ぶりに休暇を貰って帰国していて、弁護士の弟の住いに寝泊まりしていますの。中国人の従僕を連れて帰って来ていまして、その従僕に中国風の料理について教えて貰いました。その時の事では無いでしょうか？」

何でもその中国人の青年は本来は他人に使われるような身分の間ではないのだが、何か深刻な家庭の事情が有って、香港まで流れて来たらしい。中国語がわかるマギーの弟が「綺麗な北京式の発音」をするその青年を引き取り、ほとぼりの冷めるまで従僕とする事になったらしい。

「彼は小柄ですけど挙措動作が優雅で、なかなか英語も上手ですし、ハンサムですの。贅沢な中国式の料理について色々な事を知ってますのよ」

「好きなタイプなの？」

「故郷に妻子がいるようですわ。奥様は実家に身を寄せているんですって」

「残念だったね……いや、かえって危ないな」

「まあ、ロバートったら……」

ロバートが抱き寄せると、マギーは素直に体を預けた。手でウェストから背中を摩り上げ、胸の膨らみに触れその感触を楽しんだ。マギーは低いうめき声をあげた。ロバートはその暖かく湿った唇の

間に、すかさず舌を差し入れた。数少ないレッスンの間にマギーはそれなりに情熱的に応じる方法を自然に修得したようだった。深いキスを続けながら、料理人に似つかわしい無骨なドレスの立て襟の間からのぞく白い肌に、自分の印をつけたいという欲求をロバートはやつとの思いで押さえつけた。ロバートが自分の舌とマギーの舌を絡め、送り込んだ唾液をマギーが喉を鳴らして飲みこんだ瞬間、馬車は停止した。あの、ロバートの部屋から見下ろせる塀の外に到着したのだ。

「今夜は何を食べさせてくれるの？」

「海老と野菜のテリーヌと栗のクリームスープではじめて、このハーブを隠し味に使ったソースで仕上げる鮭と、中国風に味付けした子羊、後は中国風の野菜料理にプディングですわ」

「楽しみにしているよ。じゃあ、またね」

恭しくマギーの手を取ってキスをした。レディの手にしては荒れていたが、それを口にするのはやめた。彼女は彼女の手を荒れさせた台所での作業の末に生み出されるものに、誇りを持っているようだし、実際素晴らしく美味しいのだから。

自室に戻るとラドストックが、今日の首尾について聞いたそうにしたが、マギーの話はせず、サー・ベンジャミンと良好な雰囲気の話が出来た事だけ話題にした。その後父に「良いベルモットを貰ったから一緒に飲もう」と誘われて、食堂の側の小部屋で今日の出来事について事実のみを？い摘んで話した。

「口の奢ったイタリア男が持ってきた酒なのでな。行けるのではないかと思うのだ」

父は美術愛好家というか、骨董趣味の度が過ぎて、家の財政を大

いに傾けたのでは有ったが、父のすごい所は出来の悪い贋作などを掴まされたりしておらず、買い入れた物はロバートからみれば馬鹿馬鹿しいほど高価ではあったが、そのコレクションは好事家の間では高く評価されるような逸品ぞろいであったのだ。特に十五、六世紀のイタリア絵画の小品の連作が大層な傑作で有ったようで、大陸のコレクターに売った所、その代金で外国の銀行からの借り入れ分が精算できたほどだった。父の言うイタリア男は、美術品コレクターのイタリアの貴族で美味しい食べ物と美味しい酒に目がないと言う人物だ。

「マギーの料理の自慢をすると、ロバートが嫌がりそうだから黙っていたぞ」などとニヤニヤして言うのだ。

「だが、グレイストーンの所と上手い具合に話が出来たのは良かったな。私の亡き兄は……何というか、良くも悪くも貴族的な人だったからなあ。サー・ベンジャミンの言う事の方が理屈は通っているとは絶対認めなかったぞ。百姓の息子の言う事なぞ聞けるか！でおしまいなのさ。これもアフトン公爵にお前が認めて頂いているおかげだな。だが、どうするのだ。確かにお前も良い年だ。公爵のおっしゃるように早く花嫁を決めねばいかん。その、マギーは良くも悪くも『先進的』なようだから……何ならその、金髪の美少女で手を打つと言うのも悪くはないな。それとも何か？　サー・ベンジャミンの息子が狙っているか？　あの息子も腕利きではあるらしいが変人だと言うな……変わった者同士で、マギーとその息子が合うのかな？　昔風に身分とか爵位とか称号とか言う基準で行けば、サー・ベンジャミンの息子はマギーと、お前はその若いレディと一緒にいる方が順当ではあるよな」

父の言うように、サー・ベンジャミンの息子と、同じくサーの称号を賜った人物の娘で有るマギーはぴったり身分的にかみ合う。サー・ベンジャミンの妻は由緒正しいジェントリ（地主階級・郷紳）

の嫡出子であるから、その点でも評価は高いだろう。

父にも言われたが、アフトン公爵は自分とあの赤毛の若手弁護士を共に身内に迎え入れたいのだろう。どちらがマギーの夫になっても、あるいはエセルと結婚しても成り行きに任せるといふ事なのだろう。だが父に言われるまで気が付かなかった点が有った。

「サー・ベンジャミンも私も、愛妻家と言う所は共通している。貴族やら金持ちやらの家は、冷たい家庭が多いからな。そうした家に嫁げば、色々不愉快な目にもあうだろうし、姑とも上手くいかない可能性が高い。アフトン公爵は、恐らくそのあたりも考慮されたに違いないよ」

確かに父は「軽い浮気を二度ほど」したが、概ね母とは円満で、上流社会では珍しい愛妻家として知られていた。「美術品に金を使いきすぎて、女遊びまで回らんかったまでの事だ」などと言うのは、父なりの照れ隠しなのだとロバートは思う。

「レディ・エセルは大した美人になるでしょうが……僕は迷いません」

「ふーん。結婚まで漕ぎ着けるだろうか？ マギーは結婚の必要性を感じておらんのだろう？ 一昔前なら断固実力行使、と言うのも悪くは無かったが……今なら下手すると犯罪者扱いだからなあ」

確かに、そのあたりの兼ね合いは実に難しい問題だ。

「うーん。腹に染みわたる様な良い香りが流れてくるな」

父の言葉に、意識が美味そうな料理の香りに向いた。するとその直後に、従僕が夕食の支度が整ったことを伝えに来たのだった。

「お前がマギーと一緒になれば、私は死ぬまでずっと美味しい食事にありつけそうだな」

食い気につられる訳では無いが……確かにロバートもマギーの料理に心惹かれるのも確かなのだ。

### マギーの事情・3

「マギー、おはよう。自分の邸に何か必要なものを取りに戻ったの？」

セルビー伯爵ロバート・ボードナムが、その身分や社会的な地位からすると不釣り合いなほどに、至って気さくな人柄なのは承知していたが、まだ朝の九時にもならない内にマギーの邸の前で声をかけて来るなんて、マギーは思いも寄らなかった。見れば供もいないし、馬車も馬も無い。マギー同様、キーネス侯爵家の邸宅レイストン・ハウスの庭を突っ切り、小さな門から、道の向い側になるマギーのこの小ぶりな邸の前に出たらしい。昨夜、確かにマギーは「いつでもお氣が向いた時に私の家に御訪問下さい」とは言ったが……

「おはようございます。ええ。料理の隠し味用のハーブをあの小さな温室に取りに来ました。レイストン・ハウスの大きな温室には珍しい果物や花が有りますが、ハーブは殆ど無いのです」

「なるほどね。このルートは悪くないと思うんだが、いつからここを歩くようになったの？」

レイストン・ハウスとマギーの自宅との位置関係から、正門から出て道路伝いに馬車を使うより実は早いという事にロバートも氣が付いたようだ。そしてその方が人目につかず、好都合だとも……

「私が氣が付いたのはクリスマスの後ですから、まだそう何日もは経っていませんわ」

道筋は建物の影になっていたりする場所が多いので、マギーも氣付くのに時間がかかった。

「用事はすぐ済むの？」

「ええ。戻ったらやり残しの仕事を片付けますから。お入りになります？」

誰かに見つかると外聞が宜しくない。自分だけの事なら気にならないのだが、ロバートのような名門貴族の跡取りが道端で立って、朝から女と立ち話なんて……やはりまずいだろう。

「自分の邸側の庭の小さな門で待っているよ。チョツと話したい事が有るし」

マギーの「花婿候補に立候補した」というクリスマスの折の発言を撤回するつもりは無い……そう昨夜も聞かされてはいるが、マギーはまだ、返事が出来ないでいる。

昨日ロバートとマギーは一緒にマギーの祖父であるアフトン公爵に会いに行ったが、祖父はいつもの飄々とした調子で「誰と結婚しても、あるいは全くしなくても、完全にマギーの自由にしたら良いと思うよ」と言い、マギーにとっては年下の叔母にあたる十六歳になったエセルと、青年弁護士ジェフェリー・グレイストーンを引き合わせたのだった。

「マギーはやりたい事も有ってすぐに結婚というわけにも行かないだろうが、ロバート君はすぐにも花嫁が必要だ」と言う祖父の言葉は、全くその通りなのだ。マギーはようやく自分のやりたい事が見つかったのだと感じていたし、その為には結婚しない方が都合は良さそうだった。

ロバートは古い名門貴族の相続人なのだから、妻には若くて美し



くて健康な「レディ」が望ましい。ロバートは既に三十五歳だが、名家の人間らしい典雅な趣と野性的な豪胆さが絶妙に一体化した魅力的な男性だ。身分・家柄や容姿が魅力的なだけではない。祖父が認める優れた実業家でもある。彼を自分の婿にしたい年配の貴婦人は数えきれないほどらしいが、当然と言えば当然だった。

だからマギーとしては、花婿候補は自分には必要ないときっぱりロバートに言えば良いはずなのだが、そうも出来ずにいるのだった。宙ぶらりんはよろしくないとは、思うのだが……

今朝、マギーは何を着ようか迷って、深い紺色で飾りの少ないこのデイドレスを選んだ。自分の顔色に良く映り、仕立ても良い。裾さばきがしやすいし、スカートのボリウムも大げさではないが、ちゃんと流行は取り入れている。着心地に配慮した肌触りの良い綿素材を身頃の裏打ちに使い、時計を入れておくシームポケットもマギーの希望通りだ。レースもブレードも飾りボタンも無いが、目の肥えた人物なら、このドレスが正確な採寸を元に上質の素材を熟練の縫い手が仕上げた物だとわかるだろう。

この新しいドレスを着ようと決めた時に、どこでロバートに出くわすとも限らない、そう思わなかったと言えば、嘘になる。

「あっさりしているけれど、良い色合いで、とても似合うね、そのドレス」

ロバートは新調したこのドレスをすかさず褒めた。

そうしたポイントを外さないのはさすがだと思うが、どの女性の場合でも、褒めるべきポイントをちゃんと褒めるのだろうか。マギーは思った。

昨日、初めてエセルと引きあわされた時、ロバートはちゃんと抜きかりなくエセルのドレスにあしらわれた極上のレースを褒め、十六歳のエセルの瑞々しい美しさに大いに気持ちを動かされたようであ

ったが……

夕暮れの温室と馬車の中での親密な行為と「僕は焼き餅焼きらしいんだ」という言葉は、額面通りに受け取って良いものだろうか？祖父は彼を信頼できる人物だと見なしているのは確かだが……幾つかの過去の華やかな噂も有る。それに何より、自分は「結婚」をしたのかどうか、マギーはわからない。結婚すれば、家にも夫にも縛られるはずで、それはマギーの望むものでは無いと思ってきたからだ。

摘んだハーブを手籠に入れて、キーネス侯爵邸の庭に続く小さな門を再びくぐると、ロバートはすぐにマギーのすぐ隣に近づいて来て、小声で話しはじめた。

「ねえ、君の御祖父様から新年の夜会にお招きいただいたけれど、マギーも出席するよね？」

「……エセルの社交界デビューを控えての、準備みたいなものだと母から聞いていますから、どうしようか考えていました」

「そうした催しは身内も全員揃う物じゃないかとおもうが……君は出席も欠席も自由なの？」

「ええ。エセルには実の母親もいますし、付き添い役を務める私の母もいます。母は交際の広い人で、催し物を盛り上げるのに協力してくれる友人は幾人もいますし、それに出席するエセルの学友たちも幾人かおりますから、私が出る幕は無いですもの。母には『行かない』と言ってしまいました」

マギーは父方の実家のパン工房の気軽で陽気な新年のお茶会に少し顔を出して、その地区で牧師をやっている知人の所で新年の礼拝を受け、皆と讃美歌を歌うのも良いと考えていたのだ。同じ教区の下町らしいウナギのパイが名物の店も一月一日は営業時間は短いというが、日暮れ前までならやっているらしい。テムズの川筋で働く

人々にとっては、休日のごちそうらしいのだ。普段は凄まじいテムズ河の悪臭も、クリスマスの後しばらくは随分マシとも聞いたので、ウナギ料理を食べに行くなら、今どきしかないと思ったのだ。その予定について話をする、ロバートは非常に残念そうな顔をした。

「まだ、変更可能だろう？ 君のイブニングドレス姿が見られると楽しみにしていたのにな。やっぱり行こうよ、一緒に。ウナギは来週、僕が食べに連れて行くよ。ね？ やっぱりマギーは新年会に出席することになりましたって、僕の方からアフトン公爵とレディ・バーバラにお伝えしておこう。それで構わないだろう？」

タイミングよくたたみかけられると、マギーは頷かざるを得なかった。ロバートは去り際に、手を取って、キスをした。

「また、午後ね」

どうやら、午後のマギーの自由時間にこの秘密の近道を使って、マギーの邸にまた顔を出すつもりらしい。マギーは使用人用の入り口の方へ向い、ロバートは正面玄関の方に向ったのだが、角を曲がるときにマギーが自分の姿を見ている事に気が付くと、軽く帽子を持ち上げて、ステッキを振った。全く貴族らしくない振る舞いだが、下品ではないし、陽気で楽しいのは彼の人柄だろう。

「なんだか……私……キスを待っているみたいだわ」

つい先ほどの手の指に残るロバートの唇の感触は不快ではなかった。いや、それは正直な感想では無い。昨日のようなキスを、どこかで望んでいたから、少しがっかりした……その事に思い至って、マギーは自分でも驚いてしまった。

「淫乱になってしまったと、懺悔するべきなのかしら」

だが、そんな罪悪感は、自分の中にはどこにも存在しないのだ。悪い事だとは、どうしても思えない。

マギーは昨日届いた友人の手紙を思い返した。彼女は今、ヨーロッパで看護や医学を学んでいて、いずれはイギリス国内で貧しい人々のために活動したいと言う志を持っている。今は、クリスマスの休暇のために、一時的に帰国していて、手紙は地方の地主である彼女の父親の邸からだった。すぐれた知性と立派な信仰の持ち主だが……異性に対する感覚は、ずいぶんマギーとは違っているかもしれない。

「それなりに由緒も格式も有る家柄の当主である方に求婚されましたが、やはりお断りしようと思います。私が父から受けている五百ポンドほどの年金を目当てになさっているのだと言う、従姉の言葉が本当なのかそうではないのか私にはわかりません。母の言うように女は望まれて嫁ぐ方が幸せなのかもしれません。でも、どちらが正しくても間違っている、家庭の中に留まるのは私の使命に反する、そう信じております。ですから、お断りする以外の選択肢は、私には有り得ません」

この文章を読んだとき、自分が祖父から受けている年金の額が五千ポンドだと打ち明けていなくて、良かったと思った。だが、考えてみれば、料理人の給金は年に五十から七十ポンド程度が相場で、マギーが受けている百ポンドというのはそれでも破格なのだ。

「確かに……五百ポンドの年金でも、ちょっとしたもののかな」

だが、ここには書かれていないが、恐らく求婚した男性があまり魅力的でもハンサムでもないのではなかろうかとマギーは思った。

ロバートのような魅力的な男性だったら、もっと違う反応になったかもしれないも思ったが……それでも、彼女なら結婚を断るのだろうとも思った。

「信仰心のせいかもね」

彼女はある日「神の呼びかけ」を感じ取ったのだと言う。その時、自分の使命を確信したのだそう。かの女は清らかな修道女のような生活環境を好み、食べ物がおいしいかどうかは、あまり重視しなかった。不味いスープよりも美味しいスープの方が病人の体に良い、その程度の関心しかないのだ。自分は毎日茹でただけの野菜や焼いただけの肉、魚という単調な食生活でも気にならないようだった。

「贅沢な御馳走を毎日食べられる人間など、ほんの一握りです」

彼女の文章からすると、マギーのように食事が美味いかまずいかを「気にしすぎる」のは「はしたない」、あるいは「享乐的」と感じてゐるらしい。マギーが彼女の人柄を信頼し敬意を払いながらも、共同生活など到底できないと思ったのは、あの食生活の所為が大きいのだが……それは言わない方が良いのだろう。

彼女もマギーも男女の教育の機会均等や、男女同権と言った思想に共感は覚えているし、何かしたいと言う気持ちは大いに持っている。だが、いわゆる「革命的な活動家」たちの不倫や駆け落ちをものともしない様な感覚にはついていけないのだ。あるいは投石や破壊活動も辞さない運動家とも一緒に行動は出来ない。

求めている物は似通っているが、マギーは手紙を寄越した彼女と同じ道を進む事は難しいと感じていた。何しろ神に語りかけられた経験など無かったし、まずい食事を毎日我慢するのはやはり耐え難

い。そして……

「ロバート……」

自分は午後を、そして彼のキスを待ちわびている。これは「魂の墮落」だろうか？ 「忌むべき肉欲」だろうか？ それとも……

「恐れ入りますホワイト夫人、フォンの仕込みですが、御確認下さい」

呼びに来たキッチンメイドの声で、マギーは我に返ったのだった。

### マギーの事情・3（後書き）

二行目、直しました！  
すみませんでした！

## これまでの登場人物まとめ（前書き）

まだ追加するかもしれません



## これまでの登場人物まとめ

マギー

母方の祖母・マーガレットの名前を受け継いでいる。マギーは通称。キーネス侯爵家で料理人を務める。亡き父は高名な作家だった。母方の祖父はアフトン公爵。自分なりの変革への道筋を模索中。女王と同じ年。

ロバート

セルビー伯爵を名乗るキーネス侯爵の跡取り。キーネス侯爵家を建て直した。実業家でもある。既に三十代半ばを迎えたので、結婚相手を募集中。マギーの花婿に立候補するも、先行き不透明。

ラドストック

ロバートの一番身近に仕えている。手先が器用で真面目で、帳簿類も管理する能力が有る。高級紙「タイムズ」を熱心に読み、同じ邸のメイドと恋愛関係に有るらしい。兄は軍人で海外にいる。

クライブ・ボーダナム

故人。ロバートの兄。この兄の死によってロバートが相続人となった。

マイロン・ボーダナム

キーネス侯爵。ロバートの父。美食家でかつては大変な浪費家だった。美術コレクターで、鑑識眼は相当なものらしい。

オフィーリア・カルバートン・ボーダナム  
キーネス侯爵夫人。愛する長男クライブの死がショックであったためか、完全に痴呆状態。

アフトン公爵オーガスタス・ウィルモア

マギーの祖父。先々代国王の最年長の庶子で母は皇太子時代の愛妾の一人だが、非常に身分が低かった。母が懷妊中に愛妾の座を失い流浪したため、極めて苦勞の多い子供時代を送り、一時は貧窮院に収容されていた。その後、王家の血筋を思わせる容姿に疑念を持った青年貴族に拾われ養育された。若い養父は奴隷解放運動に熱心な政治家でもあり、大学の歴史に名を残す大秀才でもあって、強い影響を受けた。最初の結婚後、新大陸で事業家となり、かなりの財産を形成する。ナポレオン戦争の時期の外交交渉で重要な働きをし、先代国王からアフトン公爵の爵位を授けられた。

レディー・バーバラ・ウィルモア・リード

マギーの母。祖父の最初の妻で、元メイドのマーガレットが産んだ娘。父が公爵になる前の新大陸での暮らしや、母の思い出話、イギリスにおける奴隷解放運動にかかわった人々との人脈から、社会貢献に積極的。新聞や雑誌に貧しい少女たちの待遇改善に関する記事を寄せる事が多い。マーガレットが手助けした家庭料理とマナーに関する著作がベストセラーになっている。

ロンドンで一番とされるドレスメーカーを出店の以前から応援した関係で非常に親しく、馬鹿馬鹿しい費用はかけないが「常に適切な装いをする」夫人として社交界でも尊敬されている。

夫のサー・リードの死後、三人の子供を連れて実家に戻り、幼いトマスの面倒を見た。

トマス

特別な配慮により、リズモア侯爵となり名家である生母ハリエットの実家の所領を受け継ぐが、本人は自分が不倫の子である事を知っており、釈然としないらしい。育ての母と言えるレディー・バーバラを慕い、マギーにも特別な感情を抱いている模様。

レディ・ハリエット

アフトン公爵の二度目の妻。由緒正しい家柄の美女だが、身持ちが悪く、数々の浮名を流してきた。不倫の末生んだトマスを手アフトン公爵家に残し、離婚。

シルビア・スワン夫人

公爵の最初の妻でマギーの祖母であるマーガレットの死後、ずっとアフトン公爵家に仕えてきた。二人目の夫人ハリエットが不倫三昧であった頃、ハリエットに虐待され邸を放り出される目にも会ったが、公爵の子供であるバーバラとヘンリー、フレッドによって、救われる。前夫スワン氏との離婚が成立し、公爵の娘エセルを身籠った時点で、秘密に結婚。表だって公爵夫人と名乗るのを遠慮してきたが、エセルの社交界デビューに合わせて、公爵との結婚を公にする。

## イエス命名の日に・1

結局ロバートは、マギーの最初の計画と夜会への参加の両方をこなす事にした。一月一日にきちんと教会に行くと言うと、ラドストックに意外だと言う顔をされたが、行く先が貧しい者が多く住むテムズ流域の教会だと聞くと、今度は顔をしかめられてしまった。

「あの方の所為ですか？ やはり御身分にふさわしい場所の教会になさるべきではありませんまいか？」

「そう言う考えは、善きキリスト教徒としては、どうかと思うぞ」

ラドストックに下町であまり浮かない恰好を頼むと、これが結構大変であつたらしい。シルクハットではなくて、さりとして下品でもない帽子をどうにか探したようだ。乗馬の際に低い木の枝から頭部を保護するためのものらしく、堅く加工したフェルト製で黒く、被り心地も良い。コートはグレーで飾りも無くボタンが見えない比翼仕立てのさりげないもので、ロバートは大いに気に入った。

ラドストックは本当は襟にビロードを掛けたダブル前のコートの方が、ロバートの顔に良く映ると考えていたようなのだ。だが、あくまで地味にという主の希望に従った結果、そうなったのだった。

「お似合いですが、その……伯爵様と言うよりは、羽振りの良い実業家のように見えなくもないのが、少々気に入りません」

「実際そうなんだから、良いじゃないか」

ロバートが最近はじめたノルウェーから輸入した氷の販売は順調だったし、出資したスコットランドの醸造業も上手い具合に行っている。これで今夜、マギーとの仲が一層進展すれば、言う事無しのはずだった。

「新しき年の始まりは主イエスの歩みがわたしたち人間の歴史に組み込まれた日であり、十字架への道を歩み始められた日です」

そんな言葉で始まる牧師の話に特にロバートは感銘も受けなかったが、港湾労働者とその家族が多く住む地域の教会の温かい雰囲気にはある種の家族的なものが有って「皆で一緒に新しい年をより良いものとしよう」というような感覚が、割合と素直に湧いてくる。それにしても、いつもよりはかなりましとはいえ、テムズからの悪臭はかなりのものだ。だが、風向きによっては案外平気であったりするので、冬の冷たい風も一種の神の恵と言えそうだった。

一月一日は主イエス命名の日にあたる。人として生まれたイエスが割礼を受け命名された日であるとされるが、割礼は今ではユダヤ人やイスラム教徒の習俗であって、キリスト教徒にはなじみがないので、神学上は色々な論争を巻き起こした話題のようだ。それでも、確かに女性が同席する場で割礼の話は不適切という認識が有るようで、ロバートは日曜日の教会で割礼に関する話を聞いた記憶が無い。逆に男ばかりの席や、社交クラブなんかでの神学論争では、かなり話題になるだが。

さして印象には残らないが、ともかくも穏やかな雰囲気の中に礼拝はおわった。教区の住民はこのモサツとした純朴な風貌の牧師に、愛着を抱いているようで、別れの挨拶も気持ちに籠っていると感じられる。

信者たちが挨拶を一人一人終わらせて出て行き、最後に残ったマギーが旧知の仲の牧師との挨拶を終えたらロバートも馬車を回させて、マギーの希望通りウナギのパイの店に寄ろうと考えていた矢先の事だった。

牧師は一人の少年を手招きして呼び寄せると、ロバートに向って声をひそめて驚くべき話を始めた。

「この少年はカナダのオレゴン・カントリーの森の中で生まれ育った子でして、母親はかの地では女傑として知られた人物ですが昨年病死しました。御存知ですよね？ その女性を」

「はあ。ルーズ・メルダという人なら、命の恩人ですが」

「この子はその女性が産んだ……あなたの御子息だという事なのですが……今は父親違いの兄の知人の家に厄介になっております」

実に驚いた。だが、マギーが全く動じないのがロバートには余計にショックだった。何とまあ、少年に向って優しい調子で「大変だったわねえ」などと話しかけているではないか。勝手に二人の話が弾み、マギーは勝手に少年の「お友達」になってしまったようだ。いや、本当にこの少年が自分の息子なら、有り難いと感謝しなくてはいけないのだろうか……

「おふくろさんが一応そう言っていただけで、あんたが本当に俺のおやじさんかどうかなんて、俺には分からないけどさ」

十二歳だと言うその少年が、妙に大人びた表情でそう言ったのもショックで……貧民の救済活動に熱心な教区牧師と、その牧師を尊敬しているらしいマギーの手前「記憶にない」とか「信じられない」などと言えようはずもない。ともかくも今まで引き取って面倒を見てくれていたと言う片目のつぶれた中年男に、礼金として、今の持ち合わせから即座に二十五ポンド支払った。

「そんな金目当てで……」

とは一応言った物の、片目の男の生活は困窮していたようだから、

ほっとしたのだろう。ロバートにペコペコ頭を下げ、少年の頭を撫でると、その場を離れて行ったのだった。これからどうしたものかとロバートは途方に暮れたが、マギーは少年と手を繋ぎ、気が付くと馬車に乗って一緒にテムズ河にほど近い店で、こうして三人一緒にウナギのパイを食べて居ると言う訳だ。

確かにマギーが言っていたように、真冬の休日のテムズ河の悪臭は、いつもよりずっと穏やかだった。おまけに良い具合に風が吹いてくれて、店の中で飲み食いする分には、ほとんど忘れられる程度になっている。それにしても予想外の大番狂わせに、ロバートは頭を抱えたい気分になった。

ロバートと差し向かいでマギーがウナギのパイを貴婦人らしい完璧な作法で食べて居るのは良いとして、隣に黒い髪がボサボサで薄汚れた少年が座っていて、盛大な咀嚼音と嚙り込む音を立てて食べて居るのがどうにも信じられ無い。ましてや緑色の「リカー」と店の主が呼ぶ緑色の酸味のあるソースを撥ねとばし、それが顔についたと言って、マギーが綺麗なハンカチを出して優しく拭ってやるのだ。それもまた、信じられない。

「へー、マギーさんは、学校の先生になる勉強もしたんだ」

「そうね。だから家が左前になって食べていけなくなったら、どこかで教師でもやろうかしら」

アフトン公爵家が左前になる時は、この大英帝国が破産する時だとロバートは思ったが、黙っていた。

「俺のおふくろさんは、女も学問できた方がいいって言ってたし、大学も行けるんなら行った方がいいって言ったんだけどさ、コレットのオヤジさんは違う考えみたいで、フランスに連れて帰ると、ど

つかの女子修道院に入れちゃったらしい」

「バージルのお母様の噂は私も聞いた事が有るけれど、バージルの兄弟は全部で何人なの？」

確かに一種の女傑で腕利きの猟師で大地主だったから、アメリカ合衆国の北半分の間人なら、名前ぐらいは知っていただろうし、アメリカの大学で学んだマギーがその名を知っていても不思議ではない。

「俺も良く知らねえんだ。十人以上はいて、全部親父はバラバラ。それぞれの親父に引き取られて、俺が会った事も無い兄ちゃんや姉ちゃんもいるんだ。俺と一緒に暮らしていたのは兄貴が二人で姉貴が一人。それがコレット姉ちゃんだけど、姉ちゃんとは俺が七歳の時に別れたきりで、会ってないや。幾度か手紙は貰ったけどさ。姉ちゃんのオヤジさんは一応フランスの貴族なんだとさ」

少年はバージル・メルダと言うらしい。しかも先ほど教区の牧師に言われた様に持っていた洗礼証明書が本物で、言っている事に嘘偽りがなければ、ロバートの息子と言う事になる。牧師は少年の言葉が真実だと信じているようだった。

カナダでロバートが毛皮の仕事を手掛け始めた頃、腕利きの猟師でなおかつ大地主でもあるルイーズ・メルダと冬を共に過ごした年が有った。当時既にロバートの親と言っても良い年齢になっていたが、大層大柄で、野山を駆け回るせいか頑健な体つきの女性で、森で迷った末に凍死寸前だったロバートを一人で家に連れ帰り、介抱してくれたようなのだ。ルイーズは既に「一ダース以上の子供」を産んでいたが、全ての子供の父親が違い、一度も結婚した経験が無かった。

ルイーズ自身は先住民の有力者の女性とフランス人のメルダとい



う男との間に生まれた婚外子だが、ルイーズの母の部族では、女は気に入った男の子供を産むもので、嫡子とか庶子とか言う概念自体存在しないらしい。また、そうした行為をふしだらとも思わないらしい。子が生まれたら母親が育て、無理な場合は母親の兄弟なり姉妹なりが引き取るものらしい。

「その年に出合った、一番気に入った男と冬を過ごす」

それが「女傑」とか「熊殺し」とか言われた彼女にとって、当たり前の暮らし方だったようなのだ。

「あんたは綺麗で、賢くて若い。おまけに良い匂いがするね」

そんな事を言っていきなりベッドに潜り込んできた時は驚いたが、ルイーズの体は暖かかったし、匂いも悪くなかった。決して美人では無かったが、暗く寒い冬を温かく快適に過ごすには悪くない相手だった。すぐに男女の仲になったが、当時ルイーズは「もう、そろそろ子供も出来にくい年だから、たぶん無理」だなどと言っていた。だが、子供は出来たし、どうやら生まれた。そう言う事らしいのだ。ロバートは正直な話、ルイーズの事はすっかり忘れていたし、子供が出来たなんて、考えもしなかった。だが、その事をマギーに知られたら軽蔑されそうだと思った。

ルイーズはどう言う訳か、一度もロバートにその後知らせを寄越さなかった。

どうやら後からロバートが「ややこしい家の人間」だと知って、敢えて知らせなかったらしいが、その女傑のルイーズは去年流行病であっけなく亡くなったらしい。生き残ったのは、このバージルと父親の違う兄二人だそう。長兄は妻の実家の雑貨店の仕事をやる事になり、バージルを引き取ると言ったようなのだが……

「二番目の兄ちゃんが、実のオヤジの顔を見て、話ぐらいするべきだって言って、俺もそれもそうだって思ってたさ」

船員になった次兄が、商船の船長を引退したはずの自分の実の父親に話をつけてくれていた筈なのだが、どこでどうなったか、その次兄の父親は破産して行方不明で、カナダで働いていた親戚がロンドン市内にいると言う話を知って転がり込んだのが、今、厄介になっている家らしい。昔、カナダでルーズに世話になったという家の主人は、貧しいながらも面倒を見てくれたようだ。肌身離さず持っていたと言うカナダの国教会の教会で発行された洗礼証明書は、偽物では無いようだった。それにこの十二歳だと言う少年が嘘をついているとも思えない。

それにしても、よくもまあ、性質の悪い人さらいにやられたりもせず、十二歳の山奥で育った少年がここまで無事に来たものだと、その点に関してはロバートも素直に感心した。

「ミスター・ハモンドにはあんたが父ちゃんでも、貴族には色々都合が有って、俺を子供とは認められないかもしれないって言われたし、牧師さんも内緒にしておいた方が身のためかも知れないって言ってただけだな。あんたがこんな所に来るから、牧師さんも考えを変えたみたいでさ」

ミスター・ハモンドと言うのがバージルを寝泊まりさせてくれた人物だ。かつてカナダでハドソン湾会社と北西会社という二つの毛皮交易会社が起こした戦闘に巻きこまれて負傷し、以来片目が見えないらしい。

「でもさ二十五ポンドもお札を出してくれたから、ミスター・ハモンドもお医者さんを頼める。良かった」

そう言つてニツコリ笑う顔は、悪くないとロバートは思った。だが、息子だとはどうも思えない。

「ウナギもなかなか美味しくなるのね。このソース、もっとかける?」

マギーは歳の離れた弟に接する姉のような口調で、バージルと話す。

「うん。もうちょっとかけて。ほんと、美味しいね。噂には聞いてただけどき、今まで食べに来る事が出来なかったんだ。これからは好きな時に食べられるかな」

「いや、そうはいかないな。うちの邸に引き取ることになるだろうから、色々やるべき事が有る」

ロバートは少年に仕込まなければいけないことが、かなりありそうだと見て取った。

「また、私が連れて来てあげるわ。ね。今日はまず、バージルのお洋服を買わないと」

「まず風呂に入らないと、いかんだろう」

何だかロバートの声は尖ってきてしまう。自業自得とはいえ、とんでもない大番狂わせに、つい苛立ってしまうのだ。

「じゃあ、うちに寄って行く? あなたのお父様のお邸は人が多くて色々うるさいから……こざっぱりしてから行きましょう」

「良いの?」

自然と少年はロバートとマギーの顔色を交互に見て、小声になっ

た。しかもロボートの不機嫌な理由も薄々だろうが察してしまったようなのが気に障る。

「ええ。小さな邸だけれど、お風呂だけは最新式なのよ。すぐに入れるわ」

少年は上機嫌の猟師がやるように、ヒューツと口笛を吹いた。ラドストックが見たら、卒倒するだろうか？

夜会が始まるのは午後六時だが、それまでの間、てんやわんやの大騒ぎになりそうだと、ロボットはため息を漏らした。

## イエス命名の日に・2

「汚れは落としたいけれど、石けんが目に入るの嫌だなあ」

「うちにはシャワーも有るから、先にざっと汚れを落としてから、お風呂にお入りなさい。髪の毛用には別に綺麗なお湯を使えば良いわ」

どうやらバージルは屋外の水浴びは好きらしいが、石鹸に関しての良いイメージが無いようだ。新大陸の森の中の清らかな水の流れと腐臭を放つテムズの水はあまりにも違うので、最初は驚き、今はやり切れなさを感じているらしい。だが、こうしてロバートが一旦身元を何にせよ引き受けた形にはなったので、腐臭漂うテムズの岸边からは少しばかり縁が遠くなるはずだ。

馬車を自分の邸の方に向わせるように主張するマギーの言葉に、ロバートは従った。馬車は先にキーネス侯爵邸に返し、バージルを連れたマギーの後にロバートも続いて中に入った。どうやら日の有る間は、いつでも風呂が使える状態になっているらしいが、バージルの汚れっぷりに、邸を仕切っているミリーと中年のメイド達は大わらわだ。バージルを風呂に入れていた間、マギーは何か一筆書いて、ミリーの夫で馬丁兼御者のボブに渡した。実家にちよつと使いにやるらしい。

「いいよ。そんなにして貰わなくても」

「いえね、叔父たちや弟たちの服がまだ多少は残っているはずなの。何か有るんじゃないかしら。あまり華やかなものは無いと思うけれど、見苦しくは無いでしょう。ハーグリーブス夫人が、そちらのお邸の子供服類は儀式用の特別な物以外は、あなたのお母様のお考えで、大半人にあげてしまったって伺った記憶が有るの。確かに子供

服にも流行って有るから、どうせあげるなら流行遅れにならない内  
にって言う御配慮だったみたい」

「子供のころ、やたらデカイレース襟のついた、ぴらぴらした服を  
着せられて、イヤだった記憶が有るよ。おまけに髪を巻髪にするの  
に、コテを当てるからじっとして居ろとか、うるさかった」

「まあ、綺麗な巻髪で、華やかなレース飾りの襟に、色鮮やかなサ  
ツシュベルトって感じ？」

「ああ」

「是非、見てみたかったわ」

「そうか？」

「うちは、男の子の服は動きやすくて、機能的なものが良いつて考  
えて、何というのかしら、子供サイズのラウンジ・スーツか軍の制  
服みたいなばかりで、レース飾りなんて見た事が無いわ。お客様  
がおいでの時やディナーの時にタイを締めた程度よ。髪はすつきり  
短く清潔第一って感じ。叔父や弟たちは、その方が嬉しかったみた  
い。飾りの多い服を着せられる友達を気の毒がっていたわ」

それからマギーはむきになったように子供服の話ばかりをした。  
確かにキーネス侯爵邸には今のバージルのサイズの服は無いのかも  
知れないが、あえてバージルの母親の話を避けているようにもロバ  
ートには感じられた。確かに話にくい事柄だが、尋ねられたら出  
来る限り正直に答えようと思っただけに、肩透かしを食らった  
気分だ。

「お茶を淹れるわ。コーヒーの方が良い？」

「お茶で良いよ」

すると手際良くお茶と二種類のサンドイッチとクッキーが、ワゴ  
ンで運ばれてきた。メイド達は全員風呂にかかりきりのようで、全  
部マギーが給仕してくれた。

「……あの……出しゃばり過ぎたかしら。でも、そもそもあそこの教会に行こうって誘ったのは私だし、あの子は良い子だって感じるし……でも、出しゃばりすぎよね、やっぱり」

「いや、そんな風には思っていないよ。ただ、全然考えた事も無い事態なんで、面喰っている……美味しいな、これ。クリームチーズとスモークサーモンを挟んであるのか。良いなあ」

もう一つはローストビーフにナッツを思わせる独特な味わいの菜っ葉が挟まっているが、これも美味しい。

「この葉っぱは何かな。妙に肉に合って美味しいけど、バジルとも違うし……」

「青果店ではロケットなんて呼ぶようよ。イタリアっではルッコラと言うかしら。そこの温室で育てているのだけど、解毒作用や疲労回復効果が有るみたいよ」

そうこうするうち、ボブが戻ってきた。大型のトランクを二個抱えている。マギーが開けると、子供の服がどっさり出てきた。下着や靴まであって、行き届いたものだ。

「お嬢様がメモに書いておられたサイズ通りの子供服と靴を、出してもらいました。アーっと、下着は私が女房に渡しておきましょう」  
「髪の毛をどうしようかしら。コテを当てて巻き毛にするのは、男の子は嫌いよね」

「あの風呂で格闘なさっている坊ちゃんは、いつその事、紳士方のように襟足をスッキリなさって、今はやりの風に前髪を作られたら……ちようどこちらの旦那様みたいに」

「あー、なるほど、それは良い考えだわ」

マギーの意見に、ロバートは大賛成と言う訳でも無かったが、代案が有るわけでも無かった。消極的賛成と言う程度なのだが、ロバート自身の調髪はほとんど全てラドストックに任せているので、いっそラドストックを呼んでバージルの髪のを任せようという事になった。すぐにロバートが短い手紙を書いて、それを持ったボブがレイストン・ハウスの使用人用通用口からラドストックを呼び出す事になった。

道を挟んで向いの敷地の事でもあり、ボブはロバートがお茶を飲み終らない内にラドストックを連れてきた。その間にバージルは容赦なく風呂で磨き立てられたらしい。とりあえずは下着に部屋着を引っかけている。体のサイズは図ったようで、適合する服を幾つか選んで、女たちがああでもないこうでもないと言っている。が、一応、大人用のラウンジスーツそのままの形の服に決まったようだ。

「この若い方の髪を整えればよろしいのですね」

ラドストックにこの子が自分の息子かも知れないとロバートはまだ知らせてはいないが、こうしてわざわざマギーの家で身なりを整えるのに呼ばれたのだから、特別な事情が有るとは理解しているだろう。伸びすぎた毛はカットし形を整えるのに、さほど時間はかからなかった。街の理髪師の出来る事はラドストックも大半こなす。旅先で理髪師に髪を整えさせることもあったが、ラドストックの行き届いた仕事ぶりには劣るとロバートは思っている。

髪が仕上がった所で、公爵家から持ちこんだ服を着て靴を履くと、見違えるようになった。

「小さな紳士と言う感じよ」

マギーが我が事のように喜んでいる。だが、言葉遣いも食事のマ



ナーも紳士には程遠い。これから仕込む事が大きいにあるうだが、どうすれば良いかロバートも悩んだ。

「今夜から、いきなりお邸の方と言うのは、ちょっと大変じゃないかしら？」

バージルをこの小さな邸でゆつくりさせて、その間に部屋の支度やら老侯爵への根回しやら前もっておく方がバージル本人もレイストン・ハウスの使用人の手前も良いのでは無いかと言うのだ。するとこの邸の家事を仕切っているミリーが「お風呂の最中に、特製の三色アイスを差し上げるってお約束いたしました」などと言う。その言葉にバージルが嬉しそうに顔を輝かせると、ミリーは更に続ける。

「グリーンピースのスープにローストポークのアップルソースがけ、それにスモークサーモンのサンドイッチをお出しますよ。お嬢様みたいに本格的なフランス料理は作れませんが、私の田舎風のもそんなに悪くないですよ。御約束の三色アイスはデザートで、特製ココアを添えてお出します」

「うわああ！　すごいなあ」

非常に嬉しいな期待感に満ちたその言葉を否定するのは、ロバートも気が引ける。

「私はミリーの作る物を食べて育ったの。味は保証できるわ」

「俺、絶対、ぜーったい食べたいな」

普段料理を作っているマギーは夜会に行くのだし、夕食は父・侯爵の分と使用人たちの分、母の病人食しかない訳で……

「……では、一晩、お願いしようか」

「一晩じゃなくても、その、マナーと作法をある程度飲みこむまで居てくれても私は一向に構わないわ」

さすがにそれは筋違いだろうと思ったので、一晩経ったら、明日の午後から引き取ることが出来るように準備を整えさせる事にする。マギーは「バージルが寂しくないように」ミリーとボブ夫妻も、一緒に夕食を食堂で食べるようにしたらしいが、明日からどうするかは悩むところだ。

「俺、明日からマギーさんと一緒に食べる」

「あ、そうね。そうしましょう」

「ならば、私が御給仕致しましょう」

バージルとマギーと察しの良いラドストックは、勝手にそういう事に決めたらしい。ロバートとしては素直に追認するのが一番面倒が無さそうだ。

そうと決まれば一旦解散となった。ロバートはラドストックを伴ってレイストン・ハウスに戻った。

「あのバージルと言う御子は……」

「僕の息子らしいんだ。亡くなった母親はカナダの森の奥に住んでいた狩りの名人で、僕の命の恩人だ」

「あの方を……どう呼びすべきか、悩みますな。あるいは皆にどのような……」

「庶子だからな。お前の良識とやらで判断すれば、間違いなからう。皆にもそう言うっておけば良い。本人が色々しゃべるだろうから、嫌でも皆に事情は知れてしまうだろうか」

「口止めを致しますか？」

「効果は無いだろう」

マギーにも「笑った感じが似ている」だの「美味しいものを食べた時の表情がそっくり」だの言われてしまったぐらいだから、やはり自分とバージルは血のつながりが有るのだろうと思う。だが正直言って自分が「父ちゃん」だとは思えないのだ。だが、ロバートがバージルを拒絶した場合は「カナダに帰って、兄ちゃんの商売でも手伝うつもりだった」と、事もなげに言われたのが逆にショックでもあった。つまり、大してあてにも頼りにもされていなかったのだ。そうした主人の戸惑いも察しているらしいラドストックの側からこの件を話題にする事は、ロバートが説明しようとしてもしない限り無いと思われる。

「さて、御自身も身支度をなさいますと」

言われるまですっかり忘れていたが、確かにそうすべきなのだ。

「テイルコートの下を黒で揃えるのが昨今の流行りですなあ。一昔前のような淡い色合いのものは確かに汚れが目立ちますし、肥満してきた方には厳しいものですが、そうは申しまして猫も杓子も真っ黒ばかりと言うのは、なんだかつまらない様な気がしますので……」

ラドストックはミッドナイトブルーの布地を選んだようだ。

「夜の灯りの中では、本当の黒より黒く見えるな」

「黒も良くお似合いです、この方がお顔映りが良いと存じます」

靴下は極上の絹製の黒。靴もエナメル製の黒。ステッキも黒檀だ。反対にシャツとタイ、サスペンダー、皮手袋は真っ白だ。そして懐

中時計はこの場合銀色が好ましい。プラチナのボディで文字盤にダイヤをあしらった物ならふさわしいだろう。ロバートの祖父や父の若いころは、貴族の男の服は様々な色が氾濫し、女物と比べても負けていない程華やかだった。それが近頃は男の装いは色数を抑える方が洗練されている、と言う感覚が行きわたりつつある。

「馬車は四頭立てを御用意させました。御出席なさるのは厳選された方ばかりのようですから、格式も大切かと存じまして」

大きな催しではないとアフトン公爵は言ったが、客は皆、何がしかの分野での一流の人物で、この国の運命を左右しそうな優れた官吏・軍人・学者なども含まれる。あの赤毛の青年弁護士も居るのではないかと思われた。何しろ彼は公爵が「身内にしても良いと思う」人物らしいから。招待客の中の数名の大貴族・王族は、本人か子や孫が、そうした有能な人材の場合ばかりのようだ。あらかじめ使用人同士の伝手で招待客のリストを入手しているから、ほぼ間違い無いだろう。

「庭伝いに突っ切って歩いた方が、四頭立て馬車で公道を走るより早そうだが、そもいかなのだな」

「若旦那様がおっしゃると、冗談には聞こえませんか」

「行きはともかく、帰りはそうやって歩いても良さそうだって気がしないか？ 酔い覚ましになるし」

「ちゃんと馬車でお戻りください」

「わかった、わかった。ちゃんとそうする。でもな、四頭立てじゃなくちゃいけないのは王族の方々ぐらいじゃないか？ 僕なんて一介の貴族なんだから、二頭立てだって十分だと思うけどな」

「はあ」

「でもまあ、いいさ。お前がそうすべきだって思うなら、その方が無難なんだろう」

ロバートを招待する側は、当然ロバートの爵位に対する期待感も有るはずなのだから、それに配慮しなければいけない……と言うような事をラドストックは考えたのだろう。ましてや末娘の社交界デビューのきっかけづくりの催しなのだし、格式に対する配慮は普段の夜会や食事会より必要、そういった所か。

「マギーもドレスアップ出来た頃かな？」

一応、約束通りの時間にマギーを迎えに行く事にする。迎えに行く事を自然に申し出ることが出来て、それを当然のように受けて貰えたのだ。「一步前進だ」とロバートは感じていた。

### イエス命名の日に・3

アイスブルーの地に雪の結晶を織り出した絹地の豪華なドレスを着たマギーは、ただ美しいだけではなく、一度見た人間に強烈な印象を与える何かが有った。

巷で流行りの強調されすぎた胸や17インチ（42センチ）などと言う病的に細い腰を「美しい」とはロバートは思わない。伸びやかで瑞々しい若さと言うのもそれはそれで魅力的だが、マギーには何かしつかりとした核のようなもの、彼女自身であって余人では無い何か、そんなものがしつかりと有る。それが成熟したという事なのだろうが、その癖、恋愛の実体験においては奥手であった様なのは好ましいと感じている。独占欲と言う点ではロバートも、世の中の常の男と大して変わらないのではあるが……ただただ綺麗で従順なだけの女を妻にしたいとは思えなくなっているのも確かなのだった。

ドレスの上から着るコートもおそろいの色目で、こちらは銀色のボタンにミッドナイトブルーのリボンが袖にあしらわれていて、優雅な雰囲気だ。

「これは……素敵だ、実に素敵だよマギー。何というか北の国の女王様と言う感じだ」

ふわふわした真っ白い毛皮のマフから出ている手を取って、馬車に乗り込む。

「アンデルセンの『雪の女王』みたいって弟に言われてしまったわ」「アンデルセンか。その話は知らないな。『親指姫』って言うのが絵本になっていて、友人の子供たちにせがまれて読んであげた事が有ったぐらいで……」

マギーによればどうやらその女王は雪の魔物か魔女とでもいうべ

き存在で、カイという少年とゲルダと言う少女、とくにゲルダの遭遇する試練の数々がメインのような話らしい。

「親指姫なら花の国の王子様と結婚するのにな」

「僕は弟さんとは意見が違うよ。君は冷え切った雪の女王じゃないさ」

「北の女王様と言えば、十七世紀のクリスティナ女王は独身を通したわ」

女性を愛する女性としても有名だった北の大国の昔の女王にあやかられても困る。かつての王の血統は途絶え、今のスウェーデン国王はフランスの平民として生まれた人物だ。そのスウェーデン国王はノルウェー国王も兼ねるから、商売の上では付き合いは有るわけだが……

「他に居なかったかな、女王様は」

「ジョージ？世陛下の時代に二年ばかり女王だった人がいるかしらね」

「わかったわかった。君って変な事に無駄に詳しいな」

「無駄で悪うございました」

「あ、ごめん」

ロバートは「女は男より出しゃばるな」などと言うつもりは毛頭無いのだが、だがどこかでついそう思ってしまう部分が有るのかもしれない。

「いえ、別に。あなたは正直な感想をおっしゃっただけよね」

「あー、困った」

マギーを怒らせたくは無かった。あっさりと「綺麗だ」と、ただ

それだけを言っておけば良かったのに、要らざる話を始めるきっかけを作ったのはロバート自身なのだ。

「別に夕食を食べて、話をしたければ誰かとしゃべって、気が進まなければ喫煙室で葉巻でも吸って、角が立たない程度に踊って、早めに戻ればよろしいのではなくて？」

マギーはわざと話を取り違えている……ロバートにはそう感じられた。だが、本当に夜会は気が進まないのだろう。年下の叔母のために開かれるもので、そこで独身のまま二十代半ばまで過ぎた彼女の立場は、微妙と言えば微妙だからだ。渋る彼女を強引に誘ったのはロバートの方で……あれこれ考え出すと、さっきの「無駄に詳しい」と言う言葉は実に実に不味かった。

「マギー！……ごめん。僕がいけないんだ。その、君は綺麗でそのドレスは凄く素敵に似合っている、そう言いたいだけ。それだけだ……早目に戻りたい？」

「ええ。明日の事も有りますからね。キッチンメイドたちだけでは処理しきれない事は、まだ多いですから。それにバージルの事も有るでしょう？」

「……そうだな。食事をして、さっさと切り上げようか」

「ええ、そうしましょう」

「でも、今日は少しダンスを踊る時間が有るみたいだね。僕は君と踊りたいんだけど」

「では、そうしましょうか」

何だか気のない返事なのが、ロバートには寂しい。

「君にダンスを申し込む人が沢山いたら……厄介だな」

「今日はそんなに大きな会ではないし、ディナーの後、喫煙室にお



いになる方も多いのではないかしら？ 私も隅っこで大人しくしていきましょう」

「そんなの無理だろう」

「二、三曲踊ったら、疲れたと言って断るわ。壁際で何か飲んで座っている事にします。頃合いを見てロバートが来て下さったら、御一緒に、それで切り上げて帰りましょう」

「ひょっとして、ダンス、嫌い？」

「余り踊りませんから、ひょっとして足を踏んでしまうかも知れませんわ」

本当にそうなのだろうか？ だが、マギーがあまりダンスに乗り気では無いのは確かなようだった。

アフトン公爵家の邸宅セイフライド・ハウスは通りから見渡せない様な具合に植栽を配置して有る奥に有り、ロンドンの市中に立つ邸とはとても思えない。どこか郊外の離宮と言った趣の邸だ。公爵の地位にある人の邸としては小ぶりではあるがすべての建材が超高級品で、噂によればキッチンやバス・トイレなどは最新の設備で整えられているらしい。すべての部屋にスチームによる暖房の設備が整っているのだと言う。確かにいつ訪れても、春の温かさだ。

「普段はそう沢山の給仕やキッチンメイドを置いていませんから、今日は仕出し屋に料理を依頼したはずですよ。と言っても、元は祖父の所で働いていた人が始めた商売ですから、祖父の好みも考えもよく呑み込んでいるのですけれどね」

招待客は百名ほどのようだ。そのうち十名はエセルの学友らしい。それに見合った若い男が十名ほどいる。最初に公爵の挨拶が有り、「食前の軽い運動」として踊ったかどうかという事で、皆気楽な感じで踊っている。比率としては年配の夫婦が多かったが、それでも

皆、色々相手を変えて五曲ほど踊った。ロバートはマギーと最初に踊り、五曲目もマギーと踊った。

「とても上手だね。さっきあんな事を言うから足を踏まれる覚悟をしたのに」

「日によつては本当に足を踏む事も有るんですよ」

「ひよつとして、わざと？」

「フフフツ、御想像にお任せします」

軽やかにステップを踏むマギーの頬はうつすら上気して、いつもより艶めかしい。もっと踊りたい気分だったが、別室に食事の用意が出来たという知らせで、音楽も止んだ。

フォアグラとキャビアのパテと極上のドライシエリーから始まる晚餐は贅を凝らしたものだ。シャンパンと合いの手に何種類ものカナッペが出て、好みのものを選んだ後、ウミガメのスープ、舌平目のポアレにモーゼルの白、トリュフ入りのウズラのパイにブルゴーニュの赤、その後は中国の調味料を使ったドレッシングを添えた瑞々しいサラダ、ヨーロッパ中の名産地から取り寄せたかと思われるほどの数々のチーズ、アイスクリームと色とりどりの果物を美しく重ねたパフェと続き、そして最後に紅茶かコーヒーを好みで選ぶようになっていた。

確かにどれも適切に調理されており、水準以上に良い味だったが……割合と型にはまっているというか、常識的な素材の組み合わせではあった。確かに人を呼ぶ場合、その方が無難なのだろうが食事そのものでわくわくする……とまでは行かなかった。だが、斜め向かいにマギーがいて、同じ食卓で差し向かいとは行かないまでも一緒に食することが出来たのはロバートにとって、嬉しい事ではあった。

「見たことも無い様なごちそうばかりで、ちょっと戸惑いましたけど、どれも本当に美味しかったですわ」

隣に座ったレディ・エセルの学友の令嬢は頬を赤らめている。いかにも酒にも不慣れな感じが初々しい。オレンジ色のシルクタフタのドレスと同色の髪に飾ったリボンと白バラの造花は年頃に似合いの装いと感じる。この少女も由緒正しいポウレット伯爵家の令嬢だ。

「セルビー伯爵は大人でいらっしゃるから、こんな御席も慣れっこでいらっしゃいますわよね」

「まあ、いい年ですし、言わばすれっからしですからね」

「まあ……そんな……あの……エセルの御親戚のアイスブルーのドレスの方とはどのような？」

「僕は結婚してほしいと申し入れているんですが、結婚自体、したくない人みたいなので、大変です」

「私なんか母に毎日、一刻も早くお相手を見つけなさいと口うるさく言われていますのに……そんな方もいらっしゃるのですね」

「確かに珍しいですよ。そうおっしゃるあなたは、あの彼なんかどうなんですか？　ここの公爵閣下の双子の孫の一人が、さっきから鋭い視線をこっちに向けてくるんですけどね」

「初めてお会いしたばかりですし……でも、あの双子の御兄弟、髪の色も目の色も違っていらっしゃるから見分けはちゃんとつきますわね」

「あの黒髪の方の彼も……弁護士らしいですね」

双子の片割れの灰色の髪の方、つまり香港で仕事をしている方はアダムといい、黒髪の弁護士の方はアランという。マギーに「雪の女王みたい」と言ったのは、アダムの方らしい。

「他にも弁護士の方が？」

「あの赤毛の熱心に水道の話をしている彼、サー・ベンジャミン・

グレイストーンの跡取りで、かなり優秀な弁護士らしいです」

するとその令嬢は「あちらの方も、それから向こうの方も弁護士でいらっしやいますわ」と言う。母親が社交的なら、色々人脈が繋がってるのかも知れない。だが……話をするうちに……

「あなたのお母様はマダム・ローリーだったかな？」

「その方は兄たちを産んだ方で、亡くなれました。私は後妻の子です。母の旧姓はハイアットですの」

「お母様のお名前は？」

「モニカです」

ロバートは頭を抱えなくなった。また過去の因縁が関わってくるのだ。ロバートはモニカ・ハイアットが最初の夫と結婚する前後二年近くの間、秘密に付き合っていた。モニカは父親よりも年上で病人の裕福な貴族の妻となり、ロバートはモニカより三歳年下の傾いた侯爵家の次男と言う立場だった。ロバートが運試しに新大陸に向う以前の事でさすがにこの令嬢が自分の娘と言う事は無いが……モニカは言わば初めての相手であって、金が無い事の情けなさを実感させられた相手でも有るのだ。

幸い、ポウレット伯爵夫人となったモニカは出席していない。誘われたらしいが、何か理由をつけて断ったようだ。あるいはアフトン公爵とロバートの付き合いを知っていて、警戒したのかも知れない。令嬢の様子や話の端々からするとモニカは、ポウレット伯爵とは円満な家庭生活を営んでいるらしい。

そのポウレット伯爵は狩猟の話以外、大して気の利いた話も出来ないが、馬鹿正直な男だったように記憶している。領地経営についても、あまりうまい具合にやれると言うタイプではなく、モニカが最初の結婚で手にした遺産のおかげで、どうにかやりくりがつくようになったと言う所なのだろう。

令嬢とロバートの話は小声であつたが、ロバートが氣を入れて話に相槌を打っているように見えたらしい。食事の後、その大きな食堂を出て、しばらく喫煙したり飲み物を手にして休憩し、また、ダンスが始まった。また最初のダンスをマギーと踊ろうとしたら、マギーは既に食事の間、隣の席で話をしていた赤毛のジェフエリー・グレイストーンと組んでいた。そばをすりぬける瞬間、マギーからもジェフエリーからも鋭い視線を向けられた。何か疲労を覚えて、壁際の椅子に座り、給仕が持ってきた飲み物の中から極上のソーテルヌのワインを受け取って「生き生きとして輝かしい」と評される香りを思い切り楽しむ事にした。そして、ダンスはしばらく無視することにした。そのくせ部屋を出て喫煙室に向ったりしなかったのは、マギーが誰の誘いを受けるのか、やはり氣になった所為だ。ついチラチラと様子を窺ってしまう。そのロバートの様子を、通りかかったアフトン公爵がどのように受け止めたのであつたらうか。

「ロバート君、どうした？」

「この素晴らしいワインを味わっております」

「マギーとは、どうかね？ 進展しそうか？」

「ちよつと弱氣になっています」

「ふーん、君にしては珍しい」

「その……僕の過去が身綺麗とは言えないのは認めます。今は実に真面目なんですがね。ですが……この所、何なのでしょねえ。過去に崇られているのかと思うような事態が続いているんです。隣に座った令嬢の母上は、僕が若いころ付き合っていた人でした。その母上は最初の結婚で自分の親よりも年上の病人の妻になったおかげで豊かになりました。当時の僕は絵に書いたような貧乏貴族の次男坊で、情け無い事に小遣いまで貰ってましたよ」

酒の酔いの所為だろうか、ロバートは立ち入った話をしてしまっ

た。アフトン公爵が秘密を知り得たからと言って、モニカやあの令嬢に何か言うとも思えなかったからではあるが……

「かのルソーだって若いころは男爵夫人の燕だったさ」

「僕はルソーみたいに子供を全部救貧院送りになんかしませんよ」

「ルソーと違って、君は金持ちだし、君の方が誠実だ……だが、君が本気でマギーを望むなら、本当の事を打ち明けておいた方が良いでしょうと思うよ」

「……はい」

ようやくマギーはダンスを終えて、こちらに向かって来るようだった。

## イエス命名の日に・4

「何か面白い話でもなさってましたの？」

アフトン公爵はマギーの姿を認めると、微笑んでその場を離れてしまったので、マギーはロバートの隣にごく自然な感じで座った。ざっと見渡した所、ホールの中で楽しげに踊っているのは十代の若者と安定した夫婦だけのようにロバートには見えた。あの赤毛のグレイストーン弁護士はロバートとは対角線上の正反対の位置に座っていて、隣にマギーの弟で黒髪のアランの方がいる。二人ともこちらを見るともなく見て、何か話している。先ほどアフトン公爵とロバートが小声で話し合っていた様子も観察されていたのだろう。

「マギーの御祖父さまに昔の恥を打ち明けていた」  
「昔の恥？」

ロバートは頷いたものの、それ以上は口にできずにいた。

「ああ。金も力も無くて、何も守れなかった昔の話」

「何か込み入った事情が有りそうですね」

「君にも打ち明けたいが、ここじゃ差し障りの有りそうな話だ。関係者も居そうだし」

「ではさっさとお邸に帰りましょう。ね？」

「一度君の邸に寄った方が都合が良いだろう？」

「なら……そうしてください」

失礼にならない範囲で、その場を早めに引上げ、馬車に乗り込んだ。  
だ。

ロバートはあまりに近距離なので、ゆっくり行くように御者に命

じた。そして馬車が動き出したとたん、マギーを抱きしめたのは少々酔っていた所為だろうか。あるいは最後のダンスを出来なかった恨みだろうか。

マギーの髪の毛の付近から微かに男物の整髪料の香りがしたのがロバートの神経を苛立たせた。柑橘系の匂いが表に出過ぎて未成熟な若者向きである気がしたので昨年から使うのを止めた、その銘柄に違いない。今は同じ店の製品だが針葉樹と白檀、ジャスミンが中心の、端正な中にも大人の華やぎが感じられるものに変えた。

ラドストックはロバートの調髪のために、ロングエーカーの王室御用を勤める理髪店と同じ品物を使っている。首相や王族も通うその店は、どうしたって気を遣わねばならない誰かと顔を合わせるのが厄介に感じられて、ロバートはもう随分行っていない。代わりにラドストックが常連兼弟子見習いのような感じでその店に通い、店の主と個人的に懇意になり技術を磨かせてもらっているようで、主からは「お邸でしくじったらウチでやとう」などと半ば本気で言われているらしい。無論、ラドストックは特別扱いであって、最近売り出したコロンや石鹸はともかく、その店の整髪料は一般には手に入らないものなのだ。

あの赤毛の若者は……生意気にもその超高級理髪店で身なりを整えたのだろう。救貧法の改正では熱弁を振るうくせに、熟練したお針子の日当の倍はしようかと言う高価な理髪料を払って、今夜の夜会に備えたと見える。気合が入っている。彼の立場なら同じ事をしただろうとロバートは思うが……不愉快だった。

馬車はすぐにマギーの邸に着いた。そしてそこで馬車を返した。邸の中はもう寝静まっているようだが、玄関の側の部屋は明かりがついている。バージルは恐らく眠ってしまっただろう。

「どうするの？　こんな場合は」

「自分でカギを持っていますから、開けて中に入ります。ミリーは



起きているはずですし……急いで着替えますから、どうぞ中でお待ちください」

マギーが家の鍵を開けて中に入ると、ミリーが出迎え、マギーと一緒に二階に上がった。ドレスは一人で脱ぎ気は出来ないから、手伝う者が必要なのだ。マギーの支度を待つ間、ボブがホットウイスキーを勧めた。

「あまりお上品じゃ有りませんが、美味しいと思います。公爵様がお褒め下さったんで」

「ありがとう」

暖炉の前に座り、思いの外美味しい酒のおかげで体が十分に温まったところ、マギーが降りてきた。

乗馬服を思わせるモスグリーンのサージの服だ。先ほどまでは見え隠れしていたデコルテと案外に豊かな胸の谷間が高い襟で完全に隠されてしまったのは残念だが、巨大なクリノリンと鋼鉄のコルセットから解放された自然な感じが悪くないと思う。

マギーがそのドレスの上から暖かそうなフード付きのオーバーコートを着ると、ロバートはマギーに腕を差し出し、自然と腕を組んで門を出る。道を横断すれば、もうそこはキーネス侯爵邸レイストン・ハウスの敷地内だ。門に入ると夜は放し飼いにしている二匹のマスチフが飛んできたが、ロバートとマギーに撫でられると、また向こうへ行ってしまった。ロバートの知らない内にマギーは犬たちを手なづけていたようだ。

「やっぱり最後、君と踊りたかったな。赤毛の彼とは二曲続けて踊っていたね」

「ええ。あなたはオレンジのドレスの可愛い人とお話が弾んでいたようにけど」

「あの人の母上が……いや、僕が昔あの人の母上に、こっそり小遣いを貰うような関係だったんだ。それで気になったただだよ。無論あの娘さんには内緒だが」

「そ、それってつまり……」

「若い燕ってやつさ。軽蔑する？」

マギーは首を激しく横に振った。かなり驚いたようだ。

「ず……随分多彩な社会的経験を積んでいるのね、あなたって」  
「社会的経験ね。物は言い様だな。ねえ。あの弁護士とは、どうだったの？」

「水道の水は汚染されていないもつと上流から取るべきだって話を  
して、水とワインの出来不出来の話をして、一緒に踊った。それだけよ」

「踊って楽しかった？」

「ええ。まあ。ダンスも下手ではなかったし」

「僕と踊る時と、どう感じが違うの？」

「ジェフリーと踊る時は楽しいけれど、ロバートと踊る時は楽しいだけじゃないの……何だが胸の奥の方がザワザワってする感じ……かしら」

話しながらだと自然歩みもゆっくりとしたものになる。

「胸の奥の方がザワザワするって、僕が嫌なんじゃないよね」

半ば無意識に二人は歩みを止めた。そしてロバートはマギーを抱きしめる。街燈の灯りの下、周りには他に誰も居ない。つい気分は開放的になる。

「嫌だったら、こうはなっていないわ」

「それもそうか……なあ……君を抱きたい」

「抱かれているわ」

「ねえ……本気で言ってる？　僕が言いたいののは君とベッドに行つて、思うさま……」

愛し合いたい？　食りたい？　どっちでもやりたい事は同じだが……ロバートには分からなかった。それからしばらく無言で、唇の感触を味わい、マギーの背中を手で撫でおろし、互いの体を隙間なく密着させた。

「……ともかく、君が欲しいんだ」

「本当に？」

「ああ、間違いない」

「確かに脈動は早くなっているし、呼吸も荒いわ。あなたが性的に興奮しているのは認識したわ」

「マギー」

普通の令嬢なら、まず言いそうも無い言葉にちよつと呆れながらも、ロバートは不快では無かった。そう言うマギー自身が明らかに「性的に興奮している」とロバートにははっきり感じ取れたからだ。ロバートの手が緩むと、マギーは「あまり遅くなつては、まずいでしょう」と言つて歩き出す。ロバートも仕方無くそれに合わせるのだった……

「牛や馬が番うのと、人間の場合、牧師様が言うように根本的に違うなんて……私は信じていないの」

向き合っていない所為か、夜の闇の所為か、マギーも大胆な事を言う。ロバートは半ばむきになって歩いているように見えるマギーの歩みを、一時的に止めたいと思った。

「獣みたいに交わるのも悪くないよ。君にだってその醍醐味は理解

できるさ、すぐに」

「そ、そんないきなり……で、でも、子供が出来たら……」

うまい具合にマギーは立ち止まったので、また、腕の中に抱きしめる事が出来た。

「こういう事はいきなりなのが、当たり前なんだ。君だって僕に欲望を感じない訳じゃなさそうだし。大体、女性に主体的な性欲が無いなんて言う学者がいるが、ありや嘘だ」

「それは豊富な経験に導かれての実感？」

「数をこなしたのは認めるよ。でもあんなのはみんな、君と一緒にするための予行演習みたいなもんだったのさ」

「それこそ、物は言い様ね」

「僕は、本気でそう思っている」

「何だか半分騙されているような気もするけど、ロバートになら、騙されても良いかしら。何しろ社交界の基準で行けば私はもう完全に『売れ残り』なんだし、それでも引き受けてくれる男性なんて、そういないわ」

「マギーでもそんな事が気になる？」

「ええ。良識にあふれた御婦人方の群れの前に一人で立つと、やっぱり心細いわよ」

「あの赤毛君はマギーに結婚を申し込みかねないと僕は見ているから、ちよっと焦ってるんだが」

「そうかしら？ ロバートの思い過ごしじゃない？ ジェフエリーを狙ってるお嬢さん方は沢山いるから、何も私を相手にする必要なんて無いですもの」

「でも話が合いそうで……心配だ」

「まあ、合う事は合うわね。でも心配って、本当に？」

「本当だとも。ともかく特別結婚許可書を急いで取り寄せる。三日も有ればどうにかなりそうだ。とりあえず法的・宗教的に夫婦にな

っておこうよ。結婚しても君の自由を妨げないし、公に僕の妻だつて名乗りたくなかったらそれでもいいさ。でも、結婚はしておこうね、どう？」

その特別結婚許可書さえあれば、いつでも結婚できる。家族の反対が無い貴族階級の男女ならカンタベリー大主教に二十五ギニーを支払えば手に入るのだから。やはり急ぐべきだろう。

「自由を妨げないって、本当なの？ ロバートはそれでも良いの？」  
「僕は君を抱きたいし、もし子供が出来ても安心できる状態にしておきたい。それ以上は欲張らないよ……と言っても、浮気は困るけどな……君はお茶会やらダンスパーティーやらの繰り返して毎日を過ごすなんて、嫌なんだろうしね。それなりに意義も目的も有る社会的な活動は好きにやってくればいい。本当に社会的に意義が有る活動なら、僕だって応援する」

「まあ、本当？ それなら独身でいるより却って安心かしら」  
「僕は今更誰か他の女にフラフラする気はこれっぽちも無いし、悪くないと思うんだ。ね、だから……」

結婚すれば何もかも夫を中心に考えて、常に一步控えて過ごさねばいけない。それが上流社会の常識で、実態がかけ離れた夫婦でも互いに外聞を取り繕うのは暗黙のルールだが、そんな関係は何だかマギーには似つかわしくないと、ロバートは感じている。

「ね。大事な話なら、明日にしましょう。今夜はもう遅いし」

「ちよつと待って、マギー。大事な事を言うから」

「なあに？」

「僕と結婚してください」

「はい」

「本当に？」

「ええ」

ロバートはホツとした。ホツとしすぎて、力が抜けてしまった。

「それは良いのだけれど、バージルとの約束も有るし……レイストン・ハウスの皆には何も言っていないし」

「既に僕の父にラドストックにハーグリーブス夫人は事情を知っている訳なんだから、そんなの、どうしてもなるさ。君が僕の奥様になつてくれれば」

「なりますから、今夜はダメよ」

「あー、そうだね。実に残念だ。ものすごく残念」

「まあ、どこまで本気でおっしゃっているの？」

「本気も本気。でも『今夜はダメ』だと言う事は了解したけれど、キスぐらい、最後にさせてよ」

「え？」

「嫌じゃないだろう？」

「ええ。旦那様の魅力にメロメロですから」

全くもって、良家の子女にあるまじきあけすけな言い方だ。

「マギー！ もう、全くどこまでが本気で、どこからが冗談なんだ？」

「実は私にもわからないの。だって、経験に乏しいから」

「君って、色々変てこで変わっているけど、そこが素敵だよ」

「あなたも……個性が際立っていて、素敵よ」

「ああ、そう言えば良かったな……どれだけ君が欲しいか分かっている？」

「……何だかドキドキするけれど、たぶん、本当には分かっています。先生」

「マギー、君ったら……君なら、おそらくベッドでも理想的な生徒

に違いない」

「だと良いんだけど……がっかりされてしまうんじゃないかと思うと、ちょっと怖い……だって、もう、年も年なんですもの」

「なら僕は物凄く年だって事になってしまおう。気にするなよ、そんな事」

ロバートは幾度もついばむようなキスを繰り返し、マギーの鼓動が早まり目の中に明らかに欲望の色が滲んだのを確認した。

「明日、一緒に出掛けようよ。君に贈りたいものだって有るし。何か予定が有った？」

「変更できない予定なんて無いですわよ」

「じゃあ、付き合ってもらおう。手短に済ますから……僕は長引いても一向に構わないんだけどね」

マギーは怪訝な顔をした。結婚をすると言うのに婚約指輪も結婚指輪も無しなんて、出来るわけがない……という風には、彼女は考えないのだろう。もう既に、彼女に贈りたいと思っている幾つかのジュエリーの候補は絞ってある。後はマギー本人の希望を取り入れて、サイズを合わせるぐらいだろうか……

「では、明日ね。おやすみ」

「おやすみなさい」

使用人口でこんな風に別れるのも、あと数日かと思うと、ロバートは感無量だった。

## マギーの事情・4

プロポーズに対してマギーが返事をした翌朝、ロバートはレイストン・ハウスのすべての使用人をホールに集めさせた。そこでマギーと「準備ができ次第」結婚する事、マギーはアフトン公爵の孫で有る事、バージルがカナダで生まれた息子である事を発表すると、どよめきが上がった。

「新たに奥方様となられる方を、どうお呼びしましょう」

当然と言えば当然すぎる疑問に、ロバートはこう答えた。

「今まで皆、ホワイト夫人と呼んできたようだが……そうだな、単に『マダム』と呼んでおけばよからう。ここ数日でセルビー伯爵夫人になるわけだし」

マダムという言葉は侯爵・伯爵の夫人への敬った呼びかけとして使われる場合も有る。その意味でも適切ではあるのだった。

バージルはミスター・メルダと呼ぶ事に決まったようだ。だが、幾つかのヒソヒソとささやかれた「混血」という言葉が、明らかに好意的ではないのはマギーにもはっきり感じられた。ともかくもロバートの「家族」として敬意を払うようにハーグリーブス夫人からも申し渡したのだが……

その後はロバートも片付ける事が色々有るようだし、キッチンの取り仕切り役の手配がつくまではマギー自身がこの邸の皆の食事に関する管理は行うのだ。いや、結局は結婚してからもする事にはなるのだろうか。

「でも……肉の解体やら野菜の切り分けなんて、やっぱりレディのなさる事じゃ無いですから」



最初はそんな風に年かさのキッチンメイド達には言われてしまつたが、この邸の人間全体の食生活に関する責任と権限は自分が握っているのだとマギーが言う。「教えて頂いたように、手抜きせず頑張ります」とも言ってくれたのだった。

「使用人の皆にも出す昼の食事はこの牛すね肉と野菜のシチューにしましょう。全員にバターとロールパンとジンジャービアが行きわたるようにしてね。後はリンゴを食べたい人全員が食べられるように、出しておいてあげて。上級職の人にはビスケットとお茶が行きわたるようにして。侯爵様にはこちらのテリーヌとサラダをお付けして、後はシェリーに合うチーズも忘れずにね」

「ミスター・メルダには？」

「侯爵様と同じテリーヌとサラダに、ココアとビスケットをつけて。私もバージルと一緒に食べます」

「マダム御自身は、ココアを？」

「お茶で良いわ」

シチューのベースの作り方を少し手直しして、テリーヌを仕上げたらバージルの居る部屋に上がった。バージルの部屋はかつて次男であったロバートが使っていた子供部屋だ。そこに書庫から鍵付きの戸棚に収められた羊皮紙の古書以外なら、どれでも持ち出して読むことをロバートが認めた。マギーはバージルが興味を示した地球儀と世界地図、子供向けの図鑑類を持ちこんだ。

「ギリシャ語とラテン語、やった事がないよ」

バージルは英語の読み書きは予想外に、きちんとできた。文章を書きとらせても綴りの間違いは、殆ど無い。計算は早い。分数と小数も概ね理解できており、図形の面積の求め方もちゃんとできる。

「へええ、ちゃんとできるのね。体積は……まだ、習ったことがないのね」

「うん。日曜学校だと聖書の話とかばかりで、図形の勉強なんて出来ないんだ。アメリカの大学を出て自分の親が始めた商売の手伝いを始めた男の人がいてさ、俺、その人の店の仕事を手伝って、代わりに色々教えて貰ったんだ。商売始めるまで、学校の先生だったそうで、教え方もうまかったんだ、その人」

何となくだが「測量技師なんか良いかも知れない」とバージルは思うらしい。

「だって俺、庶子ってやつだから貴族にはなれないんだろうしさ……父ちゃんが学問させてくれるなら、大学ぐらいは行って、鉄道とか船とかの仕事をしてみるのもいいかな、なんて思う。商売ででかく儲けるのも無論素敵だけどさ」

だが、その大学が問題なのだった。男で国教会の信者で貴族でなければ、めったに入れないオックスフォードやケンブリッジに、はつきり混血児だと見ただけでわかるバージルが入学した場合、どのような扱いを受けるか、考えただけでマギーは憂鬱になった。

混血児の場合、白人的な特徴が強く出る者も居るのだが、バージルは大地主だった母方の祖母の血筋を強く受け継いだようだ。

「そうね。大学に行くつもりならラテン語とギリシャ語は必要ね。どういう訳か出来ない」と大学に入学できないのよ」

貴族以外にも広く門戸を開いているロンドン大学の校風が、バージルには好ましいかも知れないが、それにしただって入学できなくて話にならないのだ。家庭教師は人柄が良くて、熱心で高い学力の持ち主が好ましいが、そんな人物がどこにいるのか、マギーには見

当もつかない。弟たちにも相談した方が良いかも知れない。

「マギーさんが教えてくれるの？」

「先生が決まるまでは、私が教える事になるかな」

「外でちよつと遊んでもいい？ 家の中ばかりだと、気がふさぐんだ」

「そうねえ、馬は？」

「俺、馬好きだよ」

「じゃあ、厩に行ってみましようか」

ロンドンには姿形が美しく、性格が穏やかで市街地を走っても大丈夫な馬ばかり六頭置いているらしい。

「六頭は馬車用ですが内二頭は乗用にも使えます。乗用専用は旦那様が偶にお乗りになるこれ一頭きりですな。御領地の牧場には馬が沢山居りますが、ロンドンで大事な御用に使うには、まだ訓練が足りないものや、年が行き過ぎた物も居ります」

厩務員達はボブを知っており、名人として尊敬しているようだった。

「ボブじいさんが自慢していた『うちのお嬢様』とおっしゃっていた方が、このお邸の奥方様になられるなんて、何だかうれしですねえ」

ボブはマギーをベタ褒めしているようだ。

「まあ、じゃあ、ボブにお礼を言わなくちゃいけないわね」

勉強に飽きたら、馬小屋で馬の話をするぐらい、バージルの好き

にして構わないと言う事しておく。馬達の方もバージルを気に入ったようだ。だが、まだ、外出はさせられないと言うと、ため息をつきながらも「人さらいも多いしな、わかった」と言って承知はしてくれたようだった。

「イングランドかスコットランドかはつきりしないけど、兄ちゃんが居るはずなんで、連絡取れないかなって思うんだけどさ……おふくろさんたら、何の手がかりも残してくれてなかったし、カナダの兄ちゃん達も連絡の着けようがないって言ってはいたんだ。まあ、半分あきらめているよ」

ルイーズ・メルダの息子たちが少なくとも二人は国内にいる可能性が高いようだ。だが、手掛かりがないのでは、確かに探しようがない。その息子たちのそれぞれの父親の名前なり出身地なり、何か伝わっていれば良かったのだが……二匹のマスチフが、鼻を鳴らしてバージルに擦り寄る。この犬たちはすぐにバージルになじんだ。バージルも犬を相手にすると、気がまぎれる部分も有るだろう。

「こいつらこんな顔してるくせに、可愛いな」

「人間の方も、こううまく仲良く出来ると良いんだけどねえ」

「マギーさんとは上手くいっているけど、父ちゃんはダメみたいだな……俺が息子なんて、嫌なんだろう」

「戸惑っているんだと思うわ。生まれたのも知らなかったから」

「俺が混血なのが……良くないんだな、でもさ、俺にはどうにもできやしないよ」

その通りだとマギーは思い、胸が痛んだ。

「混血だって、立派な人はいるわよ。皆、その事を知らないだけなんだと思うの」

一緒に昼食を取り、マナーについて、音を立てない事と姿勢をよくすることが基本だとまず教えた。だが、あまり口うるさく言うつもりはない。

「貴族の社会ってね、理不尽な腹の立つ事が一杯あると思うわ。でも、それと戦うためにも……紳士らしいマナーと学問は必要だと思うの。少なくとも有効な武器になるわよ」

それにしても笑い方も似ているし、ふとした仕草も、手の形もロバートに似ているのに……肌の色と鼻の形が純粋なイギリス貴族には見え難いのが、やはりハンディになりそうだとマギーは残念に感じた。肌の色が人としての本質的な価値に影響が有るなどと思っていないが、この国で有色人種はやはり「格下」と見なされるのも事実なのだ。この国だけではない。ヨーロッパ中のすべての国と、アメリカやカナダの都会でも、更には恐らくオーストラリアや南アメリカでも……なんて理不尽なのだろうか。マギーは暗澹たる気持ちになった。

それでもできる限りの事はしよう。そう決心した。

マギー自身が子を産めば、紛れもなくこのバージルの弟か妹なのだから……兄弟仲は良い方が良いに決まっている。そして自分の産む子供たちには、人種差別はさせないように育てなくては……そこまで考えて、余りに気が早かったかと、一人で赤くなった。

「マギーさん？」

「え？」

「俺、午後は勉強しておけば良いのかな？」

「ええ、そうしなさいよ。あの自習用のテキストが役に立つと良いのだけど」

「ギリシア語とラテン語をやっつけないと、大学、入れないんだよ

な。俺、動物の勉強がしたいなあ……」

「ロンドン大学で立派な動物学の講座が受けられるようよ。頑張るなさい。そうねえ、パブリックスクールに入るより、家で家庭教師を呼ぶ方が良いと思うの」

「うん。貴族の学校じゃあ、俺は仲間外れになるかもしれないもんな」

「……バージル」

「見るからに貴族って人じゃないと、仲間外れになって大変だって聞いた事が有る。女の人も絶対受け入れないんだろ？」

「ええ、そうね。残念だけど……」

「じゃあ、俺、ロンドン大学目指すわ。牧師さんに聞いたことが有るんだ。貴族じゃない人間が学問するには良い所だって」

「私の父はパン屋の息子でロンドン大学で学んだのよ。そして作家になって、公爵の娘と結婚したの」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、俺も頑張らないとな」

そんな会話を交わした後、マギーはアフトン公爵家に母であるレディー・バーバラを訪ねた。

「ええ？　それでプロポーズをお受けしたの？　この前私が聞いた時は『結婚すべきだなんて思えない』とか何とか言っていたくせに、マギーは何時だって、いきなりなんだから……確かにマギーの好きにして良いとお祖父様はおっしゃったでしょうよ。でもねえ、考えてみて頂戴。母親としては娘を嫁に出すのに支度ナシって訳に行かないのよ。わかる？　マギーの主義として、それが下らないと思っているにしたらって、世の人の視線やら注目やら、嫌でも集める立場に立たされるのよ、あなたも。あの方の奥様になると言う事は、そういう側面も有るんですからね。それにお祖父様がケチクサイ事をなさったかのように噂されては、やはり困るわ」

そして更に「イングランドの領地もスコットランドの領地も御隣同士で、このセイフライド・ハウスとレイストン・ハウスは道一本を挟んで隣り合わせなのよ。きちんとしてくれないと、ちよつと氣まずい事が有るだけでも両方の家の使用人一人一人にまで大きな迷惑がかかるのよ、わかる？」と言われてしまった。

「ですからこうして真っ先にお母様に御報告に参りましたけど」

「もう午後じゃない。御祖父様のところに、朝一番にセルビー伯爵のお手紙が届いたのよ。『マギーは何て言っている？』ってお祖父様に尋ねられた時、何の事か最初わからなくて困っちゃったわ」

それから嫁入り支度のためのドレスの採寸をする必要が有るから、夜にマギーの邸にドレスメーカーを連れて行くと言う事と、寝具やリネン類はサラ、つまりキーネス侯爵家の家政婦ハーグリーブス夫人だが、そのサラと相談して適当に決めてしまおうと言う事を言い渡された。

「何しろ、日数が無さ過ぎるわ。お祖父様が賛成なんだから、特別結婚許可書だって、すぐ届いちゃうでしょうし。マギーに相談したって『飾りなんて無い方が衛生的に洗いやすい』とか『そんなにたくさん要らない』とか言うのがオチでしょうから、あなたはこれから義理のお母様になられる侯爵夫人が滋養に富んだ御食事を召し上がるように気を配ってあげればいいわ。あー、そうそう、マギーの言っていたそのバージルって子、どうするの？」

「今日は私と一緒に朝食と昼食も取りました」

「それは良い事だと思うわ……混血に偏見を持たない教師が必要ね。賢い子なら尚の事ね」

母にもバージルの良い教師になってくれそんな人物を探してほしいと、マギーは依頼した。

## とある理髪店にて

「やはり月に一度は首席理髪師のチェックをお受けになるべきです」  
マスターバーバー

ラドストックに言われて鬱陶しい客と顔を合わせる可能性の少ない時間を選んでこの店に入ったのだが、それでも幾人かの上流社会に属する男たちと顔を合わせた。特に資金調達に絡んで厄介な話を持ちかけてくるような輩では無かったが、親しくなりたいという連中でも無かったので、顔が合ったら軽く会釈する程度にとどめた。

髪を切り、白大理石の豊富に湯が出る洗髪台で洗髪した後「とても真似できるものではありません」とラドストックが言う所の神業的な顔剃りに入る。

心地良い爽やかな香りのする蒸しタオルで顔がすっかり覆われ、首席理髪師の手で押さえられる。タオルを取ってプレシェイブオイルを髭が生える部分に塗り、また新しく蒸しタオルを使う。その後、アナグマの極上の毛を使ったシェービングブラシできめ細やかな泡立ちのクリームを塗って行く。普通ならそこで剃るところだが、更に蒸しタオルを使い、シェービングクリームを丁寧に塗り重ねてから、ようやく剃刀だ。右、左、顎と順に仕上げていき、また蒸しタオルで蒸してからアフターシェーブバームを塗り込める。それからアフターシェーブローション、更にフランス産のアルムブロックと呼ばれる白い天然石を湿らせたものをごく軽く肌にあて、丁寧に馴染ませる。消炎・消毒・止血効果があるのだそう。少々ヒリヒリするが、それすらも不快ではない。

髪と顔に関するすべてが終わった後、爪磨きのサービスも席を移して受ける事にする。こちらの責任者は中年の女性で、幾人かの若い助手を仕切っている。



「おや、ロバート君じゃないか、珍しいね」

ふと見ると、隣の席で手の爪を鹿革のバッファーで磨かせている人物はアフトン公爵だった。そういえばマギーが「祖父は毎日あの店で髭を剃って、爪の手入れをして貰うようです」と言っていたのをロバートは思い出した。

「やはり、ちゃんと身支度はしておこうと思ひまして」

「君のところのあの、彼……ラドストックと言ったかい？　あの男の腕前も悪くは無さそうだがね」

「ですが、あのラドストックに月に一度はここに来るべきだと言われてしまいました」

「いよいよ明日だが、マギーはどんな感じかね？」

特別結婚許可証も入手したし、贈ろうと思っていた宝飾品の手配は出来た。レイストン・ハウスの使用人達は、元からマギーを「上流階級の匂いをする」と感じていたようで、ロバートと結婚すると聞いても仰天すると言う感じでは無かった。差し迫って困るのは調理に関わる人間をどうするかだが、マギーの邸を管理しているミリーに毎日通ってもらって、当分は切り抜ける事になりそうだ。バージルの事も考えると、やたらと性格もわからない使用人を新しく雇い入れるより安全だと思われた。権益を握った上級の使用人が弱い立場の庶子に辛く当たると言うのも、時折聞く話だからだ。

ここの従業員は上流の顧客を相手にするだけあって、知り得た秘密を軽々しく噂にしたりはしないが、それでもチップをはずんで聞きだす事は可能だ。どこまでこの場で話して良いものやら、ロバートは迷う。

「元気でやっています。息子の面倒をよく見てくれるので、助かっています」

「マギーの話じゃ賢い子のようにだね。だが……この国の上流社会に食い込むのは……難しいだろうな……」

「はあ」

バージルは、新大陸の先住民の血を引いているとはっきり分かる様な顔立ちをしている。人種的な差別の壁は厚い。公爵の言う事はもっともだった。

「新大陸の方が伸びやかに暮らせる場所は見つかるかな？ 教育は君の監督下できちんと言わなければならないが」

「何か本人の好きな分野で、思うように仕事が出来るとなれば良いんですけどね」

「生まれによる差別と言うのは、理不尽なものだ。これを、見てごらん」

急に公爵は自分の右腕を捲り上げた。そこには幾つものかなり大きなひきつれが残っていた。ロバートはどう言ったら良いのか、困惑した。

「古い傷のようですが」

「救貧院にいた時、全く身に覚えのない盗みの疑いをかけられてね。申し開きの機会も与えられず、氣を失うまで打ち据えられた事があったよ」

公爵の貴族的な容貌が救貧院の院長には感情的に気に入らない部分があったようで、時折「目つきが反抗的だ」と言う理由で平手打ちを食らわされたり、蹴られたりしていたらしい。

「ある日、院長の懷中時計が行方不明になった。院長におべつかを  
使う何人かが『こいつが何かやったに違いありません』と言いだし  
てね。誰かが庭に落ちていた時計を見つけてくれるまで、私はステ  
ッキやら棒やらで、打ち据えられた。しても居ない盗みを私は認め  
なかったしな。癩に障ったらしい。年月を重ねる内に背中傷跡は  
消えたのだが、腕のこの部分の引きつれは、どう言う訳が残った：  
：今でも、この傷を見る度、あの頃の自分と同じような子供達を十  
分に救い出せずにいる、その事を自覚するのだ」

公爵は「ふしだらな交わりで生じた罪深い子」「穢れた子」と言  
われていたらしい。引き取り手がいない婚外子は、しばしばそうし  
た悲惨な目に遭っているようなのだ。

「こういつては何だが、私は確かに『ふしだらな交わりで生じた子』  
なのだろう。だが『生まれつき穢れている』とか『原罪を背負って  
いる』とか言われても……なあ。元々は大人の勝手な都合であって、  
子供自身を責めるのは筋違いだと思うよ。だが、力の無い弱い立場  
の子供は、思う事を口にする事も許されない。生まれによる差別と  
言うのは根強いものでね。理屈に適った事を言っても生意気だと言  
われて打たれたりするし、本人に何の落ち度がなくても何か不都合  
が有ると疑われやすいし、身の証も立てにくい立場に追いやられが  
ちだ。君は……そのあたりの事情に十分に配慮してやって欲しい。  
貴族の家庭ではしばしば力のある使用人が、主人に顧みられない子  
供を虐待する事も有るのでね」

ロバートは学友たちの家庭の様々な不穏な噂を思い返した。庶子  
や先妻の子がやせ細って亡くなったり、病死なのかどうか分からな  
い死に方をしたり、そんな事例は確にかなり有るようだ。あのバ  
ージルにそんな死に方をされたら……やはり胸が痛むだろうとロバ  
ートは思う。だが、その程度であって、どうもいまだに息子だと言

う実感は無いのだ。

「家庭内で不正や不公正が横行するのは、許さないで置こうと思うのです。でも……あれを、息子だとは、どうも正直思えません……それこそ大人の勝手なのでしょうが」

「勝手なのだと自覚していれば、大丈夫だ。幸いその子とマギーとは気が合うようだね？」

「ええ。何だか二人とも楽しそうです」

「ああ、そうだ。明日からしばらくはウォーラム・アベイかね？」

「はい。ロンドンから近いですし、その割には空気もきれいで静かな場所なので」

ウォーラム・アベイはその昔カトリックの修道院であつた土地を賜り、邸を建てたと言うより、修道院を邸に改造した所だ。手を入れないと寒くて堪らない建物だったが、母の健康を考え空気の汚れたロンドンから移り住む事を視野に入れて、昨年大幅に改装した。母よりも先に自分と新婚の妻が休暇を共に過ごすと言う予定は当初は無かったが、悪くないプランだろう。

「君は、あれだよ、典型的な上流夫人の生活をマギーに望んではないよね？　午後三時から日暮れまで夫婦は顔を合わせるべきではないとか、夫婦それぞれバラバラに社交に励むべきだとか……私は好かんのだが」

「確かに夫婦とは名ばかりの男女には必要な措置ですが、僕はそんな社交生活はごめんです。まあ、どのみち仕事ばかりのせわしい毎日を送ってますから、どこかの御婦人と特別親密な時間を持つ余裕も無いですが」

「それなら結構だ。君とマギーが留守の間、君の息子さんを訪問しても構わんかな？」

「わざわざお出で下さいますので？」

「隣じゃないか。それに久しぶりに君の父上のお話を伺うのも悪くない。何か美味しい酒をお持ちするよ。そうお伝えしておいてくれ。

ああ、無論、伺う前にちゃんとお知らせするが」

「美味しい酒には目がないですよ、うちの父は」

「美しい物、優れた物を一瞬で見抜かれる具眼の士でいらっしゃるよ、キーンズ侯爵は。財務方面がいささか心配ではあったが、君と言うしっかりした人が後を継ぐのだ。万事安心だな。だがな、一つだけ心配が有る」

「何ででしょうか？」

「冷たい家庭はすべての不幸のもとだ。特に子供にとってはね……君はまだまだ伸びる人だし、商売もそれなりの醍醐味が有る。貴族にしては働き過ぎという人もいるだろうが、私は構わんと思うよ。確かに君の力を借りないと形にならない事業が幾つも有るのだろうし。だがね、家庭を健全に運営するのは、一大事業だよ。天国に行くときは身一つだ。何事も適切なるバランスと言うものを考えてほしい。何はともあれ、明日からは君は私の義理の孫だ。爺の老婆心と言う奴だよ」

公爵はロバートの爪の手入れが終わるまで待っていた。店の外には貧しい子供たちが五人、公爵を待っていた。

「じいちゃん、昨日もまじめに掃除したぜ」

「牧師さんの所には行ったかな？」

「あたい字が書けるようになったよ」

「よしよし。御褒美な」

近況報告をするなじみの仲らしい。皆に半シリングづつ与え、子供らの教区牧師の所にパンを運んでおいたから貰いに行くように伝えている。物乞いの子供には半ペニーというのが相場のようなだから、やはり気前が良い。家で待つ兄弟の分も込みなのだそうだ。一シリ

ングになると大人の日当になってしまいうから、その程度が程が良いという事なのだろうか。

「歩いておいでになるのですか？」

何と驚いたことに公爵は護衛の供を二人連れて、徒歩でこの理髪店まで来る事になっているらしい。確かに公爵の邸であるセイフライド・ハウスから歩いて歩けない距離ではないが、まったくもって貴族らしくない。

「老人の暇つぶし兼健康法だ。」

「あの子供らは御身分を存じ上げないのでしょうか？」

「どうだって構わんのさ。羽振りのいい爺さんだと思われているよ。うだから、期待には応えんとな。私も彼らから色々な街の情報を貰うし、これは君が思っているよりもはるかに互恵的關係に近いのだよ」

まだ「見回るところが有る」公爵とロバートは、店の前で別れた。

ロバートも自分の事業に関する仕事や、銀行家との面談や、まだあれこれある。だが、夕食ぐらいはゆっくり食べたいと思っている。いよいよ、明日身内だけで簡素ではあるが、結婚式をあげるのだ。

とある理髪店にて（後書き）

脱字補充しました

## マギーの事情・5

マギーは仕上がったドレス類の最終確認を終えて、母であるレディ・バーバラの部屋で一緒にお茶を飲んでいた。確かに弟のアダムが持ち帰った中国の極上の茶は薫りが素晴らしい。それにしても同じ重さの銀と同じ価格と言うのは、どこがどう普通の茶とは違うのだろうか？ 弟が香港に戻る前に聞いてみなければ、などとマギーは思っていた。

「アダムが砂糖もミルクも入れてはいけないうって言うのは、わかる気もするけれど、このお茶の香りと味わいの微妙さを感じてくれない人なら『砂糖をけちられた』なんていわれかねないわ」

使用人たちに出すお茶は、砂糖を好きだけ入れさせるようにした方が喜ばれる。砂糖が最近までかなり贅沢な食品であったと言う事情もあるからだが……

「そんな鈍い人には、出してはいけないと思うわ、こんな上等のお茶は」

「それはそうと、結婚の準備の方はどう？ 両家の使用人一同が参加するパーティーは、こちらでやろうと言うことになったの。ほらレイストン・ハウスだとうるさくて、御病気のお母様に良くないでしょう？」

「確かに、どんちゃん騒ぎになるでしょうからね」

「それはそうと、ウォーラム・アベイ滞在の準備は出来た？」

「荷造りを多少した程度。地の果てに行くんじゃないし、そんなに色々必要なのかしら」

「花嫁さんなのに、何て言い草かしら」

「ミリーと妹のリジーが詰めてくれちゃったから、それでいいかな」



「ああ。ミリーとリジーが詰めたの……それなら大丈夫ね」

昨日もミリーとリジーが大量のレースや絹で出来た下着類をせっせとパッキングしていた。マギーには今までレディーズ・メイドもいなかったもので、何でもミリーがやって来た。だが、さすがに名門貴族の奥方がそれでは不体裁でもあるし不便でもあると言うので、急遽頼み込んで、ミリーの妹で一流のドレスメーカーで務めていた経験のあるリジーに入ってもらったのだ。リジーは警官と結婚して息子が生まれ、その息子も無事に警官になった今は楽隠居を決め込んでも良い身の上だったのだが、殉職した亡き夫の実家の雑貨店を切り盛りして、忙しく働いてきた。元は小さな店であったのを繁盛する店に育て上げたのはリジーの才覚だ。今回奉公するにあたって、店は共に働いてきた亡夫の弟夫妻に任せる事にしたようだ。

そんな訳で、リジーは気が利き、世の中の動きにも服飾関係の流行にも敏感だ。

「姉さん自慢の『お嬢様』のお興入れなんですものね。せいぜい気を入れて務めさせていただきます」

そう言うだけあって、ミリーと二人三脚で初日から大いに働いている。

リジーによれば「姉さんは料理は上手いけどお針は苦手、私はその逆です」との事で、姉妹で互いに弱点を補い合ってやってくれそうだ。姉妹が仲睦まじいのはマギーも心強いのだが……この老姉妹は一緒にになると賑やかすぎるのが玉に傷だ。だが無駄なおしゃべりと言う訳でもないので、文句も言えない。

リジーはミリーが暇な時には、これまでも時折マギーの邸に遊びに来ていた。そしてマギーの衣服に関していろいろ助言したり、時には実際に針を持って直したりもしてくれていた馴染みの仲でもあった。今回の結婚に際しては幾つかの「魅力的な」「ちょっとした

おもてなしの場で着ていてもおかしく無い」「コルセットの要らない」部屋着の類を幾つも誂えたのはリジーの提案に従った。特にロバートと過ごす休暇の時は、そうした服装の方が良いと言うのだが、その理由がマギーとしては少々恥ずかしいのであった。

「絶対、こういうものがこれから貴族の奥方様方の間で流行るはずですよ」とリジーは言う。

制作したドレスメーカーの主もリジーの提案に大いに賛成していたから、そうなるのかも知れない。

「この白い東洋の花の刺繍が入った絹地を使った、十五世紀ごろの貴婦人みたいな袖のこれ、いいわあ。お茶を飲む手も優雅に見せるでしょうね……それに……これこれ、このオレンジの大きく袖を膨らませたのも若々しくて良いわ。この小さな白いレースの花が沢山飾られているのもしれているわね」

母はこの体裁の良い部屋着類を非常に気に入ったようで、緑色の東洋の絹織物を使って一点、さらに薄紫のホニトン・レースをたっぷり飾った一点を仕立てる事になったようだ。だが、マギーはこうしたトルソーと呼ばれる嫁入り支度も、ひたすら面倒で鬱陶しいと感じるので、母の言葉に対する受け答えも、熱のこもらないものになる。

「こんなにお金をかけなくても、結婚できそうだけど」

「出来るでしょうよ。でも、親の立場ってものも有るんだから。伯爵が下さった宝飾品が何ともまあ、立派だったわね。あんなに見事な南洋真珠のネックレスは私も見たことが無いわ。ダイヤがびっしりのチョーカーも今風で素敵だし。ルビーとサファイアで花をデザインしたイアリングとネックレスのセットも綺麗ね」

「良く覚えているわね、そんなの」

「マギー！　そういう立派な御仕度をして頂いたのだから、実家としては見合う支度をさせなくちゃいけないという事なのよ、わかる？」

ロバートの髪の毛を一房だけ切っておさめた金のロケットペンダントはマギーも確かに嬉しかったのだったが、正直な話、マギーは余り宝石にも興味が無いので、適当に返事をした。そして宝石の話を切り上げてマギーが、自分とロバートが留守の間のバージルの生活についての話を始めると、レディ・バーバラは微かにではあるが眉をひそめた。

「マギー、あなたがそのバージルって子の心配を親身になってするのは良い事よ。でもね、あなた結婚するんだから、一番大事に考えるべきなのは旦那様になる方よ、わかる？」

「分かっているつもりよ」

「どうもその辺があやふやというか、バランスが変に感じるのは私だけかしら？」

「バージルの学問に関する事なら、多少は手助けが出来るって思うのだけど……ロバートに何をして差し上げたら良いのか分からないの。身の回りの世話は召使いがやるでしょ、ビジネスの事は分からないし……」

「旦那様を立てて、お任せするって……マギーの『主義』には反するのよね、きっと。夫に大切にされる事イコール夫に縛られる事でも無いと思うのよ。その夫である男性の人柄なり、力量なりによってずいぶん事情は変わると思うの。ともかく、子供、跡継ぎが必要だわ。マギーの言う『互いの人格を尊重した夫婦平等な関係』って理想だけど、一足飛びには無理ね。伝統的な枠組みの中で貴族の妻に求められている責務を果たした上でなければ、家庭内での力を握る事は難しいでしょう。ま、私はうんと気楽な相手と結婚したから、

跡取りを産めと言うプレッシャーは無かったのだけどね」

「子供ねえ……」

「変に意識しすぎると、ダメなのよ、そういう事は……あなたセルビー伯爵が好きなんでしょう？」

「そうなんだと思うけど」

「何その？ 頼りない答えは」

「だって初めてなんですもの。男性に抱きしめられたいとか、他の女の人と話をしたら嫌だとか思ったの」

「あー、そう思うの。なら大丈夫かしら」

「子供を作る具体的な方法も……心配と言えば心配」

「あなた御得意の解剖学の本やら医学書やら、色々読みすぎちゃって、考えすぎなんじゃない？」

「ああいう本は、男性の見地からでしか書かれていないから参考にならないの。女の人に関わるのは……お産に関する事が殆どだし。子供が妊娠中は子宮の中で羊水の中に浮かんでいるのは知っているけど、その……人類の場合も他の哺乳類と同じやり方だとは思いますが、具体的にどの様な手順で受精を誘発して『着床』するかなんて、どこにも書いていないの」

それを聞いたレディ・バーバラは爆笑した。

「マギー！ まあ、マギーったら、『受精』ですって？ 『着床』

？ 初めて聞くけど、子供のもとが納まるべき場所に納まることかしら？ 『受精』なんて、みーんな深く考えずに本能に基づいて

『行っている』から！

「そういうものなの？」

「だって……だってそうでしょうよ。まず最初に何分見つめ合ってから、キスして、それから服を脱がせてなんて、手順を考えてやれるわけないわよ。特に経験の浅い内は恥ずかしいでしょうし」

「それも、そうね」

「ともかく……マギーの旦那様になる方は子供を作る方法は知っているし、んー、結婚証明書に署名が済んだら邸の皆はドンチャン騒ぎで、あなたは旦那様とさっさとウォーラム・アベイに引っ込むでしょう？　せいぜい頑張って受精でも着床でもさせればいいわ」

あからさまにそう指摘されて、マギーは赤面した。すると、レディ・バーバラはまた笑った。

「マギーが『ちょっと変てこな所が、また可愛い』ってセルビー伯爵がおっしゃったのは、こういう所かしらね。それにしてもオールマックスみたいな社交場に出て旦那様探しをしなくても良かったんだから、あなたツイているわ」

母だって、そんな所で父と出会ったわけでもないだろうにとマギーは思った。

「社交シーズンになったらエセルがお嬢さんを探すのに協力してね。一度ぐらいはオールマックスで旦那様共々、踊ってほしいものだよ」  
「オールマックスって、出入りするのにやたらもったいつけて、仕切り役が名門貴族の方々だけど、やってることはダンスとカード賭博って場所よね。そんな所で、まともな人が見つかるの？」

「お金目当てのひどい人もいるけど、まともな人も付き合いで顔を出すわよ」

「お母様は行った事がお有り？」

「物凄く昔だけどね。お父様と最初に出会ったのは、オールマックスではないけれど、行ったから縁が繋がったって事も有ってね」  
「仲立ちなさる方とか、共通のお友達と知り合ってたって事？」

「んー、ちょっと違うわね、ま、いづれ話してあげるわ。オールマックスも確にかつてほどの権威も人気も無いわ。これから社交界デビューを目指すお嬢様がいる貴族のお宅では、お前のお祖父様が

なさったようなパーティーを催す家が増えそうね」

1765年にウィリアム・オールマックという人物が開いた正式には「オールマックス・アッセンブリー・ルームズ」と呼ばれるその場所は、1835年ころまではロンドンで最も権威ある社交場と認められていた。地位、富、才能、美貌、流行、スタイル、エレガンス、マナーなどなど、全ての面で超一流の人物が集う場所とされた。あくまでもそれだけで、マギーはそんなにすぐれた人物が群れを成すほど存在するわけがないと思っているので、せいぜい玉石混交、その実はずれの方が多いということではないかと疑っている。

だが、その場所に出入りするには、鬱陶しい決まりごとがある。七人の貴婦人が運営する委員会が認定した人物か、後は実に曖昧なのだが「しかるべき人物によって紹介された者」に限るのだ。

「しかるべき人物って、どんな人なのかしらね」

マギーは胡散臭いと思っているので、つい顔も顰めてしまう。

「七人の女性たちが配慮する必要がある人物って事でしょうよ。大金を持っているとか、王族だとか、芸術とかモードの分野で皆に認められているとか」

「つまりご都合主義って事ね」

「それを言ったら、おしまいよー」

レディー・バーバラはきついマギーの言葉に苦笑気味だ。

「ワートルローの英雄ウエリントン公爵の入場を断ったって、さぞ立派な見識ある事みたいに言うけど、単に軍功で公爵にまでなった方が気に入らなかった人がいただけなんじゃないの？」

幼いころ、その話を聞いてマギーは子供心にも「オールマックスなんて馬鹿馬鹿しい所に行くものか」と思った物だった。祖国の英雄に対してあまりに無礼だと腹が立ったのだ。

入場資格の保持者であっても服装規定に違反すると、公爵でも入場拒否されると言うので、その事件以来オールマックスの名は高まったらしい。だが、有資格者の男性はすべてブリーチズと呼ぶ半ズボンに白のクラヴァットを着けることを義務付けるその服装規定は、今となっては時代遅れだろう。

「白いブリーチズは流行遅れよね。ワルツを踊るのに制限が有るのも、どうかと思うわ。マギーもそう思うでしょ？」

「ええ。ワルツだって楽しく踊れば良いと思うわ」

ワルツが「あまりに男女の位置が近すぎる」ので好ましくないダンスだとか何とか、変な規定だとマギーも思う。七人のうるさ方の貴婦人たちに気に入るか入らないかだけが基準なのだ。確かにスコティッシュ・ダンスなんかに比べたら、特定の男女の組み合わせで踊る状態が長いし、恭しいメヌエットより接触の度合いも大きいと思うが、今流行のウィンナーワルツを踊れないのでは詰まらないと感じる若者は多いだろう。

「でも、ロバートの白のブリーチズ姿は、一度見ておきたいかも」

肖像画で見るウェリントン公爵よりきつとハンサムだとマギーは密かに思っている。

「そうでしょう？　そう思ったらあなたからもお話しておいてね」

だが、そんな社交の場に出て行くより、のんびり家で食事を作る事から楽しみたいと思うマギーは、上流社会の女としては変わり者

なのだろう。

「あなた手がまた少し荒れているから、保湿クリームをつけて、手袋をきなさいよ」

注意するのは母親の義務だとレディー・バーバラは思っているようだった。

「この前の夜会ではちゃんとしていたでしょう？」

「でも、伯爵夫人の手が荒れているのは……まずいと思うわよ。野菜なんかしばらく触るのやめなさい」

「でもねえ……ロバートのお母様のスープのレシピは書き上げて、キッチンメイド達にも練習はさせたんだけど、ちよつとした野菜の扱いで、不満な所が有るのよね。仕事がいい加減だと味も悪くなるし。おとといはメイド達だけで作らせたら、お母様、スープを残してしまわれたの。美味しく無いっておっしゃって……ミリーなら丁寧にやってくれそうんだけど」

「わかったわ。あなたが戻って来るまで、ミリーが厳しく仕込んだうちのキッチンメイド二人を応援にやるわ。それならミリーもやりやすいし」

「その間、こちらの御食事はどうするの？」

「お父様が懇意の街の料理人達に応援を頼むわ。みんなお父様の弟子みたいなもんだし。お呼びになればあの人たちは、喜んで店を休んで邸に泊まり込んでくれるでしょうよ。お父様が気前よく美味しいお酒を飲ませてあげるし。邸の中がしばらく、下町のパブみたいになっちゃうかもしれないけれど、美味しいものは食べられるから、いいの。久しぶりにアイリッシュシチューとか、シェーパーズパイとか下町風の美味しいのが食べられるかしら」

祖父の人脈は広いと思っていたが、パブや食堂の主達にも広がっ



ていたようだ。

田舎での休暇の最中は、やっぱり自分でロバートと食べる食事を作りたい……母の手前黙っていたが、マギーは密かにそう決めたのだった。

## ウォーラム・アベイにて・1

「うん、実に綺麗な花嫁さんだ」

ロバートの手放しの賛辞に、マギーにしては珍しく無言で顔を赤らめた。

マギーのすっきりとした立ち姿は、古風なレイストン・ハウス内部の礼拝堂で際立って見えた。堂々たる貴婦人らしさだとロバートは思った。ドレスの生地はカーネーション模様の白いシルクジャガードでマルクスフィールド産、レースのベールはホニトン産と言う具合で、国内産業の活性化に寄与しようと言う配慮も好ましい。

署名やら型どりの儀式もそれなりに重要ではあったが、すっかりぼけてしまっていたはずの母が、マギーのドレス姿を見て「とても綺麗よ、マギー。ロバートをよろしくお願いね」とやけにしっかりした口調で言ったのが驚きであり、うれしいハプニングでもあった。

「小さいが良い式だった。マギーもそう思わない？」

「本気でお祝いしてくれている方だけが出席して下さった事は分かるけど、結婚式って、行った事がないから実は分からないわ。でも、ロバートは素敵な花婿さんだけど」

「昨日はちゃんとその国一番の理髪店で髭を剃ったし、爪も磨いたしね」

「ラドストックさん、ええ……ラドストックが剃るのと違う？」

「何というか、持ちが違うかな。結局、朝一番にもう一度ラドストックに剃らせたけど」

「彼はロンドンで留守番でしょ？ その間髭は？」

「自分で剃るよ。それともマギーが手伝ってくれる？」

「あ、やろうかしら」

「んー、良いよ。自分でやる。ね……髭も剃らない顔でキスしたら、怒る？」

「多分怒らないわ」

「じゃ、予行演習」

ロンドンの隣り合わせの二つの大邸宅の使用人たちが、祝い酒で大いに盛り上がっている頃、ロバートとマギーはウォーラム・アベイの邸宅にたどり着いた。さほど大きくは無い邸だが、緩やかな丘の頂上に立っており、遠くには海が見える。

「ニースほど暖かい訳じゃないが、ロンドンより寒くない。ブライトンほど賑やかじゃないのも良いだろう？」

邸の使用人一同が出迎える中、先ずはお茶の時間という事になるのだろうか……

「その旅行用のブルーのドレスも似合うのに、お茶の時間となるとそれに相応しく着替えて、またディナーにふさわしく着替えて、つて事になると面倒だ」

「じゃあディナーじゃなくて、軽く食べる？」

「僕が言いたいのは……早く二人きりになりたいって事」

「三時間馬車って、ちょっと疲れたわね」

「じゃあ風呂にでも入って、ベッドに行こう」

「今から？」

「構わないだろう？」

「その温室が気になるんだけど、見ていい？」

「その後、風呂でベッドなら」

「はいはい。わかりました」

ロバートはちよっと心配になってマギーの顔を凝視した。

「なあに？」

「本当に分かった？」

「たぶん」

「ならいいけど……ほら、こっちからだよ。イチゴなんかも生っているんだ」

ロバートはかなり大きな温室を作らせて、年中瑞々しい野菜類が手に入るようにさせていた。マギーは色とりどりのベリー類に歓声を上げた。

「まあ、美味しそう」

「君の方がおいしそう」

「ロバート……」

「早くこのじゃまっけなコルセットを取ってほしいな」

「そんなにせっぱつまっているの？」

「ああ、そうだよ」

耳を唇で愛撫されると、マギーの体に未知の感覚が走ったようだった。後は、何が何だったのか良くわからなかったが、気が付くと大きな四柱式ベッドの有る部屋にもつれ込んでいた。

「ねえ、互いに脱がせっこしよう」

マギーは熱に浮かされたようになっていて、返事が出来なかったが、がくがくと頷き、ロバートがボタンを外すのを手伝い、自分のドレスを脱がそうとするロバートに協力した。

「お風呂に入っていないけれど……」

「僕は平気だけだな。だって、朝早く起きてピカピカに磨きたてた

ろう？」

確かに朝の八時には入浴して、メイド達の手も借りて隅々まで洗い、磨き立ててはいるが、馬車の中で幾度もキスをされたり愛撫される内に、多少の汗をかいたようなので、少し気にはなるのだ。その後、マギーが予想していたよりもずっと大きな痛みと大きな快感を味わい、ぐったりとして夫の腕の中に抱かれている頃には、完全に日が暮れた。

「下まで行くのは辛いだろう？　上に何か持ってきて来させるよ」

その言葉を聞いたとたん、マギーの腹が鳴って、二人は嘔き出した。ロバートは呼び鈴を鳴らして、すぐに三種類のサンドイッチとスープ、ハムとソーセージの盛り合わせ、果物類そして熱い紅茶と言った物を続きの小部屋に運ばせた。上手い具合にそこにマギーが着る分の温かい部屋着が用意されていた。贅沢な猫足の寝椅子にマギーが座り、ロバートは背の付いたゆったりした革張りの椅子に座って食べるだけ食べると、またベッドに戻った。マギーはもう風呂の事は忘れていた。

夜通しかけてロバートが言う所の「集中レッスン・第一回目」が終了すると、もう夜明けが近いようだった。

「まあ、本当にポツポツと生えてくるのね」

マギーはゆっくりと手を動かして夫の顔を指先でなぞりながら、驚きの声を上げていた。

「君のここは極上のベルベットののように柔らかで、絹のように滑らかなのにな」

乳房は白くやわらかだが小さな頂点は堅く尖りそそり立っている。「あなたはここにもお髭が生えているわねえ」

無邪気なタッチで胸毛をなぞられると、ロバートはまた、兆して

きた。

「夜が明ける前に一眠りするつもりなら、あちこち撫で回さない方が安全だよ」

「撫で回したい気分なの」

ロバートは唸った。

「何ていけない子なんだ」

一瞬の動きでロバートはマギーを仰向けにさせて体を重ねた。

「だって、先生の教え方が上手過ぎて……」

「よし。嫌でも眠くなるように、今からみっちり仕上げだよ」

その言葉通り、ひとしきりレッスンの仕上げを終えると、二人とも深い眠りに入った。そして起きた時は、もう昼だった。二人ともゆっくり風呂に入り、お茶をゆっくり飲んでから、食堂に降りて、昨日食べ損ねたこの邸の女料理人の自信作らしいシチューと立派なガチョウのローストを食べた。シチューの方はヒップバスぐらい有りそうな大鍋いっぱいに出ていて、古風なデザインの暖炉の火でグツグツ煮えていた。田舎風の素朴な料理だが、手抜きをせず丁寧に作られていて、マギーが素材の取り合わせの良さと香辛料の使い方を褒めると、料理人も満更でもなさそうだった。

「温かみが有って、いい感じの部屋ねえ」

「古い農家って感じだけど、リラックスできるだろ？」

マギーは例のคอร์セットもクリノリンも無し of ドレスを着ていて、ロバートもラウンジスーツという肩の凝らない格好だ。

「うーん、髭がちょっと剃り残しが有るかな」

「見ただけじゃ分からないわ」

「ほら触って見て。チョッとざらついてるだろう」

「あら、まあ、ホントね」

フォーマルな食事なら考えられない気安さ親密さだ。給仕役の従僕は見て見ないふりをしている。クラレット一本を二人で開けて、食後のお茶を飲んだ。ラドストックはロンドンの留守宅を仕切っているので、上手にコーヒーを淹れる人間がいらないから、ロバートはお茶で我慢するらしい。

「庭を散歩しようか」

「着替えた方が良い？」

「庭から出ないならコートを着るだけで良いんじゃないか？」

散歩用のドレスと言う物も有るのだが、食事に着替えた服の上にコートを着てボンネットを被った。

「巨大なクリノリンが無くて、むしろ僕はこういう方が好きなんだ。そのドレス可愛いし」

「こういうちょっと人に会っても体裁が悪くないコルセットもクリノリンも要らない服、流行るってリジーが言うんだけど」

リジーはロバートやマギーと別の馬車に乗って、この邸に到着していた。

「リジーってミリーの妹なのか？」

「そうなの。顔も似てるわよね」

「なんかこの邸の連中と、もう馴染んでたみたいで驚いちゃったよ」  
「亡くなった旦那さんの実家の小間物屋さんを、繁盛する店に育て上げた人だから、やり手なのよ。結婚前はドレスメーカーで御針子をやっていたから残り布を使って、ドレスとおそろいの小物を作ったり、ちょっとした修理をしたりも得意なの。頼りになるわ」

今日も入浴後、最新流行の化粧品を抜きなくそろえて、マギーの化粧の手助けをした。といっても保湿とか美白とかが主で、おし

ろいは殆ど無しだが。口紅もごく薄くに留め、それでも顔映りのよい色を選び、眉の描き方一つにこだわることで随分顔の印象を変えることが出来ると丁寧に教えてくれた。

「何もなさらなくてもお綺麗ですが、こう致しますと朗らかで優しい感じになりますよ」と言われた通りになった。

「ちょっぴりお化粧したんだね。なんかいつもとちょっと雰囲気が変わって、ドキドキするな」

「まあ、本当？」

「名実ともに僕の奥様になったせいかも知れないが」

手と手を取り合って、緩やかな坂になって広がる広大な庭園をゆっくり降りて行く。冬の事で花は見当たらないが綺麗に丸く刈り込まれた常緑樹の垣根が続く。途中にギリシャ風や中国風のおずまやが有る。その中国風のおずまやの周りには、黄色い小さな花を一杯咲かせた樹が植えられている。

「ここは冬でも咲く花が集まっていて、なかなか良いだろう」

「まあ、この黄色い花、沢山元気に咲いているのね。ジャスミンの仲間かしら？」

「ああ、そうなのかな。僕は分からないが、ここの庭師なら知っているよ多分。東洋の花らしい。こっちのビブナム・ティヌスは僕も名前を知っている」

「私はヴァイバーナム・タイナスって言うふう聞いた事が有ったんだけど、どっちにしてもラテン系なのね。地中海の方のものかしら？ 白い花が丸く集まって、綺麗ねえ」

「ほら、眺めも良いし」

他にも名前のわからないピンクや紫の花、紫色の実のなる樹なども植えられていて、冬でも彩豊かだ。



「すてき！ この道って、海まで続くの？」

「ああ、続くよ。庭は途中で終わるが」

「ちょっと見てみたいかな、海が」

「今から、行くかい？ 馬車で外の道伝いに出た方が簡単で早いだろうが」

「今日はいいわ。散歩服を着てこなかったし」

「リジーに怒られるか。馬でも行けるよ。何なら、明日行ってみようか。その植え込みの影に500年以上前の修道院の跡が残っているんだ。そこに嘘か本当か知らないが、妖精が出るって言うんだけど、僕は見た事が無いな。亡くなった兄は見たようなんだが」

「どんな妖精なのか、おっしゃっていた？」

「白い羽の生えた小人らしいよ」

「その妖精は人間と話をするかしら？」

「ここの邸の者達に、後で聞いてみるかい？」

その瞬間、ゴーツと強い音がして海からの風が吹き抜けた。

「な、何か妖精の仕業かしら、強い風が一瞬吹いたわね。ちょっと寒いわ」

「じゃあ、邸に戻ろう。ベッドで温めてあげるから」

「な、なんて、返事をすればいいの？」

「黙って一緒においで」

今までマギーは気が付かなかったが寝室から直接外に出られるテラスが庭と続いていた。そこから使用人たちの居る辺りを通らずに、ベッドに戻ることが出来た。すっかりシーツは取り替えられたわけだったが、マギーの初めての印も使用人たちは目にしただろう。それに気が付くと、マギーは急に恥ずかしくなった。

「さ、一杯」

ブランデーを小さなグラスで差し出されて、マギーはそれを飲みほした。体温が急に上がったようだった。気が付くとロバートに抱え込まれていて、あつという間に胸は露わになり、ドレスとペチコートをかき分けて、太腿の内側を撫でさすられていた。

「この服は君に似合うし、脱がせやすいし、実に良いぞ」

ロバートが胸の頂きを口に含む頃には、マギーも悩ましい小さな呻き声を上げ始めていた。

「良いねえ、素敵だ。マギーと僕は体の相性も抜群みたいだよ。ほら、わかるかい？」

マギーは言葉にならない声を上げ、首を振って肯定した。この分なら皆の期待の跡取りを授かる日も、そう遠くは無いのかも知れない……そんなことが、マギーの意識によぎったが、後はもう、何が何だか分からない程に翻弄されてしまった。こうした行為にあまりに夢中になるのははしたないとか、あのレディ・キャロライン・ラムのようにふしだらだとか……そんな事を母が言っていたのではなかったか？

「こんな、こんなにふしだらでも……いいのかしら？」

ロバートは最初意味が分からなかったが、その言葉を口にした理由がわかるところささやいた。

「馬鹿だなあ。正式に結婚した夫婦同士で夢中になったって『野暮だ』とか言われるかもしれないが、ふしだらとは言われないさ。それとも何か？ お互い別々に愛人を持つ方が良いの？」

「いやよ、そんなの」

「じゃあ、全然気にしなくていいんだ」

「そうなの？」

「そうだよ」

変な所が生真面目で古風で、その癖情熱的な反応をする妻が、ロバートは愛しくてならなかった。

安心してロバートにマギーが応じた結果、事が果てると二人はまた、より添って眠りこけてしまった。

ディナーの時間になっても一向に食堂に来る気配のない主人夫婦の様子を、そっとリジーが見に来たが、ベッドで一塊になっているらしき寝具の高まりを見て、すぐに部屋を出た。そして今夜はディナーを取りやめて、軽い夜食かいっその事すっかりした朝食を準備しておいた方が良く、調理場に伝えに行っただった。

## ウォーラム・アベイにて・2

「マギーはそう言う色も似合う。可愛いな」

ロバートが褒めた部屋着は薔薇色のシルクサテンに金色のブレードとリボンを飾ったふんわりした優しい雰囲気のものだった。寝室の続き部屋は窓税の事などこれっぽちも気にしないと云った感じの、大きな窓が有り、そこから庭をすっきり見下ろせる。冬の午後の日差しの中で二人はお茶を飲んで寛いでいた。

「ここをちよっとうするだけで、上手い具合に脱がせやすいのも良いな」

ロンドンから到着して以来、邸の敷地内にずっと留まっていて、庭以外どこにも出ていない。それでもマギーもロバートもちっとも退屈には感じていなかった。

「もう、ロバートったら」

「ロンドンに戻ったら、こうはいかないだろうな」

「ねえ、この邸ってブライトンにかなり近いの？ ロンドンから汽車に乗って、ブライトンから馬車と言う方が本当は早かったのかしら？」

「ブライトンは一番近い大きな町だ。ロンドンとブライトンの間は汽車だと二時間だが、普通の馬車なら六時間程度かな。馬車の乗継やら何やら考えると、最短の特別な道筋を良い馬に引かせて、馬車でずっと走ってきた今回の旅程より手間取るはずだ」

「今回の道は、普通じゃないの？」

「まあね。うちの領地やら私有地やらをぶった切っている感じだからな。幾つかのポイントは秘密の関所みたいに仕切っているから、

部外者は使えない道だよ」

「道理で全然他の馬車を見なかったわけね」

嫁いだこの家は十一世紀のサクソンの大領主の流れを汲む古い家柄だけの事はあるようだ、マギーは今更ながらに驚いた。

「実はさ、鉄道敷設事業には僕も参加はしたが、他の土地をどう利用するかまだ考え中だよ。鉄道への投資は過熱気味だから、ちょっと冷静になった方が良さそうだし、土地を売るにしたって、計画的に開発して売り出す方が賢いだろうから、今は様子見だな。綺麗な森が多いが肥えた土地じゃないし、狩猟ぐらいかねえ」

「折角の森の景色も何も見ていなかったわ」

ロンドンからの馬車の中でもロバートがしきりに体を愛撫し、キスをするので、マギーとしては景色どころでは無かったのだ。

「また夏になったらこの邸に来ようか。庭の薔薇も、他の花もたくさん咲くよ」

「あの海辺に羊がいるの、ああいう景色は見るの初めてよ。フランス人ならプレスレって言いそう」

潮風を浴び、塩分を含んだ土地で育った牧草を食べて育った顔の黒い羊たちの肉は、おそらくフランス人たちが珍重するような、ほんのり塩味の柔らかく旨味の多いものだろう。

「ああ、それを狙ってるんだ。ブライトンにやってくる連中の御馳走用にして飼育させているんだが、商売として悪くないよ……今日のディナーは子羊が出るかもしれないな」

窓から景色を眺めているマギーの後ろにロバートは回り込んで、

スカートを捲り上げた。マギーは自分の脚に押し付けられたたくましい太腿の感触だけで、意識が遠のきそうだった。どうやら、灯りをともさなくても十分に明るい時間からベッドに行こうという事らしい。

「ディナーに遅刻しないようにするよ」

わずかな隙に着ていた部屋着を脱がされてベッドに入れられてしまふ。何だか昨日より更に手際が良いようだ。マギーは思った。ロバートは今日は気楽な格好の所為か、すぐに裸になってしまった。マギーは自分の視線をどこに向けるべきなのか戸惑い、目を閉じた。

「僕らの間には、何の秘密も無い。お互い生まれたままの姿で認識だ」

「それにしては随分大きく育ってしまっているけど？」

ついマギーはまた眼を開けて、まだ見慣れてはいないその器官をまじまじと見てしまった。その視線の向きに気づいて、ロバートは噴き出した。

「確かに。マギーの言うとおりだ」

髪を洗いっぱなしで整髪料を使っていないせいか、ロバートのウエーブのかかった黒髪は乱れて、どこか野生の獣のような妖しい雰囲気を感じさせる。鋼色の瞳に真っ直ぐ見つめられると、それだけで心臓がどうかなってしまいそうだとマギーは思った。ロバートの大きな手が滑らかな肌の感触を楽しむようにして動き、肩から首筋、胸、下腹へと降りて、片方の手がやがて脚の間に入り込み、マギーの体の芯に辿り着いた。

「どうやら僕を待っていているみたいだね」

確かにマギーの其処は熱くたぎって、ロバートを待ち受けているようだった。

「……ええ」

ロバートは半ば開いて熱い息を漏らす唇に、舌を潜り込ませ深いキスを続けた。

マギーは体をもっと摺り寄せて、ロバートの愛撫に応えた。

「あああつ、ロバート」

高まる喜びに身をよじり、マギーが思わず声を上げた瞬間、二人は一挙に繋がった。更に互いに深く激しくもつれ合い、燃え上がり、同時に喜びの頂点に達して二人とも声を上げ、押し寄せる喜びに浸った。

ギリギリで間に合ったその日のディナーはラム肉の燻製だったが、余りに美味しくてマギーは驚いた。そしてさっそく作り方を習う。そしてお返しにラムをフランス風にクラレットで煮込んだ料理を教えた。料理人はちよつと頑固そうな五十がらみの女だったが、マギーの腕前のほどは認めた。だが……

「奥様が見事な腕前をお持ちなのはわかりましたが……貴婦人にはやはり似つかわしくないと思います」

余り出しゃばってほしくないと言う事でもあるらしい。

「ですが、私の腕によりをかけた部分はちゃんと分って頂けるのは、嬉しいですよ。もっとも手抜きが出来ないから、ちょっと怖いですが」

嫌われた……と言う訳でも無さそうだった。後はフランス風のタルトのあれこれや、更には冷たいデザート類に関して情報交換をして、程の良い所で切り上げた。デザートのレストランは褒めた出来ではなかったが、それを直接言うのは憚られた。レモンは、ことに冬場のレモンは貴重品で、その貴重品を惜しむ事なくたっぷり使った……そうした意味合いも恐らくあるのだろうし。

「レモンパイだろ？ 文句言っておいたかい？」

「んー、言いそびれたわ。パイ以外は美味しかったんだし。新米奥様が出しゃばっても、いいのかしら」

「新米でも何でもマギーは実質我が家の女主人だよ。自分の考えをはっきり表明しても構わないと思うな。事実あのパイは酸っぱすぎて、お客に出せる味じゃ無かったし」

「じゃあ、明日、我がままを言ってパイを焼きましょう」

「レモンパイ？」

「温室にあったオレンジを使ったパイにするわ」

「無理の無いようにね……僕が無理をさせちゃうと思うから」

「え？」

「そう言う事」

気が付くと、またベッドに戻っているのだった。

「何だかベッドと食堂を行ったり来たりして時々お風呂に入って庭を散歩するだけなんて、退屈かと思ったのに……」

「それでもないだろう？」



そうだともしはつきり返事をしかねて、マギーは赤くなった。

「マギーって、変な時に照れるんだね」

「だって……母やミリーに色々聞かれるでしょう、そうしたら、なんて言えればいいのかって」

「僕と仲良くしていたって言えば、それで十分だろうに。もしかしたら子供が出来たかも知れないとか？」

「どうなのかしらね？」

「マギーが跡取りを産んでくれないと、キーネス侯爵の爵位も領地もロクデナシの再従弟<sup>ハトコ</sup>に持って行かれてしまう可能性もあるからね。母は激しく嫌っているし、父は出入り禁止にしたんだが……」

「という事は、結婚式には来ていなかった人なのね？」

ロバートの祖父・先代キーネス侯爵には弟が二人いたが、息子がいて孫も生まれたのは一人らしい。息子の代まではまあ、まともな人たちだったらしいが、ロバートから見ると大叔父の孫息子にあたる人物は胡散臭い事この上なくて博打狂いで、なおかつ異性関係も爛れているらしい。

「うちの家系の常で、顔だけはそこそこ綺麗なんだが、腹の中は真っ黒けだ」

「ロバートも？」

「黒くないとは言わないが、マギーに対しては少年のように真っ直ぐな気持ちだよ」

そのハトコは素行不良でパブリックスクールを退学して以来、各地の社交界に出入りし、イカサマ賭博と財産の有る女性を丸めこむ事で生活してきたらしい。

「かなり有名な人かしら？」

「悪名はそれなりに高いかな。マギーのお祖父様も僕に用心するようにおっしゃった。マギーは知らないだろうが……奴はただのイカサマ賭博師というだけじゃなくて、二重スパイなんだと言う噂だ。ともかく奇怪な男さ。こういうベッドでの事だって、奴は上手いだろうから、どこかで出くわしたってマギーは油断するんじゃないよ。幸い王配殿下はあいつを王宮に絶対に立ち入らせないとお決めになったようだから、当分は大丈夫だろうが……僕らの結婚の噂を聞き付けて、変な事を仕掛けてこないとも限らないからな」

「バイロン卿のような人？」

バイロンの金目当ての結婚とスキャンダラスな一生は、まだ皆の記憶に新しい。

「バイロン卿は紛れもない文才が有ったし、相手にするのは美女と美少年ばかりだったらしいが、奴は違う。自分に気前よく金をくれそうな女ばかりを愛人を選ぶんだ。そして不味い事が有ると、別の国に逃げる。その繰り返しだ。ロシア貴族に女がらみの恨みで殺されそうになったし、フランス貴族の女性を自殺に追い込んだり、プロシアで決闘して相手を殺したりもしている。年は僕より五歳下で、顔は少し似ている。実に不愉快だが」

幾度か遭遇した時にロバートが受けた印象は、非常に悪いものであった様だ。ロバートとしては知り得た祖国の外交上・軍事上の機密事項も金と引き換えに外国に垂れ流すのを何とも思わない男だと言う点が、一番許せないらしい。その男は上流社会の夫人たちを「誑かして」情報を仕入れているようだ。

「それこそオールマックスに居たりする？」

「遭遇する可能性は有るな。奴は口は上手いから用心してくれよ」

ロバートもマギーもカード賭博なんてやるつもりも無かったし、オールマックスに行くにしたってレディ・バーバラとエセルのお供以外有り得ないだろうから、そのロバートのハトコであるレイフ・ボーダナムと言う人物と自分たちの接点が、出来ると思えなかった。

「ともかく、そんな奴に付け入られないためにも、しっかりやらなくちゃって事さ」

「しっかり？」

「子作り。マギーの子なら顔も綺麗で、頭も賢いだろう」

「どうかしら？ ロバートに似ると良いんだけど」

「どっちに似たって、可愛いって事さ……さて、夫婦の神聖なる義務に励もう。ね？」

既にロバートもマギーも何も着ていない状態だった。そしてしばらくは酸っぱすぎたパイの事も、問題人物であるレイフ・ボーダナムの事も忘れることにしたのは言うまでもない。

## 招かれざる客・1

「恐れ入りますが、お引き取り願います」

「新たに相続人となられた方が御結婚されたと伺えば、親戚としてはお祝いの一つも申し上げたいのだが」

「ともかくもお引き取り願うようにとの事です」

バージル・メルダは自分に割り当てられた二階の子供部屋の窓からライブオークの大木の上に移った。自分と同じ新大陸の森からこの邸に来たと言うこの常緑のオークは登りやすく、彼のお気に入りだった。ほぼ彼の実父であるらしいセルビー伯爵ロバート・ボーダナムも少年時代は良くその樹に登っていたものだ、とラドストックが教えてくれた。

「いくら皆が注意しても聞いては下さいませんで」とラドストックは苦笑いしていたが、セルビー伯爵との主従関係が冷たいものではないという事がバージルにも感じられた。「木登りが好きな人間にそう悪い奴はいない」と言うのがバージルの亡き母親の意見だった。だから自分と言う子供も出来たのだろうか、とバージルは思った。

この樹に登ると、正門から車寄せにかけての一带が良く観察できる。

馬車は一頭立てのいわゆるハンサムキャブと呼ばれる辻馬車だ。

だが、出てきた男はピカピカの帽子と言いフロックコートと言い、それなりに「紳士」だと身なりで主張している感じだった。片眼鏡と言うかモノクルと言うか、何ともスカした感じた。ひねりあげたような口髭も気取っている。男は門番と幾度も押し問答を繰り返した拳句、中に入れないとなると唸り声を上げステッキを振り回して、塀から伸びた木の枝を叩いた。

「ステッキを振り回して人の家の庭木の枝を折るなんて、紳士じゃねえな」

バージルは自分のつぶやきを聞かれたとは思えなかったが、片眼鏡の男の鋭い視線が一瞬向けられたような気もした。馬車には赤ん坊を抱いた女が乗っていたようだった。赤ん坊の泣く声と、あやす女の声がしたのだ。男は再び馬車に乗り込み、女に向かって語気荒く何か言っているようだったが、すぐに馬車が走り去ったので、会話の内容は全く分からない。

ちょうどその時、木の下をラドストックが通ったので、バージルは急いで樹から降り、呼びとめた。

「なあ、今日もあの門の所で騒いでいた男、何者なんだ？ 結婚式

の翌日から連日でしつこいけど」

「ああ、あの方は先代の侯爵さまの弟君のただおひとりの男のお孫さんで、レイフ・ボーダナムとおっしゃる方です」

「今日は赤ん坊が居たみたいだ」

「赤ん坊ですか？」

「うん。乗ってきた辻馬車から赤ん坊の声と女の人の声がした」

「かの方も御結婚なさったのでしょうか……」

ラドストックは考え込んでいる。

「不在のマ……マダムと伯爵に伝えなくて良いのかい？」

バージルはついとうっかりと「マギーさん」と言いそうになるのだ。

「そうですな。せっかくの休暇を楽しんでおられるのに、どうしたものか悩むところですが、連日ですからなあ……お伝えすべきでし

ようか」

「うん。俺はそう思う。あのモノクルのオッサン、何か物騒な雰囲気だったからさ」

「あのう……恐れ入りますが、言葉遣いを直して頂かないと……お留守中のお世話役を務める私としては、やはり困ります。それに木登りもですな……まあ、あまり目立たないようになさって下さい。ともかく、あのレイフ様のご様子は不穏ですな。やはりお伝えしておきます」

「でもさ、何で親戚なのに門の中に入れないんだ？」

「あまりまともなお暮らしぶりの方ではないのです。パブリックスクールを退学なさって、御自身の父君からも勘当されてな、その後どこで何をなさっていたのやら、あちこちの外国までおいでになっっていたようですが、まともなお暮らしぶりでは無いと聞きます。この邸に出入り禁止となられた細かな事情を私は存じませんが、大旦那様と大奥様が大層お怒りになる様な不祥事が御座いましたのは確かです」

「メイドの連中が噂してたみたいにな、何か女関係でいろいろあんの？」

「はあ。まあ。余りそう言う話はなさらん方が宜しいですよ。ですが、おっしゃる通りです。色々な女の方と親密になられて金銭を得ておいでようです。後はカードですな」

「イカサマとか？」

「そう言う噂も有ります。事実そうなのかどうかは知りませんが」

ラドストックはバージルの教育係兼監視役兼話し相手と言う所だ。マギーがそうすべきだとロバートに提案して、ラドストック自身も賛成したのでそのようになったのだ。おかげでバージルは今のところは見える形での差別や、不愉快な取り扱いは受けずに済んでいる。

「今日は、マギーさんのじいちゃんが来るの？」

「ミスター・メルダ！」

「あ？ ああ、ごめん。マダムのお祖父様がおいでになるの？」

「大旦那様と御一緒に昼間の御食事を召し上がることになるようです。あなたはマナーがまだまだでいらっしゃるから、食後、お目にかかる事となるでしょう」

「飲み食いの時の音は、結構小さくなっていると思うんだけどな」  
「ナイフとフォークの音も大切です。姿勢も。ハーグリーブス夫  
人と御一緒に召し上がって、注意を受けられた点は、きちんと守って  
行かれるようお願いいたします」

食事のマナーはハーグリーブス夫人と一緒に食べて学んでいるバ  
ージルだが、まだあまり身につけていないのだった。

「食べた物が美味いと、つい、いろいろ忘れるんだよね」

「出された食事が美味しかったと思われるのは結構ですが、美味し  
さを楽しみながら優雅にふるまえるようになるのが目標ですよ」

「ああ、貴族の家って、面倒だね」

「それは否定しませんが、あなたも御家族の一員と皆に認められる  
ように、努力なさってください」

「あー、わかったよ、やりゃあいいんでしょ」

「ミスター・メルダ！」

「分かりました。努力いたします、ラドストックさん」

「適切な言葉をお使い下さい」

「わかった。努力しよう、ラドストック」

「結構でございます」

適切な教師がまだ見つからないので、マギーからの宿題のラテン  
語とギリシャ語の初歩の書き取りはラドストックがチェックしてい  
る。英語の読み書きは不自由が無いので、バージルは様々なジャン

ルの本を読み漁っていた。一番熱心に読んだのは博物誌的な著作や様々な人物の旅行記だが、大人の女性向けの法律相談に関する本とマナーに関する本もしっかりチェックした。そしてラドストックやハーグリーブス夫人にも質問し、大半の内容を理解し記憶したのだった。

昼になって、マギーの祖父であるアフトン公爵がやってきた。この邸の大旦那様、つまりキーネス侯爵と昼の正餐を楽しむ事になっているようだった。

「食事が終わったら、お会いするの？」

「そう伺っております」

「ナイフとフォークの音、ずいぶん減ったと思うけどな」

「わずかな期間に大変な進歩をなさった事は……認めましょう。ですが、王族でいらっしゃる高貴な方と御食事なさるのは、まだ、無理ですね」

留守の間の食事はミリーが出している。そのせいか朝食に高価な卵が出てこなくなった。代わりに手ごろな値段の燻製ニシンが出てくるようになったのだが、それがハーグリーブス夫人は不満なようだった。これまで出なかった果物が出るようになったのでバージルは不満には思わなかったのだが……

「昔からミリーはケチですからねえ。さすがに今日は、そうもいかなかったでしょうが」

「マ……マダムはそうおっしゃってなかったけれど」

「お仕える方には、無論、あの人だってケチクサイことはさすがにしませんよ」

「昼間っから、ごちそうだね」

「確かに、かなりのものですね」



「お客様はもつとごちそうなんだろうね」

「前菜とデザート、パン・チーズ以外は同じものだそうですよ」

中身は同じでも、食器類が歴然と違う。客用は優雅で繊細な最高級の磁器か銀であるのに対して、こちらは実用一点張りの白い陶器だ。それでも貧窮院あたりの金属製のたらいのような入れ物に比べれば、ずっとまともで上品だが。ナイフとフォークも客と主人が使うのは銀製なのに対して、こちらは鋼だ。

カリフラワーのクリームスープで始まって、ロブスターのオレンジソース、ローストチキン、たっぷりの葉野菜のサラダ、焼きリンゴだった。どれもなかなかおいしいとバージルは思うが、ハーグリーブス夫人は葉野菜だけのサラダも、デザートがずっと焼きリンゴなのも気に入らないようだった。

「お客様のデザートは、何なのかな」

「アーモンドクリームのパイらしいです。公爵様や大旦那様とのお話が首尾よくいきましたら、御褒美にお出ししましょう」

マギーの祖父であるアフトン公爵とロバートの父キーネス侯爵は、絵画の話で盛り上がっていた。

「ホガースも良いですが、今の画家ではやはりターナーでしような。コンスタブルは亡くなりましたし」

「確かに、ターナーは良いですな。水しぶき、波、それにあの蒸気機関車を描いた作品は驚かされました」

「ターナーは風景画ですからな。ロバートと新妻の肖像画が欲しい所なのですが今は安心して肖像画を依頼できる、ゲインズバラのよきな画家がおりませんなあ」

「いっその事写真で良いのでは無いですか？」

マギーさんの祖父ちゃんは老人だが、頭の柔らかい人なのかもしれないとバージルは思った。

「写真ですか！」

「こちらの様に古い御家柄だと、そうもいきませんでしょうな。お、来てくれましたな」

バージルが一応、それなりに格好の付いた型どおりの挨拶をする  
と、老人二人は好意的な視線を向けた。そして、マギーの祖父はバージルに土産をくれた。

「世界中の色々な場所の鉱石の標本だよ。君がそういった方面に興味があるようだと言ったのでね」

細かく区切られたガラスの蓋つきの木箱に、様々な地域の鉱石類が産地と名称のカードと一緒に収納されている。十個の石が入っている方は「硬度計だよ」との事だった。そしてフリードリッヒ・モース教授の著作で英訳された物をつけてある。

「ありがとうございます！ 興味はすごく有ったんですが、現物を見るのは初めてです」

バージルは興味が有る分野だけに、非常に嬉しかった。

「ダイヤモンドではないですか？」

キーネス侯爵は十番目の鉱石がダイヤなので驚いたようだった。  
「亡くなられたモース教授の考案した硬度計では、一番堅い鉱石がダイヤモンドなのですよ。これは宝飾品となる様なものとは違いますが、確かに一応ダイヤではありますな」

「今まで本で読んだだけだったり、話に聞いただけの珍しいものが  
沢山ありますね。貴重なものがあります」

「君は何に興味を持ったかな？」

「この砂漠の薔薇、でしょうか。一体どうやってこんな形が出来るのか知りたいものです。それにこの琥珀の中に閉じ込められた小さな生き物が生きていた時代、この世界はどんな様子だったのかと思います」

その答えはアフトン公爵を喜ばせたようだった。

「ふむふむ。明日にでも私と一緒に大英博物館に遊びに行かんかな？」

「え？ 宜しいのですか？」

バージルが是非一度は行ってみたいと思っていた場所が、大英博物館なのだ。

「どうですか？ お孫さんを連れて私の懇意にしている若い研究者達に引き合わせたいと思うのですが」

「どのような研究をしている人々ですか？」

「鉱物、植物、動物そして古代の生物ですな」

その場で、翌日に大英博物館に出掛けると言う話がまとまった。

それからバージルは自分で贈り物を持って、退出しようとしたら珍しく従僕が近づいてきて「お持ちいたします」と荷物を持ってくれたのだった。無事に自室に戻ったバージルは、大切な会見を上手く終えた御褒美として、美味しいアーモンドクリーム入りのパイを食べた。

翌日はバージルも紳士らしい身支度をキチンとして、午後からアフトン公爵とキーネス侯爵と共に見事な四頭立ての馬車で大英博物館に行き、様々な展示物を見た。美術系の展示しかこれまであまり見てこなかったらしいキーネス侯爵も、アフトン公爵の話聞きながら見る鉱物や標本類は興味深く感じられたらしい。そして、研究員達を訪ねて、様々な興味深い話を聞いた。バージルは尋ねられる

ままに新大陸の森の中で見聞きした様々な事象について詳細に語り、研究員たちを喜ばせたのだった。そして帰り際に「これは君に上げよう」と一冊の本を渡されたのだった。

「何の本を貰ったのかね？」

侯爵はこの風変わりな孫が貰った物が気になってならない様子だった。

「プロシアのフンボルト教授の『自然の風景』です」

するとアフトン公爵は我が意を得たりと言う表情で、微笑んだ。

「それは名著だ。フンボルト教授は今、研究実績をまとめる様な著作を書いている最中らしいよ。出来ればドイツ語のままで読めるように頑張ったまえ」

その日以降、バージルは祖父であるキーネス侯爵と共に夕食を取るようになったのだった。そしてバージルはラテン語とギリシャ語に加えて、ドイツ語の勉強も始めたのだった。

「ふさわしい教師が決まるまで」キーネス侯爵が教える事になったようだったが、使用人たちの見るところでは、それを侯爵も楽しみにしているようだった。

## 招かれざる客・2

ロバートはウォラム・アベイでの休日を切り上げたくは無かった。だが、ビジネスの方は待ったなしであるわけだし、レイフ・ポーターダムがレイストン・ハウスにまで押し付けてきたと言うのも気になる。マギーはマギーでバージルが心配らしい。

「僕よりもバージルを心配するなんて、なんか妬けるな」

「ロバートは大人だし、何か有ってもどうにか上手くやれそうだし、こうしてすぐ傍に居るけど、バージルはまだ大人じゃないし、何か困った事に巻き込まれていないか心配なの」

「困った事？」

「そうねえ、まずは使用人たちとの間で何か不愉快な目に会ってないかとか、気になるわ」

「ラドストックもミリーもハーグリーブス夫人もいるさ」

「ラドストックとミリーは最初の経緯が有るから、親近感を持っていると思うけど……バージルの身内というか味方と言う程でもないでしょう？」

「三人を味方にできるかどうかは、バージル次第だ」

「……厳しいのね。ロバートは味方にならないの？」

「大学卒業までは面倒を見るんだ。それ以上何をどうしろと」

「学費と食費と住居の心配がとりあえず無いのは大切な事でしようけど……父親として、何か有ると思わない？ あなたもこの国の貴族にありがちな子供はほったらかし、で十分だと思うの？ 私が子供を産んでも使用人たちに押しつけて、何日も顔を見なくても気にしない……そんな感じになっちゃうのかしら？ 私は……もし子供が生まれたら、ある程度は自分でも育てたいわ」

この国の貴族の家庭では子供は子供部屋で乳母<sup>ナニ</sup>と暮らし、両親は

指定された時間に身なりを正して「御挨拶する」気の張る相手である、と言うのが珍しくない。マギーのように母親の手で育てられた、と言うのは上流階級の子女としては非常に珍しい。ロバートのように成人してから毎日のように父親と食事を一緒にする息子と言うのも、実は相当に珍しいのだが。

そうした冷え切った親子関係は、貴族の夫婦は有名無実で、互いに「体面を穢さない範囲で」愛人を持つのが当たり前だと言う事実と背中合わせだ。子供は家の存続に必要なだけで、愛情の対象では無い事が多い。

「マギーは僕の大切な奥様で、マギーが生んでくれる子は無論僕の宝物だ。……バージルは、悪い子じゃないし、マギーの言うように賢いんだろう。でも、なんか、あの子の父親だって実感が無いんだ。あの子の所為じゃないんだが」

「バージルは新大陸から一人で父親を捜しに来るぐらいですもの。賢いし、年よりもしっかりして強いけど、まだ大人じゃないわ。私に子供が生まれたら、バージルの弟か妹なのだし、もっとその……」  
「もっと、何が必要だっていうんだ？」

「もっと、ちゃんとバージルを見てあげてほしいの。それだけでも随分違うと思うの。そしてロバートの中の『父親らしさ』が育てば、きっと全部が良い具合になると思うのよ」

「バージルは庶子だ。マギーが生む子は嫡子で、息子なら僕の跡取りだ。未来のキーネス侯爵なんだ。立場が違う。それをバージルはわきまえるべきだ」

「わきまえていると思うわ。ロバートだっていかにも貴族らしい冷たい家族は嫌なんでしょ？ バージルは爵位や領地の継承は出来ないけれど、あなたの息子よ？ もっと家族として扱うべきだわ」

初夜から三日の間は何の言い争いも無かったが、四日目以降ロンドンに戻ってからの事を話しはじめると、少し事情は違ってきた。

ロンドンに戻ってから、誰と食事をするべきかで、ロバートとマギーは幾度か気まずい言い争いになりかけた。

「バージルと毎日食事をするべきだっていうのか？」

「せめて毎日顔を合わせた方が良いと思うの。それ以外の事は私が皆と話し合ってどうにかするから」

「そうしないとマギーが怒るなら、我慢するよ」

「おかしい理由ね。でもまあ、深く追求するのはやめておきましょう」

「そうしてくれ。それとベッドルームは続き部屋と言うのは譲らないからね」

「なんか気恥ずかしいけど」

「一番プライバシーの確保に気を遣ったんだから、大丈夫」

どうやらロバートはマギーとの時間を邪魔されるのを嫌ったようだった。最初ロバートは自分の独身時代の住まいにバージルを移そうと考えたようだったが、それにはマギーが反対した。せめて大学に入る時期になるまで待った方が良いと言う意見であったのだ。

「どうしても別居と言うなら、すぐ隣だから私の邸にすませたら？」とマギーは言ったのだが、それはやはり筋違いだとロバートは反対した。

「お父さまがどうお考えなのかしら？」

「そうだな。確かにどう考えているのか、バージルの件について話した事は無いな」

財政的な事をすべてロバートに任せてしまった負い目のせいか、何によらず老侯爵は自分の意見をあまり口にしなくなった。食べ物の味については相変わらずうるさかったが。バージルの事はロバートが勝手にすれば良いという立場のようだが、確かにマギーの言うように意見を聞いてみるべきなのかも知れなかった。

金のやりくりはめっちゃだったけど、他の点ではまあ、人間としても貴族としても、まともな人だと時々ロバートは父を見直すようにもなっていた。

新婚夫婦を迎え入れるように新たに手入れた邸の東翼部分は、かつてロバートの両親が新婚時代を過ごした場所でもあった。部屋の用意が完璧に出来て数日後、ロバートとマギーは夫婦として一緒にレイストン・ハウスに戻ったのだった。

「バージルとはいっしょに夕食を取る事にした。それと早くしかるべき学識のある教師をつけてやらねばいかんぞ」

ロバートは父侯爵がはつきりそう断言したので、驚いた。それがマギーと同じ意見でもあったので、その夜から夕食は「家族全員そろって」取る事になったのだった。そしてその食事の席で、アフトン公爵と大英博物館に出掛けた折の話が出た。

「なるほど。では、バージルは自然科学の研究者の指導を受けるべきだとおっしゃるのですね？」

「ただの家庭教師なんぞ雇っても、あまり意味は無かろう。気心の知れん他人が一人増えるだけだ。ロバートは忙しいだろうが、私もマギーも色々教えてやれるからな。ドイツ語もフランス語も、ラテン語・ギリシャ語も大丈夫だし、美術鑑賞に音楽も多少は教えてやれるだろう。後は馬術やフェンシングも嗜み程度には必要かのう」

マギーは馬がバージルに懐いた事を話したが、それもロバートは初耳だった。

「バージルは新大陸で馬には乗っていたのでしょ？」

「うん。まあね。何しろ人間が少ない所で、馬がないと、隣の家に行くのも大変だったからさ。銃と弓はそこそこ使うけど、フェンシ



ングは全然やった事がないな」

「そこそこって、何か獲物でも取っていたの？」

「家の周りの畑を荒す鳥を撃ったり、野兎を撃ったという程度だけどね」

どうやら七歳ぐらいから馬に乗り、十歳にならない内に銃と弓を使うようになっていたようだ。

「ほう。森の生活には必要な事だったのじゃな」

「そうです」

バージルの森の生き物や気象に関する話が詳細で生き生きしているので、大英博物館の研究員たちを喜ばせた話を父侯爵がすると、ロバートは驚いた。

「なあ、ロバート。多少食事のマナーが変な事は、目をつぶっても余りある才能がこの子には有ると思うぞ。ドイツ語の覚えも早くてな。おお、そうじゃ、フランス語もかなり読み書きは出来るんじゃないよな」

「ちよつと行儀が悪くて、カナダ風に訛ってますけどね」

「じゃが、そこらのぼんくら貴族よりよほどまともに読み書きできるようじゃ」

フンボルト教授の著作をドイツ語で読めるようになりたいので、懸命に勉強しているとバージルが言うのを聞くに及んで、ロバートはバージルの扱いを「家族」とする事に対して、わだかまりを感じなくなった。

それから半月も経たない内に、ロバートは大英博物館の研究員でロンドン大学の教授を兼任する人物数名に話をつけ、日替わりでバ

ーシルの個人教師として通ってきてもらうようにした。皆、優れた研究者ではあるが、経済的には恵まれていない人々で、ロバートの支払う俸給は彼らの研究を手助けする結果にもなるのだった。

馬術とフェンシングは老侯爵が「運動不足を解消するため」旧知の名手に、バーシルと一緒にレッスンを受ける事にしたようだった。

「お父さまも、楽しそうでいらっしゃるわ」

「血色がよくなって、少し若返った様な気がするよ」

「これでお母さまがお元氣になれば、いう事無しなんですけどね」

だが、その母も二階の部屋から椅子駕籠で毎日下に降りてから車椅子に座り直し、マギーと温室で花を見たりお茶を飲んだりするようになって、ボケが薄れたようにもロバートは感じていた。時折すぐくまともな受け答えも出来るのだ。

「ねえ、ロバート、マギーは赤ちゃんが出来たのではないかしら？

まぶたの所がうつすらピンク色になっているし、何かそんな雰囲気があるのよ」

そんな事を言う老侯爵夫人の表情は呆けた人間のものでは無かった。だがこれが夕方近くになって、夕食を待つ頃になると、幼児に逆戻りする。だが、呆けていても居なくてもマギーを「息子の妻」と認識してはいるらしい。医師に言わせると呆ける以前からマギーの事を家族に迎えたいと思っていたから、であるらしい。

で、肝心なマギーだが、母の言うことはあながち出鱈目でも無かったらしい。その後妊娠していると判明したのだ。

キーネス侯爵家全体が祝賀ムードに包まれ、大騒ぎになった。各領地の差配人や教区牧師からの祝いの品や手紙も引きも切らなかった。夫婦二人で社交的な催しに参加したことがただの一度も無いに

もかわらず、隣り合わせの高位の貴族同士の縁組である為か、ロンドンに邸を持つ貴族全てからの何らかのアプローチがあった。曰く、良い乳母を世話するとか、妊婦向けのドレスを上手く仕立てる者を知っているとか……

「まあ、アメリカの友達からだわ」

マギーのもとにアメリカの大学時代の友人の手紙が届いた。何と最近、遠縁の準男爵と結婚してロンドンに住むようになったらしい。その友人が中心になってマギーのために「ベビー・シャワー」と言う催しを行った。最初はその言いだした友人宅で行おうかと言う話になっていたが、マギーの母であるレディー・バーバラが場所を提供する形になった。

「へええ、アメリカでは妊婦の親友や家族がそういう催しを行うのか」

幾度もアメリカには行っているロバートだが、そうした女性特有の催しは知らなかった。親密な友人と家族で行う祝いの茶会のようなものらしかった。

「ええ。スーは自分の仲良しが妊娠したら絶対ベビー・シャワーをやろうと決めていたみたい」

どうやら妊婦の夫は参加すべきであるようなので、ロバートもこわごわ参加した。そのスーと呼ばれる友人は顔が広いらしく、全部で十名、大学時代の同級生で大西洋を越えてこちらに嫁いだ女性が集結したようだった。イングリッドだけでなくスコットランドやウェールズからと言う者もいたようだった。ロバートはもっぱら話の聞き役、ホスト役に徹したが、何ともはや、姦しい。

「マギーって、本当に貴族だったのね。なんかあたしまだ信じられない」

「すごいお邸ね」

「こちらはご実家で、通りから良く見える大邸宅の方がお嫁入先なの？　へええ」

「お母さまもお綺麗、さすが本物のレディって感じの方ね」

「旦那様、すてき！　きつとかわいい赤ちゃんが生まれるわ」

アメリカの女性は物言いが率直で遠慮がない。それがまた美点でもあるが、ロバートは少し苦手だ。

「初めてお父さんになれるお気持ちは？」

「ああ、あのね。ロバートには息子が一人いるの。とっても賢い子なのよ」

「あれ？　そうなの？　ごめんなさい、私、旦那様も初めて結婚されたってウチの姑から聞いていたから」

「それはそうなのよ」

「え？」

「あの、それって私生児って事？」

「お母さんはねルイズ・メルダなの」

「えー？　あの森の狩人の？」

「熊殺しの？」

「そう」

それからロバートは質問責めにされた。そしてバージルを連れ帰った時から今での状況について、問われるままに答えると、皆は一応納得したもの……

「もう他に私生児なんて作らないで下さいね」

「何だか心配だわ」

ロバートにしてみれば散々な言われようだった。

「みんなが心配してくれるのはわかるけど、ロバートは誠実な立派な旦那様なの。そしてバージルは私にとっても大切な家族よ。だからそんな言い方は止めて。それをわかって下さらない人とは、今後はお友達づきあい出来ないわ」

マギーはかなり怒っていた。その顔を見て皆、シュンとしてしまった。

「みんな、そんな事じゃ、集まるように声をかけた私がいけないみたいじゃないの」

「スーは悪くないわ。私が変な風に話を持って行ったのがいけないかったのよ」

「マギーがそこまで言うんだから、その男の子もきっと良い子だね」

最後は淹れ直したお茶と美味しいアップルパイを皆が味わって、穏やかな友好的な雰囲気が終わらせることが出来た。ロバートとしても、やれやれだった。そして、ロバートもマギーもこの時は、あの厄介者のレイフ・ボードナムの事など、きれいさっぱり忘れていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5371x/>

---

彼女は気になる料理人

2011年11月18日11時35分発行